



平成30年度
県立広島大学大学教育再生加速プログラム（AP）
事業報告書

平成30年度 県立広島大学大学教育再生加速プログラム（AP）事業報告書 目次

内容	ページ
第1章 県立広島大学AP事業の概要	3～14
1-1 事業の全体像と平成30年度の取組	4
1-2 取組概要資料（ポンチ絵）	9
1-3 事業推進体制	10
1-4 学内会議開催状況	11
第2章 県立広島大学型アクティブ・ラーニング（CLAL）の推進	15～36
2-1 取組概要	16
2-2 行動型学修の推進	16
2-3 参加型学修の推進	23
2-4 アクティブ・ラーニング実践事例集の作成	24
2-5 アクティブ・ラーニング推進の成果検証	27
第3章 ファカルティ・ディベロッパー（FDe r）の養成と組織的教育改善	37～68
3-1 取組概要	38
3-2 FDe rによる組織的教育改善の推進	39
3-3 平成30年度FDe r養成講座の実施	41
3-4 先進事例調査の実施	66
3-5 教員の教育改善活動を評価する業績評価制度の検討	67
第4章 学修支援アドバイザー（SA）の養成と教育・学修支援活動	69～76
4-1 取組概要	70
4-2 SA募集・養成実績	71
4-3 活動実績	71
4-4 「教・職・学」協働の取組への参画	74
4-5 SA活動の成果分析	74
第5章 学修成果の可視化の推進	77～88
5-1 取組概要	78
5-2 ALer自己評価ルーブリックの改定及び運用制度の構築	78
5-3 科目ルーブリックの導入状況・活用事例	82
第6章 高大接続改革の推進	89～114
6-1 取組概要	90
6-2 高等学校への授業見学	90
6-3 平成30年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会への参画	91
6-4 高等学校と連携した共同研究等の推進	110
6-5 高大接続に係る学内の取組（参考）	113
第7章 事業成果の発信（広報・発表）	115～142
7-1 取組概要	116
7-2 広報物作成・配付	116
7-3 APテーマI選定校連携事業	123
7-4 高等学校生徒・保護者・教員への事業PR	128
7-5 学外発表	128
7-6 教育改革フォーラムの開催	139
第8章 外部評価	143～155
8-1 外部評価の概要	144
8-2 県立広島大学AP評価委員会による外部評価	144
8-3 日本学術振興会大学教育再生加速プログラム委員会によるフォローアップ	153

第1章

県立広島大学AP事業の概要

第1章 県立広島大学AP事業の概要

1-1 事業の全体像と平成30年度の取組

(1) 県立広島大学について

県立広島大学は、2005年に広島県立の3つの大学（県立広島女子大学、広島県立大学、広島県立保健福祉大学）が統合して開学し、広島市、庄原市及び三原市のそれぞれ約100km離れた3つのキャンパスで2,500名を超える学生が学んでいる。学士課程は4学部11学科を有し、幅広い分野で地域社会や世界で活躍できる人材を育てることで、「地域に根ざした、県民から信頼される大学」を目指す。また、平成32年度には学部・学科の再編も予定しており、予測困難な社会において地域社会をリードする「課題探究型地域創生人材」の育成に向けた教育機能の強化も目指している。

【学部・学科構成】

広島キャンパス	
人間文化学部	国際文化学科
	健康科学科
経営情報学部	経営学科
	経営情報学科
庄原キャンパス	
生命環境学部	生命科学科
	環境科学科
三原キャンパス	
保健福祉学部	看護学科
	理学療法学科
	作業療法学科
	コミュニケーション障害学科
	人間福祉学科



図 キャンパス配置図

(2) 教育上の課題とAP事業の目的

学生に寄り添い、地域に密着した人材育成を目指す県立広島大学の教育は、学生からの高い授業満足度や、本学卒業生に対する「勉強・研究に熱心」であり「真面目である」という地元企業からの評価にも支えられながら、開学以降、理想とする教育を着実に実現しつつあった。その一方で、学生の授業外における学修時間の伸び悩みなど、学生の主体性の育成に長らく課題を感じていた。また、3つの離れたキャンパスの連携も十分ではなく、専門分野を越えた学生間の交流の機会が限られるなど、既存の教育には改善の余地も残されていた。そのような中で、平成26年度にAP事業テーマIへの選定を受けて、これらの課題の解決に向けて全学が一体となって取り組むこととなった。

県立広島大学のAP事業は、授業方法の見直し・改善により、行動型学修（教室外での能動的な学び）と参加型学修（教室内での能動的な学び）を軸とする県立広島大学型アクティブ・ラーニング（Campus Linkage Active Learning：CLAL）を導入して教育改革を進め、学生の学修意欲を喚起することで、幅広い教養と高度な専門性を備えた生涯学び続ける自律的な学修者（アクティブ・ラーナー：ALer）を育成することを目的としている。下図に示す一連の教育改革プロセスのうち、教育の根幹である授業の在り方を見直し質的な転換を図ることで、種々の課題の解決を図ることを目指すものである。

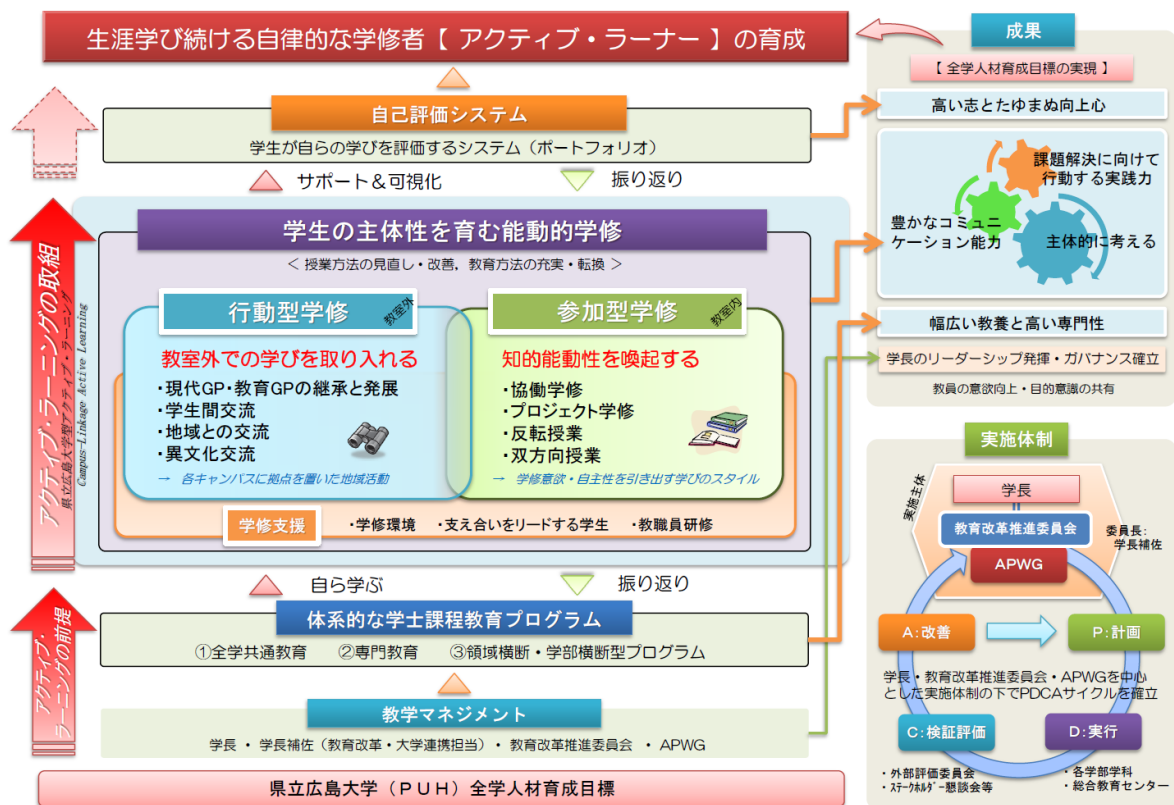


図. 県立広島大学における教育改革のプロセス

(3) 具体的取組

本学 AP 事業では、教育改革の強化を目的として平成 25 年度に設けた学長補佐（教育改革・大学連携担当）を長とする「教育改革推進委員会」の下、事業推進主体である「AP 事業推進部会」が中心となり、次に掲げる 5 つの取組を重点的に推進している。

- [1] アクティブ・ラーニングの導入・実践支援
- [2] ファカルティ・ディベロッパー（FDer）の養成と授業改善
- [3] 学修支援アドバイザー（SA）の養成と学修支援
- [4] 学修成果の可視化方策の検討
- [5] 高大接続改革の推進

アクティブ・ラーニング（AL）に関する研修の実施や学修環境の整備をはじめとして、教育改善を牽引する教員の養成、学生との協働による教育改善、ALer としての学生の成長把握、AL を核とした高大接続の在り方の模索といった各取組を一体的・複合的に推進することで、着実に成果を上げるとともに、事業終了後も持続的に教育改善に取り組む基盤づくりを進める。

(4) 平成 30 年度の取組概要

平成 29 年度までに引き続き、上述の 5 つの取組の着実な推進を図った（詳細は各章参照）。

また、FDer 養成等の取組を通じて培った教職員の資質・能力育成のノウハウを AP 事業後に継承するため、教育改革推進委員会の下に新たな専門部会「教職員研修検討部会」を設け、「県立広島大学アクティブ・ラーナー育成のための教職員研修体系」を策定したほか、教育改善に係る教員の取組・努力を積極的に評価し、研究費配分に反映させる教育業績評価制度の改善にも着手した。

① 大学改革の加速

生涯学び続ける自律的な学修者（アクティブ・ラーナー：ALer）の育成に向けた教育の質的転換を目指す本学の AP 事業は、「体系的な教育プログラム—授業改善—自己評価システム」を一連のものと捉える教育改革のうち、授業改善、すなわち県立広島大学型アクティブ・ラーニング（CLAL）の導入を中心とする取組により、学生の主体性を喚起し、授業外学修時間の伸長など学びの実質化を図る。

H30 年度は、前年度までに引き続き、授業における**行動型学修**（フィールドワークや他キャンパスでの学修等の教室外の学び）及び**参加型学修**（教室内で行う協働的な学び）の実践支援を実施し、バス借上や交通費助成、教員の要望を踏まえた可動式ホワイトボード等の備品増設を行うことで、AL 実施率は 92.9%（978 科目／1053 科目）まで向上した。また、授業改善の牽引者である「**ファカルティ・ディベロッパー（FDer）**」、及び他学生の学修支援や授業での AL 実践支援を担う学生スタッフ「**学修支援アドバイザー（SA）**」の体制拡充と活動促進に資する取組を行い、それぞれ成果を上げることができた。

「自己評価システム」の実現に関しては、ALer としての成長を学生が自己評価する「ALer 自己評価ルーブリック」の開発について、H30 年度に作成した試行版をベースに項目を見直し、内容を確定させた。同時に、翌年度からの運用開始に向けた制度検討を進め、既存制度である「キャリア・ポートフォリオ・ブック」の 1 項目として組み込んだ。これにより、年に 2 回行われるチューター教員との期初面談において学生自ら学修姿勢を自己評価し、改善につなげていく仕組みを構築した。

このほか、H30 年度の主要な取組は次のとおり。

【相互参照システムの構築】

FDer を中心とした教員が優れた授業実践・改善事例を相互に共有・参照し合い、必要に応じて担当する授業に取り入れることを目的とした「**AL 実践事例集**」を作成し、試行版を WEB 公開した。翌年度には、本学 HP 上で正式版の公開を予定している。

【「教・職・学」協働の推進】

持続的かつ効果的な大学改革の実現をねらい、大学の構成員である教員・職員・学生の3者が相互に教育実践・改善について意見を交わす「教・職・学」協働の取組を実施・試行した。

まず、FDer 教員等が公開する授業を他の教員等が参観し、受講生の学修態度の観察を通じて得た気付きを基に、授業改善に向けた意見交換を行う**授業ピアレビュー**を実施した。H30 年度は、学生（SA）に加えて事務職員の参観も開始し、授業公開者は、多様な視点からの意見を基にさらなる授業改善を図ることができた。また、参観した教員も、他者の授業実践を観察することで自身の授業改善につなげた。相互参照システムとしての機能も併せ持つ授業ピアレビューは、今後も積極的に展開していく。

また、H30 年度の新規取組として、教員、職員及び学生（主に SA）が本学の教育のあり方について議論し、改善に向けた提言を行う「**『教・職・学』協働による教育改革ミーティング**」を実施した。本学において、教員・職員・学生の3者が教育について意見交換する機会は貴重であり、参加者からはさらなる充実を求める声も聞かれた。翌年度以降も、必要な見直しを図り、一層充実させていく。

【高大接続改革の推進】

高等学校教育への理解を深めるため、広島県内の高等学校で行われている公開授業研究会に教職員が参加し、高等学校教育の現状を知ることで、高大接続改革に資する教育改善に係る示唆を得

た。

また、県教育委員会と共催した「広島県高等学校教育研究・実践合同発表会」へ参画し、大学と高等学校の教員が相互に教育実践・改善事例を報告し合うことで、相互理解を深めた。

以上から、本学の大学改革は確実に進展しているといえる。さらに、現在準備が進められている学部等再編(R2 年度～)では、AP 事業の成果も踏まえた体系的な教育プログラムが実施される予定であり、「体系的な教育プログラム—授業改善—自己評価システム」の一連の教育改革は結実する。

② 事業の実施体制

学長補佐(教育改革・大学連携担当)を長とする全学委員会「教育改革推進委員会」の専門部会であり、各学科及びセンターの教員並びに事務局員から構成される「AP 事業推進部会(以下「AP 部会」という。)を中心として、全学的な事業推進を図った。さらに、AP 部会の下に置く「FDer 連絡調整ワーキンググループ(以下「FDerWG」という。)」では4つの取組課題(組織的教育改善, AL 実践と普及, 学修成果の把握, SA との協働)ごとに FDer によるチームを編成し、AP 部会との緊密な連携や、学科を越えた FDer 間協働の下、各取組を企画・実施した。

また、外部有識者を構成員とする「AP 評価委員会」を3月に開催し、自己点検・評価書に相当する資料を基に年度を取組について客観的な評価を得た。委員からの評価や助言等は、教育改革推進委員会や AP 部会において共有した上で、FDer 連絡調整 WG の事業実施計画(年間工程表)に反映させた。

③ 事業の実施計画・継続性

H30 年度は、「① 大学改革の加速」で述べた各取組を中心に事業を計画し、大きな変更等なく、概ね順調に事業を実施した。

補助期間後の継続性としては、R2年度に控える学部等再編を機に設置が予定されている総合教育センターの後継組織において、体制及び予算を確保し、これまでの取組を継続実施することを構想している。また、一部の取組については、研究として事業化し、科学研究費補助金や学内助成制度も利用することで予算獲得を試みる。

なお、R元年度から、総合教育センター長が AP 部会長を兼務し、事務部門を総合教育センター(教学課)へ移管するなど、AP 事業の全学的波及に向けた準備が既に進展している。

④ 事業成果の普及

学外のシンポジウムや他大学の FD 研修等で取組報告を行い、全国的な成果の波及に努めた。

	イベント名	日時	場所	備考
1	SPODフォーラム2018ポスターセッション	H30.8.29	香川大学	
2	APテーマⅠ及びテーマⅠ・Ⅱ複合型合同シンポジウム	H30.11.24	キャンパスプラザ京都	
3	H30年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会	H31.1.25	県立広島大学	
4	広島国際大学 FD研修会	H31.2.12	広島国際大学	招待
5	宮城大学 高大連携シンポジウム	H31.2.18	SS30(仙台市)	招待

また、年度単位での事業報告会を兼ねた「教育改革フォーラム」を3月8日に開催し、「教・職・学」協働の取組について、登壇した教員2名、職員1名及び学生3名が事例報告を行った。これにより、参加した学内教職員や高等教育機関関係者、高等学校関係者等に対して広く本学の成果を周知できたほか、本学の取組、とりわけ SA 制度に対して、多方面の参加者から高い評価が得られた。

今後の成果普及の方向性としては、R元年度から制度化した ALer 自己評価ルーブリックを用いた学生の成長の可視化を進め、長期的にデータを蓄積しながら、成果を社会へ還元していく。

⑤ 選定されたテーマの取組を中核にした総合的な大学教育改革の取組

AL 推進や ALer 自己評価ルーブリックの運用等、学生の成長を促す仕組みが構築される一方で、AP 事業で実施した教職員研修の補助事業終了後の持続性や、事業への参加度に応じた教員業績への反映については、これまで十分な議論がなされてこなかった。H30 年度、教育改革推進委員会の専門部会として「教職員研修検討部会」を新たに設置し、これら 2 つの課題について検討し、事業化に向けた提言を行った。

(1) 新たな研修体系の構築

ALer 育成に求められる教職員の資質・能力を AP 事業後も継続的に開発することをねらい、「ALer 育成のための教職員研修体系」を策定した。翌年度以降、本研修体系に基づき研修を実施していく。

(2) 教員業績評価への反映

AL の実施や FD への参加状況等を適切に評価し、業績へ反映させる仕組みの構築を目的として、業績評価基準及び項目の見直しを行った。翌年度は、この見直し案を学内会議でさらに検討し、速やかな適用に向けた準備に取り掛かる。なお、H30 年度の教員業績評価では、各教員に FD 関連活動の実績を特記事項(自由記述)として自己申告させ、これを点数化し研究費配分に反映させている。

1-2 取組概要資料 (ポンチ絵)

p.9 のとおり。

1-3 事業推進体制

p.10 「県立広島大学 AP 事業推進体制図」 のとおり。

大学等名：県立広島大学 テーマ：テーマI（アクティブ・ラーニング）

取組概要 地域活動を組み込み、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を揺り動かす深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「能動的学修」を学士課程教育に計画的に導入して教育改革を進める全学的な取組である。これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたり学び続ける自律的な学修者アクティブ・ラーナーの育成を目指す。

県立広島大学型 アクティブ・ラーニング Campus Linkage Active Learning [CLAL]

行動型学修

- ・学生間交流
- ・地域との交流
- ・異文化交流

→ 各キャンパスに拠点
を置いた
地域活動



教室外での学びを取り入れる

フィールドワーク
現場体験
インターンシップ
学修成果発表会

学生の主体性を育む能動的学修

- ・協働学修
- ・反転授業
- ・プロジェクト学修
- ・双方向授業

→ 学修意欲・自主性を
引き出す学びの
スタイル



知的能動性を揺り動かす

振り返り
フィードバック
ディスカッション・ディベート
授業公開促進

学修支援

- ◇ 学修環境の整備
- ◇ 学修実践支援

- ◇ 支え合いをリードする学生の育成
- ◇ 教職員研修の充実

行動型学修実践支援 学修支援アドバイザー育成

ファカルティ・ディベロPPER養成



教育改革の
STEP

教学マネジメント

体系的な学士課程
教育プログラム

教育方法の見直しと充実
授業方法の転換・改善

自己評価システム

生涯学び続ける自律的な学修者
【アクティブ・ラーナー】

数値目標

指標	26年度 (実績値)	28年度 (実績値)	31年度 (目標値)
アクティブ・ラーニングを受講する 学生の割合*	100%	100%	100%
ファカルティ・ディベロPPER養成	0人	36人	30人
学修アドバイザー育成	0人	41人	55人

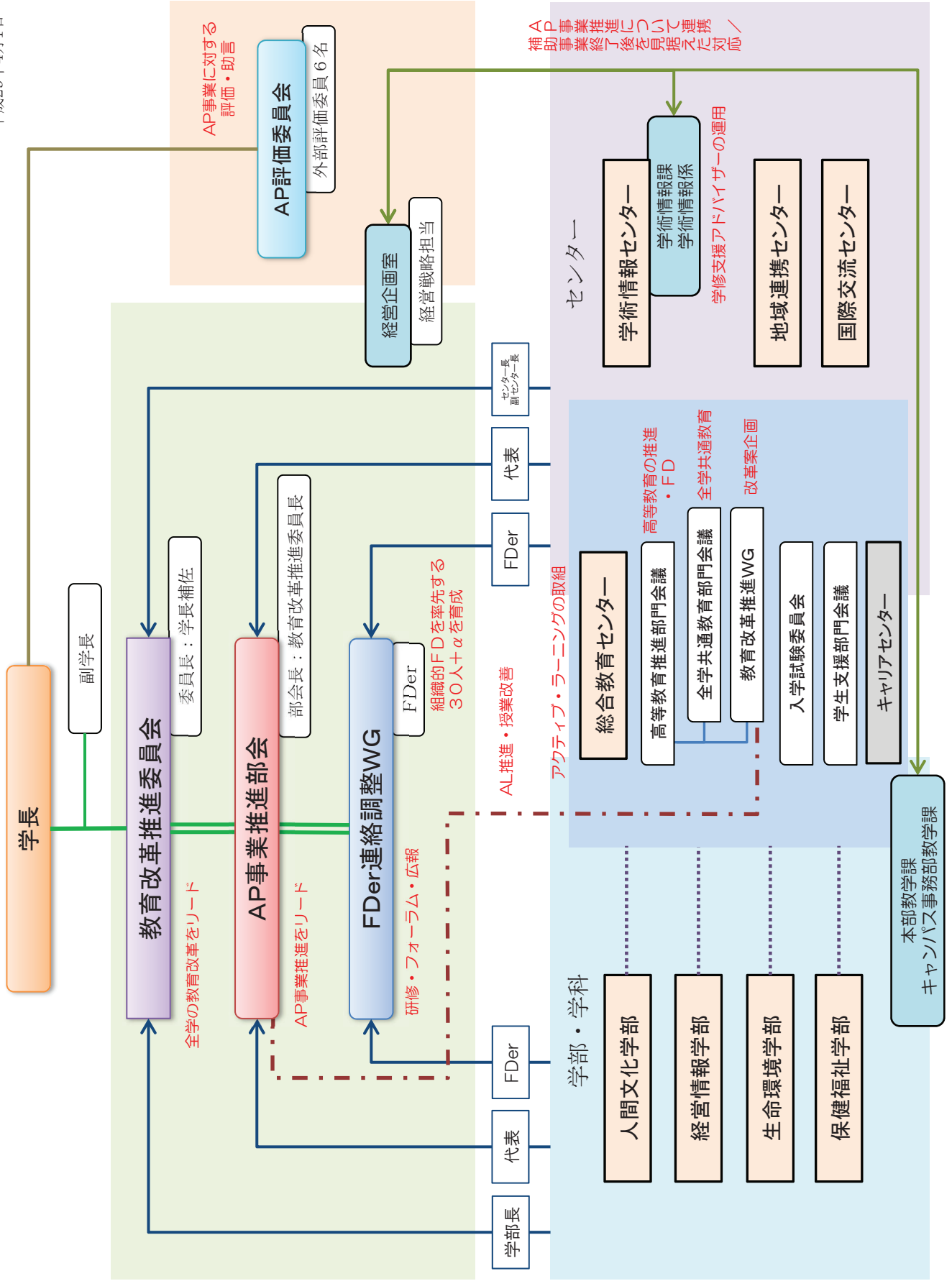
学長のリーダーシップの下、教育改革に取り組み、本学での学びに対する学生の満足度を高め、卒業生の活躍により地域への波及効果を狙う。

- ・教室外での学びを取り入れ、学修意欲・自主性を引き出す新たな教授法による授業外学修の充実を加速する。
- ・知識を活かせる人材の育成を目指して、真の問題発見力や課題解決力、論理的思考力を育む。
- ・FD・SD活動の充実により、教職員の意欲を向上させる。目標を共有し、教育の質的改善に全学的・組織的に継続して取り組む。
- ・学生同士が教え合うことで、学びを定着させる。

* 28年度以降の数値目標はアクティブ・ラーニングを再定義した上での値である

県立広島大学 AP 事業推進体制図

平成29年4月1日



1-4 学内会議開催状況

平成30年度は、

【平成30年度AP事業推進部会 開催状況】

回数	日時	議題(審議事項)
第1回	平成30年 5月24日(木) 16:20～	<p>【審議事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 AP事業の年間計画について 2 F D e r 連絡調整WGにおける役割分担の見直しについて 3 平成30年度F D e r 養成講座実施計画について 4 平成30年度行動型学修に係る経費助成の運用について 5 平成30年度学修支援アドバイザー(SA)制度の運用について 6 平成30年度前期授業ピアレビューの実施について <p>【報告事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 部会員の交代及び追加について 2 平成29年度AP評価委員会の開催報告について 3 平成29年度AP補助金実績報告書の提出について 4 平成30年度AP補助金の交付内定について 5 第1回教職員研修検討部会の開催報告について
第2回	平成30年 6月28日(木) 16:20～	<p>【審議事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 F D e r 連絡調整WGにおける役割分担の見直し及びグループ別工程表について 2 平成30年度前期授業ピアレビューの実施について 3 「F i n d ! アクティブラーナー」を利用した授業動画の撮影及び公開について 4 平成30年度第2回～第5回F D e r 養成講座の実施について 5 行動型学修経費助成に係る申請内容の審査について <p>【報告事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 AP事業フォローアップの実施について 2 平成30年度第1回全学FD研修会(兼)第1回F D e r 養成講座の開催報告について 3 S P O Dフォーラム2018への参加について 4 AP事業テーマI採択校協議会の本学開催について 5 AP事業全採択校合同合宿の開催について 6 第22回教材生物バザールへの参画について
第3回	平成30年 7月30日(月) 13:10～	<p>【審議事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 平成30年度AP事業推進スケジュールの確認について 2 平成30年度第5回F D e r 養成講座の計画について 3 行動型学修経費助成に係る申請内容の審査について <p>【報告事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 AP事業フォローアップ「平成29年度実施報告書」の提出について 2 平成30年度前期授業ピアレビューの実施報告について 3 AP事業テーマI採択校協議会の開催報告について 4 AP事業全採択校合同合宿への参加について 5 「Find!アクティブラーナー」を利用した授業動画の撮影に係る撮影対象授業の推薦状況について 6 第2回教職員研修検討部会の開催報告について

<p>第4回</p>	<p>平成30年 9月5日(水) 13:10～</p>	<p>【審議事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 F D e r グループ別事業推進の進捗状況について 2 「『教・職・学』協働による教育改革ミーティング」(兼F D e r 養成講座)の実施計画について 3 行動型学修経費助成に係る申請内容の審査について <p>【報告事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 「前期授業ピアレビュー」事業評価案について 2 「平成30年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会」の実施計画について 3 「Find!アクティブラーナー」を利用した授業動画の撮影に係る対象授業の推薦状況について 4 SPOD フォーラム 2018 ポスターセッション参加報告について 5 第3回教職員研修検討部会の開催報告について
<p>第5回</p>	<p>平成30年 10月15日(月) 16:20～</p>	<p>【審議事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 F D e r グループ別事業推進の進捗状況について 2 後期授業ピアレビューの実施について 3 平成30年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会における本学発表内容について 4 平成30年度AP評価委員会及び教育改革フォーラムの実施計画について <p>【報告事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 A L実践事例集の作成について 2 「Find!アクティブラーナー」に係る授業動画撮影の実施報告について 3 行動型学修経費助成に係る実習等実施内容の報告について 4 平成30年度前期における行動型学修に係る経費助成実績について 5 平成30年度前期におけるS A活用実績について 6 チームAP合宿への参加報告について
<p>第6回</p>	<p>平成30年 12月10日(月) 14:40～</p>	<p>【審議事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 平成30年度県立広島大学教育改革フォーラムの開催内容について 2 平成30年度アクティブ・ラーニング実施状況調査の実施について 3 文部科学省APパンフレットに係る本学取組紹介ページの作成について 4 行動型学修経費助成に係る申請内容の審査及び共有について <p>【報告事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 平成30年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会における本学ポスター発表者について 2 後期授業ピアレビューの実施状況について 3 「APテーマI選定校協議会」及び「APテーマI及びテーマI・II複合型合同シンポジウム」への参加報告について

第7回	平成31年 2月5日(火) 16:20～	<p>【審議事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 F D e r グループ別事業推進の進捗状況について 2 A L e r 自己評価ルーブリックの策定について 3 平成30年度アクティブ・ラーニング実施状況調査に係る調査票について <p>【報告事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 A P平成30年度フォローアップ結果について 2 平成30年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会への参画について 3 平成30年度県立広島大学教育改革フォーラムに係る広報及び登壇者調整について 4 外部シンポジウムにおける事業報告予定について <p>【情報提供】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 A P選定校による主なシンポジウム等について 2 その他のセミナー等について
-----	----------------------------	--

1-4-2 平成30年度教育改革推進委員会 開催状況

回数	日時	議題(審議事項)
第1回	平成30年 4月23日(月) 10:40～12:10	<p>【審議事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 公立大学法人県立広島大学教職員研修検討部会要領の制定について <p>【報告事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 平成30年度 年度計画（教育改革推進委員会関係分）について 2 広島県立教育センター「教材生物バザール」への参画について
第2回	平成30年 11月12日(月) 13:10～14:30	<p>【審議事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 平成30年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会への参画について 2 平成30年度県立広島大学A P評価委員会及び教育改革フォーラムの開催について 3 平成30年度 県立広島大学管理職研修会の実施について <p>【報告事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 平成30年度前期 A P事業実施報告について 2 A P事業フォローアップ「平成29年度実施報告書」の提出について 3 教員業績評価におけるF D e rの貢献の反映について
第3回	平成31年3月 実施予定	

第2章

県立広島大学型アクティブ・ラーニング (CLAL) の推進

第2章 県立広島大学型アクティブ・ラーニング（CLAL）の推進

2-1 取組概要

本学 AP 事業におけるアクティブ・ラーニング推進は、特定の科目や授業プログラムの開発ではなく、学修環境の整備や交通費助成等を通じて、各教員が担当授業の内容や特性に応じて行うアクティブ・ラーニングの導入・実践を支援することを特徴としている。平成30年度は、これらの支援を継続実施し、行動型・参加型アクティブ・ラーニングの更なる活性化を図った。

また、FDer等によるアクティブ・ラーニング型授業の実践例を教員間で共有し、学内のアクティブ・ラーニングの質向上に繋げることをねらいとし「アクティブ・ラーニング実践事例集」の作成に取り組んだ。年度内は、暫定版を取りまとめ、WEB上で仮公開するに至った。

年度末には、学内のアクティブ・ラーニング実施状況を把握するための調査を実施した。

〈県立広島大学におけるアクティブ・ラーニングの考え方〉

- (1) 県立広島大学の AP 事業では、授業手法としてのアクティブ・ラーニングを、主にキャンパスの外で行う**行動型学修**と、主に教室内で行う**参加型学修**の2軸で捉える。各 AL 手法を、授業の目的や性格に鑑みて導入し、有機的に組み合わせて実施することで、学生の学修姿勢の転換に効果的に作用すると考える。

【行動型学修の手法・授業形態例】

- フィールドワーク
- 体験学修（現地体験、地域活動）
- 他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修（他キャンパスでの学修・活動）
- その他の行動型手法（実習・実技を含む）

【参加型学修の手法・授業形態例】

- ミニッツペーパー
- 振り返り
- プレゼンテーション
- グループワーク
- ディスカッション
- ディベート
- ワークショップ
- PBL
- TBL
- 双方向授業
- 反転授業
- その他の参加型手法（演習・実験を含む）

- (2) アクティブ・ラーニングの浸透により学生の学修姿勢を転換させるには、ある程度の量（時間数）が必要と考える。下記枠内の時間的基準を満たして AL 手法を導入する授業を、特に**県立広島大学型アクティブ・ラーニング（Campus Linkage Active Learning : CLAL）**と総称し、質と量を伴ったアクティブ・ラーニングを保証する本学独自の指標として定める。

1学期における授業(90分×15回=1,350分)の中で**300分(1講義あたり20分×15回相当)**を費やして、本学が定める**行動型・参加型アクティブ・ラーニング手法を取り入れ実施する授業**

2-2 行動型学修の推進

2-2-1 取組内容

周辺地域や所属キャンパス外におけるアクティブ・ラーニング（行動型学修）の実施促進を目的として、前年度までに引き続き、行動型学修に参加する学生の移動支援を実施した。支援内容としては、多人数で遠隔地へ出向くためのバス借上や、少人数でのキャンパス移動に係る交通費補助（公共交通機関に限る）など、授業の内容や規模に応じて柔軟な支援を行った。

また、支援対象となる行動型学修の更なる質向上と、適切な学修効果が得られているかの成果検証の観点から、前年度までの支援状況を踏まえた制度改善にも取り組んだ。具体的には、本助成事業の助成ルールを見直し、授業者による成果検証の精緻化を図った。

2-2-2 助成実績

申請があった全 9 件の取組について、AP 事業推進部会における申請内容の審査を経て助成を決定した。助成実績は下表のとおり。

	科目名	申請教員	科目区分	助成対象	実施日	実施内容
1	異文化としての日本	柳川 順子 五條 小枝子	全学共通教育	15 人	4 月 21 日	異なるキャンパスの学生(留学生を含む)が一堂に会してのディスカッション
2	ボランティア活動	手島 洋	全学共通教育	27 人	6 月 9 日 6 月 16 日 9 月 6 日	異なるキャンパスの学生が一堂に会してのディスカッション
3	食品衛生学実験	谷本 昌太	学科専門科目 (健康科学)	34 人	8 月 6 日	学外実習施設等の見学、及び他キャンパス所有の分析装置の操作習得
4	ライフデザイン	岡田 高嘉	全学共通教育	6 人	8 月 20 日 ～8 月 24 日	異なるキャンパスの学生が一堂に会してのディスカッション
5	地域情報発信論	五條 小枝子 馬本 勉 塩川 満久	全学共通教育	54 人	8 月 27 日 ～8 月 30 日	異なるキャンパスの学生が一堂に会してのフィールドワーク・ディスカッション
6	体育実技Ⅱ(山寺)	塩川 満久	全学共通教育	45 人	8 月 29 日 ～8 月 31 日 8 月 30 日 ～9 月 2 日	異なるキャンパスの学生が一堂に会しての山間地域における現地体験学修
7	プログラミング演習 情報システム論	宇野 健 折本 寿子	学科専門科目 (経営情報)	48 人	7 月 19 日	県内企業の施設見学及び講師の説明聴講
8	留学生と学ぶ広島	柳川 順子 五條 小枝子	全学共通教育	93 人	10 月 13 日 11 月 17 日 12 月 15 日 1 月 12 日	異なるキャンパスの学生が一堂に会してのフィールドワーク・ディスカッション
9	地域の理解	五條 小枝子	全学共通教育	51 人	2 月 8 日	異なるキャンパスの学生が一堂に会しての成果報告会(ポスターセッション)

2-2-3 成果と課題

平成 30 年度は、全学で延べ 373 人の学生が、本経費助成により行われた行動型学修を経験した。本学には上表以外にも行動型学修を実施する授業はあるものの、学生の経済的な負担を伴わずに、地域での学修や、他キャンパスの学生と直接対面しての学修に参加できることは本助成の大きな強みであり、これらの学修機会の提供に大きく貢献しているものと考えられる。

また、各申請教員が行った成果検証では、実施したプログラムに対して多くの学生が肯定的評価を示した。更に、ループリックを用いて学生の成長の可視化を試みた授業では、実施前後で学生のコンピテンシーの向上が確認できている。このように、学修意欲の喚起と学生の成長の双方で、成果を上げていることが示唆された。

なお、9 件の助成のうち 8 件が他キャンパスの学生との交流(キャンパス移動)を伴う学修であったことから、受講生が多く、金銭的負担の大きい全学共通教育のキャンパス移動科目に強いニーズがあることが窺える。AP 事業後の制度継続にあたっては、その必要性を十分に考慮し、遠隔講義システムを補完する存在として制度化を目指していく。

2-3-4 助成要領・様式

- 行動型学修に参加する学生への経費助成要領」 p.18～22 参照

行動型学修に参加する学生への経費助成に関する要領

平成27年6月24日

平成28年6月 8日一部改正

平成30年6月18日一部改正

AP事業推進部会

1 趣旨

県立広島大学型アクティブ・ラーニングの導入を促進するため、行動型学修（地域活動を組み込んだ教室外学修：例えばフィールドワークや学外実習、及びその成果発表会など）に参加する学生の移動に係る経費の助成を行う。

2 助成対象経費等について

助成対象経費は、予算の範囲内において、広島県内で実施する行動型学修に係る本学学生の旅費（交通費）を助成する。

(1) 助成内容

借上バス等を利用する場合、駐車場代、高速道路利用料金を含めて必要経費を助成する。

ただし、バスを借り上げるよりも経済的かつ合理的な理由がある場合のみ、公共交通機関の料金を助成する。

(2) 経費算定の際の注意事項

- ・本要領に係る経費の支出は、証拠書類（領収書、支払証明書等）で確認できるもののみを対象とする。
- ・移動に係る経費の算定について、原則として、集合時から解散時までの事業実施中において発生する交通費等は大学が負担し、集合前と解散後の交通費等は学生が負担する。
- ・交通手段や交通経路については、効率的かつ経済的なものを選択する。
- ・やむなく公共交通機関等を利用する場合、学生旅客運賃割引が使用できる場合は必ず使用すること。また、指定席料金については支出しない。
- ・安全性を考慮し、自家用車での移動に係る経費は支出しない。
- ・目的地が所属キャンパスと同一地域内の学生については、原則として交通費を助成しない。

3 助成条件

次の条件を全て満たしたものについて助成する。

- (1) 学生の学修意欲や自主性を引き出すことを目的として、全学共通教育科目または専門科目において教室外での学び（フィールドワークや学外実習、及びその成果発表会など）を新たに取り入れるものであること。もしくは、従来から教室外での学びを取り入れている場合は、その取組を加速・改善をさせるものであること。
- (2) 正課授業科目の中で行う活動であること、または、正課授業科目における教育方法の見直しと充実化を図るための試行的な活動であること。
- (3) 活動の内容について、行先選定の理由が合理的かつ経済的であり、相応の教育効果があると見込まれる活動であること。

- (4) 申請する科目の受講者全員が、申請教員とともにプログラムへ参加する活動であること。
- (5) 過去に本経費助成を受けた科目については、助成を受けた年度における学生の学修状況を示す客観的な証拠等により、行動型学修の効果が確認できていること。

なお、次の内容については助成対象としない。

- ・資格取得のみを目的とした学外実習、卒業論文及び卒業研究にかかるもの
- ・クラブ、サークル活動など、正課授業と直接的に関わりのないもの
- ・本学内における別事業、または、実習先等から交通費（一部を含む。）等が助成されるもの
- ・その他、申請書類（支出証拠書類を含む）の内容が不明瞭であるもの

4 申請方法と助成可否の決定

- (1) 行動型学修を計画する教員は、原則として事業開始日の属する月の前々月の1日までに、学科長または全学共通教育部門長（以下、「学科長等」という。）の確認を経て、別記様式1「学外実習等実施計画書」（以下、「計画書」という。）と下表に掲げる書類を添えて、各キャンパスAP事務担当を通じ、AP事業推進部会長（以下、「部会長」という。）へ提出する。

申請区分	別記様式1に添えて提出するもの	備考（書類等の例）
新規申請	① 必要経費に係る根拠書類	見積書、運賃表、えきすばあと検索結果 等
	② 申請年度のシラバス	
継続申請	① 必要経費に係る根拠書類	見積書、運賃表、えきすばあと検索結果 等
	② 申請年度のシラバス	
	③ 最後に助成を受けた年度のシラバス	
	④ 最後に助成を受けた年度における受講生の学修状況を示す書類	・「学生による授業評価」アンケート結果 ・授業で実施した任意のアンケートの結果 ・振り返りシート（様式任意）の記述 等

- (2) 部会長は、提出された計画書について、AP事業推進部会（以下、「部会」という。）における協議を踏まえて助成の可否を審議・決定し、申請教員に対してその結果を速やかに通知する。
- (3) 行動型学修を実施した教員は、実施後速やかに、学科長等の確認を経て、別記様式2「学外実習等実施報告書」（以下、「報告書」という。）及び別記様式3「支払証明書」を、事業終了日の翌日から起算して14日後までに、各キャンパスAP事務担当を通じ、部会長に提出する。
- (4) 部会長は、報告書及び支払証明書に基づき、部会における協議を踏まえて助成額を審議・決定し、申請教員に対して速やかに通知する。
- (5) 報告書の内容について、計画時の実習等の行程から変更があった場合は、変更にかかる経費を助成しない場合がある。

ただし、次の条件に該当する行程変更については、この限りでない。

- ・実習の目的に鑑みて、計画時の行程より一層の高い教育効果が見込まれると判断した場合に実施するもの
- ・交通事故等により発生した渋滞の回避など、やむを得ない事情によるもの
- ・その他、軽微なもの

5 支払に係る手続き

本要領に係る庶務は、本部経営企画室において行う。本部経営企画室は、決定した助成額を学生に支払う場合は、原則として口座払いによって処理することとし、学生は、必要に応じて「口座振替依頼書」を提出することとする。

6 その他

(1) この要領に定めるもののほか、必要な事項は、部会長が定める。

(2) 助成を受けた教員は、ファカルティ・ディベロッパー（FDe r）の一員として期待される役割を担うものとする。

附 則

この要領は、平成27年6月24日から施行し、平成27年4月1日以降、文部科学省「大学教育再生加速プログラム」補助事業実施期間中において適用する。

附 則

この要領は、平成28年6月8日から施行する。

附 則

この要領は、平成30年6月19日から施行する。

学外実習等実施計画書

授 業 名			
申 請 者 ^{※1} (所属・氏名)	印		
参加者氏名	別紙のとおり		
実施予定日程	自 平成 年 月 日 ()	: ~ :	
	至 平成 年 月 日 ()	: ~ :	
申請区分 (該当する方を☑すること)	<input type="checkbox"/> 新規申請 (初めて申請する科目の場合) <input type="checkbox"/> 継続申請 (同一科目で過去に助成を受けている場合)		
行動型学修の新規導入 ／改善の目的及び内容 (継続申請の場合は、過去の行動型学修の成果を客観的証拠を踏まえて説明し、継続助成の必要性を記入すること)			
期待する学修成果 (現在の学修の状況を踏まえて、成果検証の手段 ^{※2} も含めて記入すること)			
行先・行程 (詳細に記入すること)	行先 (実習先等)		
	行程		
所要経費 ^{※3}	経路 (駅・バス停名／建物名)	移動手段	経費
	~		円
	~		円
	~		円
学科長／全学共通教育部門長 コメント欄			
	氏名		印
AP事業推進部会長 確 認 欄	印		

※1 申請者は、本学に所属する教員（非常勤講師を含む）に限る。
 ※2 学修成果の検証は、振り返りシートやループリック（いずれも様式任意）等を用いて行うこと。
 ※3 経費算出の根拠となる資料を併せて提出すること。（要領4（1）参照）
 ※4 学生に対して助成を希望する場合は、口座振替依頼書を添付すること。

学外実習等実施報告書

授 業 名			
報 告 者 ^{※1} (所属・氏名)	印		
参加者氏名	別紙のとおり		
実 施 日 程	自 平成 年 月 日 ()	: ~ :	
	至 平成 年 月 日 ()	: ~ :	
申請区分 (該当する方を☑すること)	<input type="checkbox"/> 新規申請 (初めて申請する科目の場合) <input type="checkbox"/> 継続申請 (同一科目で過去に助成を受けている場合)		
実 習 内 容 (行程を含めて詳細に記入すること)			
学 修 成 果 (計画書の「期待する学修成果」 に対応させて記入すること)			
翌年度以降の実施の展望 (AP事業による経費助成の終了後を念頭に記入すること)			
支 出 経 費 ^{※2} (領収証を添付すること)	経路 (駅・バス停名/建物名)	移動手段	経費
	~		円
	~		円
	~		円
学科長/全学共通教育部門長 コメント欄	氏名 _____ 印 _____		
AP事業推進部会長 確 認 欄	印		

※1 申請者と同じ者であり、実習等に同行した者とする。

※2 必ず支払ったことを証明できる資料 (領収証や支払証明書など) を添付すること。

2-3 参加型学修の推進

2-3-1 取組内容

教室内におけるアクティブ・ラーニング（参加型学修）促進のため、下表に掲げる各種備品の整備を行った。購入にあたっては、平成27年度から29年度にかけて実施した「CLAL導入に係る意識調査」の中で尋ねた「CLAL導入に必要な支援」に係る回答（自由記述）を分析し、一定のニーズがあり、かつ手軽に利用可能な備品を検討・選定した。

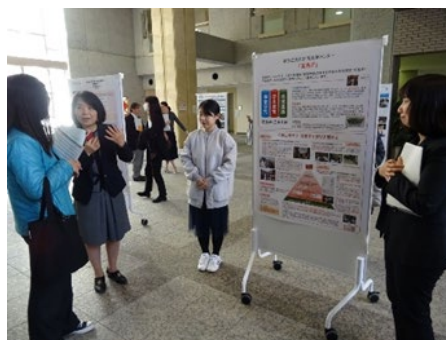
	内容	数量	配備キャンパス
1	日学 タテ型両面ホワイトボード ACTIBO ACT-001 W880×D632×H1800mm	15台	広島
		12台	庄原
2	Canon レーザーポインター・プレゼンター PR1-HY	3個	広島
3	3M イーゼルパッド EASEL563 W508×H584mm	50冊	広島
4	3M イーゼルパッド EASEL559 W634×H762mm	50冊	広島
6	エルモ コンパクト書画カメラ Visual Presenter MX-P	3台	庄原
7	プラス 脚付両面ホワイトボード VS2-34DHP	2台	三原
8	プラス 脚付両面ホワイトボード VS2-36DHP	2台	三原

2-3-2 使用実績

整備した備品は、授業や研修等イベントでの使用を対象とし、キャンパス毎に貸出を行った。また、購入備品を使用したアクティブ・ラーニング実践を促進するため、教員による研修会が催され、効果的な活用方策について検討が行われた。以下、備品の活用例を一部紹介する。

【活用例①：ホワイトボードを使用したポスターセッション】

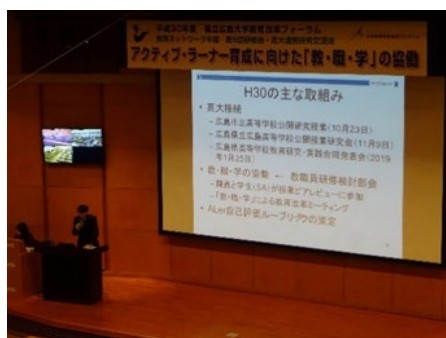
購入したタテ型ホワイトボード「ACTIBO」は、A0判用紙が掲示可能なほど板面が広く（両面使用可）、かつキャスター付きで移動が簡便なため、多様な用途が想定される。3/8開催の教育改革フォーラムでは、このボードを利用したポスターセッションを実施し、学内外の参加者から好評を博した。また、設置が簡便であることから、準備時の負担軽減も実現した。



【活用例②：遠隔講義システムにおけるプレゼンター機能活用】

遠隔講義システム使用時にスライド投影する場合、重要箇所の指示は、ポインター機能を使用しPC上で電子的に行うことで配信先キャンパスに共有される。

購入した「PR1-HY」はプレゼンター機能を有しており、遠隔講義時でも通常のレーザーポインター感覚で画面を指示できるなど、講義形式を選ばず多くの授業で使用可能である。



2-4 アクティブ・ラーニング実践事例集の作成

2-4-1 取組内容

行動型・参加型を軸とする県立広島大学型アクティブ・ラーニングの積極推進により、本事業では FDer を中心として様々な授業方法の開発・実践が行われてきた。今後は、これらの先導的な授業実践の取組やノウハウを全学で共有し、学内の更なるアクティブ・ラーニング推進に繋げるほか、AP 事業の成果として学外にも発信していくことが求められる。

そこで、FDer による授業実践・改善のノウハウをとりまとめた「アクティブ・ラーニング実践事例集」の作成に着手し、年度内に電子版をプレ公開した。

2-4-2 作成概要

(1) 作成対象者

- ① 平成 30 年 11 月時点で FDer を務めている教員
- ② その他、事例作成を希望する一般教員

(2) 作成要項

ア 対象となる取組

- 科目単位での取組紹介を原則とする。
- 内容は、アクティブ・ラーニングの実践事例であれば自由とする。なお、下記①～③のいずれかに該当する場合は、これに沿って作成する。

- ① 「行動型学修に参加する学生への経費助成」を受けて実施した実習等がある場合は、当該学修の内容及び成果を盛り込む。[必須]
- ② オムニバスの授業など複数教員で担当している科目を紹介する場合は、担当教員をすべて明記の上、代表者が 1 つの事例としてまとめる。
- ③ その他、学部・学科等で組織的に実施している授業改善事例の紹介も可とする。その場合は、関係する科目を全て明記の上作成する。(例：科目群としての取組)

イ 規格等

- 指定の A4 様式 (pp.25～26) で 2 枚以内。図表や写真等の使用は自由とする。
- 追加資料として、過去に AP 事業で発表したポスターや、担当授業で使用しているルーブリック等の資料を添付することも可 (3 枚まで)。サイズは全て A4 とする。

ウ 公開方法

大学 HP 等にて電子版 (PDF) を公開するほか、必要に応じて冊子化を検討する。

2-4-3 取組状況

教員 28 名から計 29 件の事例提供があり、これらを集約し暫定版となる事例集を作成した。この暫定版は、学内関係者を対象として本学 WEB 上にプレ公開した。

2-4-4 今後の展開

本事例集は、暫定版に更なる編集を施した「正式版」を大学 HP に再公開し、誰でも自由に参照可能な形での運用を予定している。その上で、AP 事業後を見据えて準備を進めている、教員同士が相互に授業実践・改善のノウハウを共有し合う「相互参照システム」の実現に向けて、全学への周知と積極的な活用を促していく。

アクティブ・ラーニング実践事例集 様式

授業科目：	○○○○概論		
科目区分：	○○○○学科専門科目	受講者数：	
担当者：	○○○○（○○○○学部○○○○学科／○○○○センター）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ 参加型 ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：			

1. 授業の概要と目標

本授業の目標は、「○○○・・・・・・・・・・」（シラバスより引用）であり、対面形式で実施している。

2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名「日本国憲法」 第13回 授業テーマ「国会と立法権」

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 15分	前時の内容の振り返り（8分） 本時の目標の理解（7分） 板書「国会議員選出に関する課題を理解する」	本時の学修の流れと目標を理解させる。	
展開 60分	基本事項の説明（20分） 個人学修 2017年総選挙の資料（政党別の得票率・議席占有率など）から、選挙制度の問題点を考える（10分） グループワーク 2人～4人でグループを形成し、ディスカッション（15分） 発表 ランダムにマイクを回し、グループの考えや個人の考えを発表してもらい、クラス全体で共有する（15分）	発表してもらったグループを決めて、当該グループの活動に積極的に関与 発表内容を肯定的に受け入れ、決して否定的なことを言わない。適宜補足説明を行う。	
まとめ 15分	本時の活動の振り返り（10分） ・投票権保障の趣旨 ・民意を反映しうる選挙制度 レポート課題の説明（5分）	本時の学修全体を振り返らせる。 本時の学びをレポート（文章）で総括させる。	次回に提出されるレポートで評価

3. 成果・効果

授業アンケートによると、○○・・・といった自由記述が多く、○○・・・の力が身につけている様子がうかがえる。

ピアレビューで他の FDer のコメントを得たところ、学生の動きの中に、○○・・・という点が見られた。この点からも、○○力を養うことができたように思う。

4. 課題

一方で、学生の中には、○○・・・といった反応を示す者もあり、動機づけの上で課題が残った。次年度へ向け、○○・・・を強化するよう、さらに工夫を重ねたい。

5. 資料

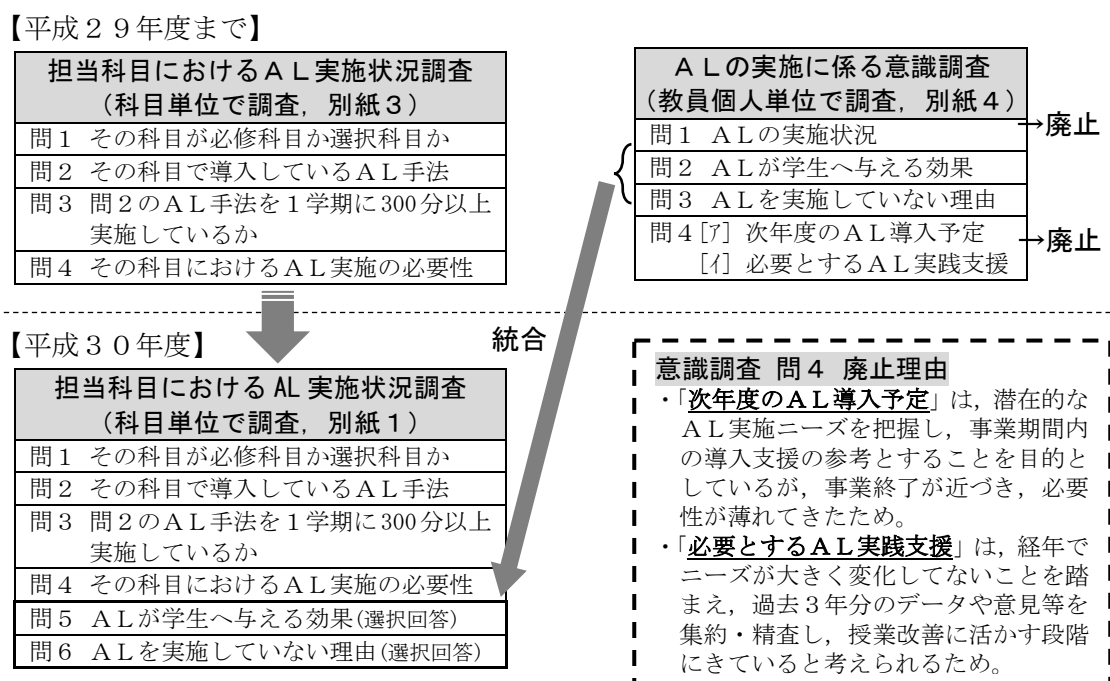
ワークシート、振り返りシート、シャトルカードなど

2-5 アクティブ・ラーニング推進の成果検証

(1) 概要

学士課程におけるアクティブ・ラーニング推進の現状及び課題の把握を目的として、「平成30年度アクティブ・ラーニング実施状況調査」を実施した。

平成30年度は、前年度まで別個に実施していた「担当科目におけるAL実施状況調査」及び「ALの実施に係る意識調査」の2種類の調査を、内容を見直して1つの調査に統合した。これにより、科目単位でアクティブ・ラーニングの実施状況と実施による効果を尋ねることができるなど、より詳細な分析が可能となった。また、学内で導入が進む科目ルーブリックの使用状況把握を目的として、ルーブリックの導入状況を尋ねる問を新設した。(下記参照)



(2) 調査実施内容

- 実施期間 平成31年2月14日(木)～平成31年2月27日(水)
- 対象教員 平成30年度に学部の授業を担当している全教員(非常勤講師を含む)
- 対象科目 平成30年度「学生による授業評価」アンケートのデータベースより抽出
- 調査用紙 pp.28～29「平成30年度 担当科目におけるアクティブ・ラーニング実施状況調査」表紙及び調査票

(3) 調査結果の概要

- 調査対象科目 1272科目 ・ALを実施している科目 972科目
- 有効回答科目 1046科目 ・CLALの基準に適合する科目 705科目

	全調査対象科目中	回答科目中	AL実施科目中
AL実施科目の割合	76.9%	92.9%	—
CLAL基準適合科目の割合	55.3%	66.9%	72.0%

なお、結果の詳細は pp.30～35 のとおりである。

平成30年度 担当科目におけるアクティブ・ラーニング実施状況調査

本調査は、本学におけるアクティブ・ラーニングの実施状況と課題を探ることを目的として、平成30年度に学士課程の開講科目を担当している教員（非常勤講師を含む）を対象として行うものです。

本学は、平成26年度に文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」事業（テーマⅠ：アクティブ・ラーニング）に採択され、「教育方法や授業内容の見直しによる能動的学修の定着」に取り組んでいます。多様化・複雑化する社会の中で活躍できる人材を育てるため、講義形式による知識伝達に加えて、アクティブ・ラーニング手法の積極的な実施により主体的な学修態度を涵養し、「生涯学び続ける自律的な学修者（アクティブ・ラーナー）」の育成に寄与することを目的としています。

教員の皆様におかれては、ご自身の担当授業におけるアクティブ・ラーニング手法の実施状況等について、現状をお答えくださいますようお願いいたします。なお、回答いただいたデータはAP事業推進部会が責任をもって管理します。また、調査結果は、AP事業にかかる外部評価委員会や、文部科学省等への報告に使用するとともに、AP事業推進部会委員を通じて各学部学科・センター等に提供いたします。

以上の趣旨をご理解いただき、ご協力賜りますようお願いいたします。

お忙しいところ恐縮ですが、平成31年2月22日（金）17:00までに、調査票に記入の上ご提出くださるようお願いいたします。ご不明な点がございましたら、下記担当者までお問い合わせください。

AP事業推進部会長 馬本 勉

- ◆提出締切：平成31年2月22日（金）17:00
- ◆提出先：
 - 広島キャンパス：メール室（回収BOXを設置）
 - 庄原キャンパス：教学課 AP担当
 - 三原キャンパス：教学課 メールボックス
- ◆問合わせ先：本部経営企画室 AP事務担当 伊藤（俊）
 電子メールアドレス kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp
 電話番号 082-251-9727（内線1230）

(((本調査におけるアクティブ・ラーニングの考え方)))

- (1) AP事業では、アクティブ・ラーニングを、主に教室外で行う**行動型学修**と、主に教室内で行う**参加型学修**の2軸で捉えています。下表に掲げる各AL手法を、授業の特性に応じて導入し、有機的に組み合わせることで、学生の学修姿勢の転換に効果的に作用すると考えています。

区分	本学が定めるアクティブ・ラーニング手法の例			
行動型学修	a. フィールドワーク	b. 体験学修（現地体験、地域活動）		
	c. 他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修（他キャンパスでの学修・活動）			
	d. その他の行動型手法（実習・実技を含む）			
参加型学修	e. ミニツッパーパー	f. 振り返り	g. プレゼンテーション	h. グループワーク
	i. ディスカッション	j. ディベート	k. ワークショップ	l. PBL ^{※1}
	m. TBL ^{※2}	n. 双方向授業	o. 反転授業	p. その他の参加型手法（演習・実験を含む）

※1 Problem-Based Learning：問題基盤型学修／Project-Based Learning：課題解決型学習

※2 Team-Based Learning：チーム基盤型学修

- (2) さらに、アクティブ・ラーニングの浸透により学生の学修姿勢を転換させるには、ある程度の量（時間数）が必要と考えます。下記に掲げる時間的基準を満たしてAL手法を導入する授業を、特に**県立広島大学型アクティブ・ラーニング（Campus Linkage Active Learning：CLAL）**と総称し、質と量を伴ったアクティブ・ラーニングを保証する本学独自の指標として定めています。

1学期における授業（90分×15回＝1,350分）の中で300分（1講義あたり20分×15回相当）を費やして、本学が定める行動型・参加型アクティブ・ラーニング手法を取り入れ実施する授業

- (3) なお、本事業は、全ての授業に300分以上のアクティブ・ラーニング手法を導入しようとするものではありません。授業の目的や性格に鑑み、必要に応じて積極的に導入していただくことを趣旨としています。

科目名	《科目名》		
開講時期	《開講時期》	教員所属	《教員所属》
開講学部	《開講学部》	教員氏名	《担当教員名》

問1 この科目が **必修科目か選択科目か** をお聞きします。該当するほうに を入れてください。

必修科目 / 選択科目

問2 その科目で **導入しているアクティブ・ラーニング手法** をお聞きします。

① 回答欄内の選択肢 a～pの中から、該当するもの全てに を入れてください。
 ② アクティブ・ラーニング手法を一切導入していない場合は、選択肢 z に を入れてください。

<input type="checkbox"/> a.フィールドワーク	<input type="checkbox"/> b.体験学修（現地体験，地域活動）		
<input type="checkbox"/> c.他キャンパスとの交流を伴う学修	<input type="checkbox"/> d.その他の行動型手法（実習・実技を含む）		
<input type="checkbox"/> e.ミニッツペーパー	<input type="checkbox"/> f.振り返り	<input type="checkbox"/> g.プレゼンテーション	<input type="checkbox"/> h.グループワーク
<input type="checkbox"/> i.ディスカッション	<input type="checkbox"/> j.ディベート	<input type="checkbox"/> k.ワークショップ	<input type="checkbox"/> l.PBL
<input type="checkbox"/> m.TBL	<input type="checkbox"/> n.双方向授業	<input type="checkbox"/> o.反転授業	<input type="checkbox"/> p.その他の参加型手法 (演習・実験を含む)
<input type="checkbox"/> z.アクティブ・ラーニング手法を一切導入していない。			

問3 【問2で「a～p」を選択した場合のみ回答してください。】
 問2で選択した手法を用いたアクティブ・ラーニングを **1学期に合計300分以上実施しているか** をお聞きします。該当するほうに を入れてください。

300分以上 / 300分未満

問4 この科目で **アクティブ・ラーニングの実施が必要だと考えているか** をお聞きします。
 該当するものに を入れてください。

必要である / あまり必要でない / 必要でない

問5 【問2で「a～p」を選択した場合のみ回答してください。】
実施したAL手法が学生の学修へ与えた効果 について、該当する選択肢に を入れてください。

A 遅刻・欠席の防止に寄与した	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
B 私語や居眠りの防止に寄与した	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
C 積極的な発言（質問等）を促した	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
D 学生同士の積極的な議論を促した	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
E 学生同士の積極的な協働を促した	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
F 授業内容の理解と定着を促した	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
G 授業内容への深い思考を促した	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
H 課題（レポート等）の質を高めた	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
I その他の効果（自由記述）	[]

問6 【問2で「z」を選択した場合のみ回答してください。】
AL手法を導入していない理由 について、該当する選択肢に を入れてください。

A 授業の内容上導入が難しい	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
B 大人数の授業であるため	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
C 事前・事後の準備時間が増える	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
D 講義に充てる時間が減る	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
E 教育効果があると思わない	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
F 周囲も導入していない	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
G 手法がわからない	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
H 面倒である	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
I なんとなく	<input type="checkbox"/> 4.大いにそう思う / <input type="checkbox"/> 3.そう思う / <input type="checkbox"/> 2.そう思わない / <input type="checkbox"/> 1.全くそう思わない
J その他の理由（自由記述）	[]

問7 この科目では、**ルーブリック*を用いて成績評価や学生の学修状況把握を実施** していますか。
 該当するものに を入れてください。
 ※ルーブリック：学修の評価基準を示した表。学修を通じて習得が求められる資質や能力の達成度について、評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で表す。

実施している / 実施していない / わからない

平成30年度 担当科目におけるアクティブ・ラーニング実施状況調査 結果

平成31年3月31日

- 1 調査期間 平成31年2月14日（木）～2月27日（水）
- 2 対象科目 総科目数 1272科目
(当該年度開講科目のうち、卒業論文・研究、履修者0人の科目等を除く)
- 3 対象者 対象科目を担当する常勤および非常勤の教員 316名
(複数人が担当する科目は、代表担当者に回答を依頼)
- 4 調査方法 ①常勤教員：各キャンパスで配付・回収
②非常勤教員：調査票を手交もしくは郵送し、返信用封筒にて回答を依頼。
- 5 回収率 82.9% (1054科目/1272科目)

【教員所属別回収率】

教員所属	調査対象 科目数	回答数	回収率
人間文化学部 国際文化学科	151	131	86.8%
人間文化学部 健康科学科	70	51	72.9%
経営情報学部 経営学科	57	53	93.0%
経営情報学部 経営情報学科	79	67	84.8%
生命環境学部 生命科学科	127	96	75.6%
生命環境学部 環境科学科	79	70	88.6%
保健福祉学部 看護学科	90	79	87.8%
保健福祉学部 理学療法学科	88	69	78.4%
保健福祉学部 作業療法学科	82	82	100.0%
保健福祉学部 コミュニケーション障害学科	43	41	95.3%
保健福祉学部 人間福祉学科	81	75	92.6%
助産学専攻科 経営管理研究科 総合教育センター 学術情報センター 地域連携センター 特任教授	75	69	92.0%
非常勤講師	250	171	68.4%
合 計	1272	1054	82.9%

- 6 有効回答 1246科目
(※問1～問3に回答漏れがない科目)

7 集計結果

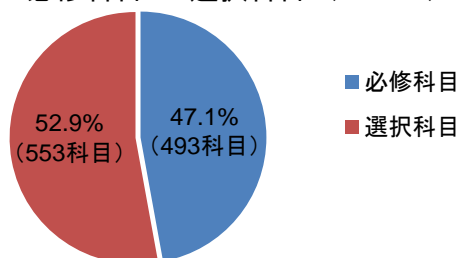
【問1】

この科目が必修科目か選択科目かをお聞きします。該当するほうに☑を入れてください。

- ① 必修科目 493 科目
- ② 選択科目 553 科目

(計 1046 科目)

問1 必修科目 vs 選択科目 (n=1046)

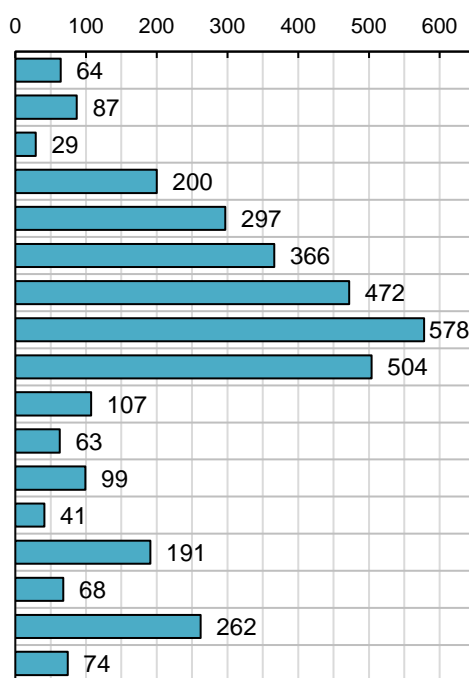


【問2】

この科目で導入しているアクティブ・ラーニング手法をお聞きします。

- ① 回答欄内の選択肢 a～pの中から、該当するもの全てに☑を入れてください。(複数回答可)
- ② アクティブ・ラーニング手法を一切導入していない場合は、選択肢 z に☑を入れてください。

手法	件数
a. フィールドワーク	64
b. 体験学修 (現地体験・地域活動)	87
c. 他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修	29
d. その他行動型学修 (実習・実技を含む)	200
e. ミニツッペーパー	297
f. 振り返り	366
g. プレゼンテーション	472
h. グループワーク	578
i. ディスカッション	504
j. ディベート	107
k. ワークショップ	63
l. PBL	99
m. TBL	41
n. 双方向授業	191
o. 反転授業	68
p. その他の参加型手法 (演習・実験を含む)	262
z. アクティブ・ラーニング手法を一切導入していない。	74



◆ 選択肢 a～p を選択した科目の総数 (AL実施科目数) 972 科目

【問3】 ※問2で「a～p」を選択した場合のみ回答

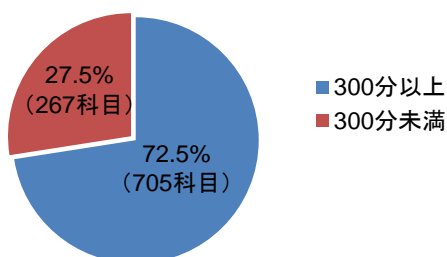
問2で選択した手法を用いたアクティブ・ラーニングを1学期に合計300分以上実施しているかをお聞きします。該当するほうに☑を入れてください。

- ① 300分以上 705 科目
- ② 300分未満 267 科目

(計 972 科目)

問3 AL実施状況 (n=972)

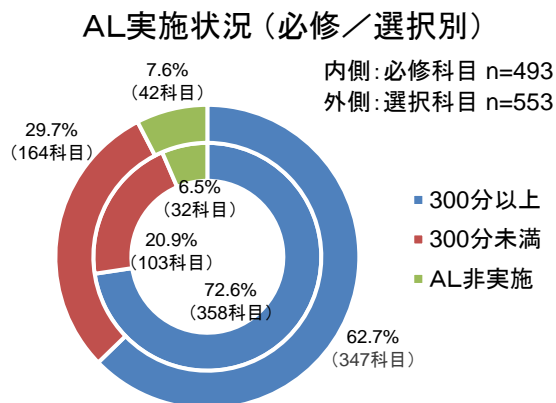
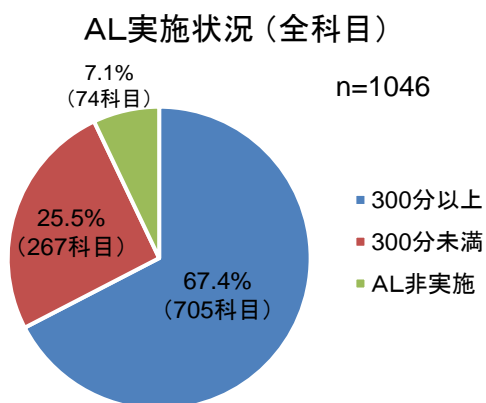
①300分以上科目 vs ②300分未満科目



◆ 平成30年度の学士課程開講科目におけるAL実施状況

(上段：件数／下段：割合)

	AL実施 (問2「a～p」)		AL非実施 (問2「z」)	合計
	30分以上	30分未満		
必修科目	358 72.6%	103 20.9%	32 6.5%	493 100%
選択科目	347 62.7%	164 29.7%	42 7.6%	553 100%
全科目	705 67.4%	267 25.5%	74 7.1%	1046 100%

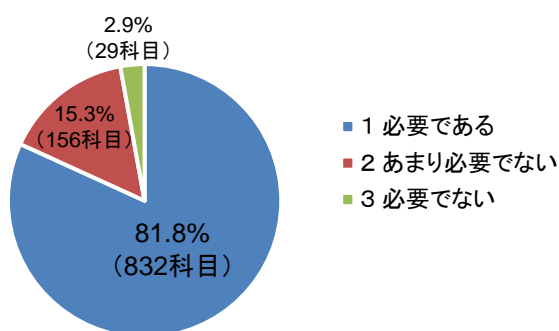


【問4】

この科目でアクティブ・ラーニングの実施が必要だと考えているかをお聞きします。該当するものに☑を入れてください。

- 1 必要である 832 科目
- 2 あまり必要でない 156 科目
- 3 必要でない 29 科目
- 回答数 1017 科目
- 未回答 29 科目

問4 AL実施の必要性 (n=1027)



◆ 担当科目におけるAL実施状況と教員意識 (AL実施の必要性) の関係

(上段：件数／下段：割合)

	科目におけるALの必要性 (問4)	科目におけるALの必要性 (問4)			合計
		必要である	あまり必要でない	必要でない	
AL実施状況	30分以上 (問3-①)	671 97.0%	21 3.0%	0 0.0%	692 100%
	30分未満 (問3-②)	160 62.3%	96 37.4%	1 0.4%	257 100%
	非実施 (問2-z)	1 1.5%	39 57.4%	28 41.2%	68 100%
合計		832 81.8%	156 15.3%	29 2.9%	1017 100%

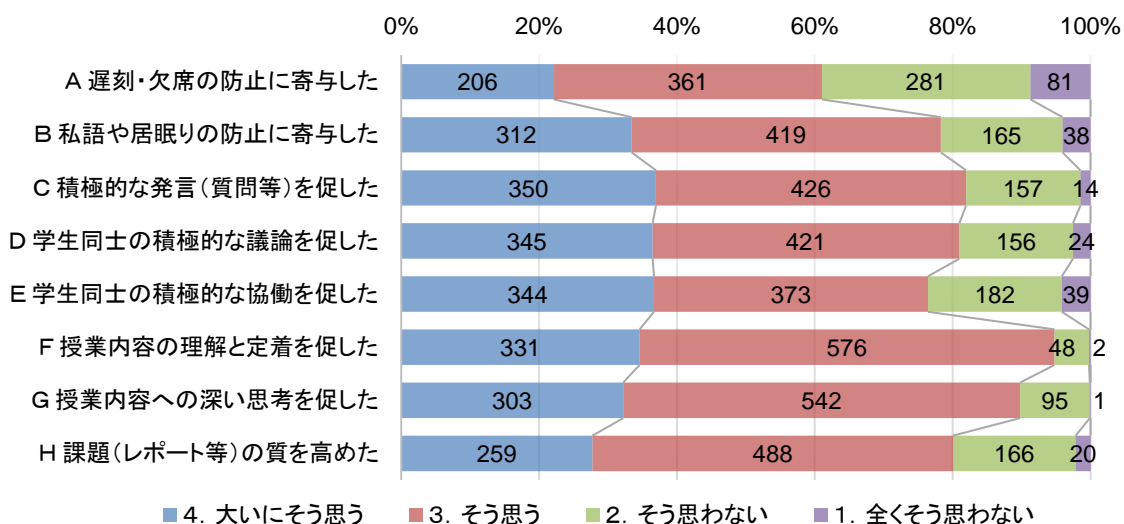
【問5】 ※問2で「a～p」を選択した場合のみ回答

実施したAL手法が学生の学修へ与えた効果について、該当する選択肢に☑を入れてください。

(上段：件数/下段：割合)

	4. 大いにそう思う	3. そう思う	2. そう思わない	1. 全くそう思わない	合計
A 遅刻・欠席の防止に寄与した	206 22.2%	361 38.9%	281 30.2%	81 8.7%	929 100%
B 私語や居眠りの防止に寄与した	312 33.4%	419 44.9%	165 17.7%	38 4.1%	934 100%
C 積極的な発言（質問等）を促した	350 37.0%	426 45.0%	157 16.6%	14 1.5%	947 100%
D 学生同士の積極的な議論を促した	345 36.5%	421 44.5%	156 16.5%	24 2.5%	946 100%
E 学生同士の積極的な協働を促した	344 36.7%	373 39.8%	182 19.4%	39 4.2%	938 100%
F 授業内容の理解と定着を促した	331 34.6%	576 60.2%	48 5.0%	2 0.2%	957 100%
G 授業内容への深い思考を促した	303 32.2%	542 57.6%	95 10.1%	1 0.1%	941 100%
H 課題（レポート等）の質を高めた	259 27.8%	488 52.3%	166 17.8%	20 2.1%	933 100%

問5 AL手法が学生の学修へ与える効果



I その他の効果（自由記述）

※主要な回答を抜粋

《肯定意見》

- presentation help students go deeper.
- 学生がやる気をもって自主的に学習している。
- 観察視点が明確になる様にした為、評価が明確になった。
- 学生自身が、自らの能力に合ったプレーを選択できる様になった。
- 設問を解くことで理解が深まる。
- 一方向の講義よりもグループワークとかの方が目の輝きが違うと感じた。
- 演習・グループワーク・発表などを取り入れたことにより、やる気UPにつながっていると思われた。
- 実習に出ることで、既修の知識・理論を結びつけることができた。
- 毎授業後小テスト（10分）を実施、学生からも知識の定着につながると評価。
- 他キャンパス、学年を超えて新たな視点で学べたと思う。

- 現地で情報収集することにより，自ら情報収集の課題を考え方法を検討する力量形成につながった。
- 現地体験により，看護の対象である住民の生活や考え方を具体的に理解できた。
- 自ら調べることで主体的に取り組めた。
- 学習している内容が身近になった様である。
- 他人の考え方を知るきっかけ・自分の弱点に気付くきっかけ
- 自分の頭で考えるということについて多少なりとも刺激を与えたのではと考えます。
- 学生の間違った認識を改め直すことができた。
- 学生自身の積極的な学習を促した。
- 授業者としての実践的な経験ができた。
- 知識を身につける大切さを実感させることができた。
- increased student enjoyment of learning.
- 受講科目への関心を高めるのに効果があった。
- 個々の学生が積極的に課題に取りくむ。
- 自分の意見を持ち，自身を持ってそれを表現できるようになった。

《否定意見》

- プログラム作成であるため，必要以上のALはコピーにつながる。
- 大人数ではその意図や効果が十分でないかも。
- アクティブ課題が多すぎて負担感を訴える者が若干名いた。

《その他》

- プログラムや数式の理解の部分は個人の能力に依存する。
- 今年度は受講生の意欲が高かったためALの効果はわかりにくかった。
- 受講者の事前学習に依存する。
- 受講者自身の事前・事後学習のその程度に依存する。
- 効果のあった学生と，効果があったように思えない学生がおり，回答がピンとこない。

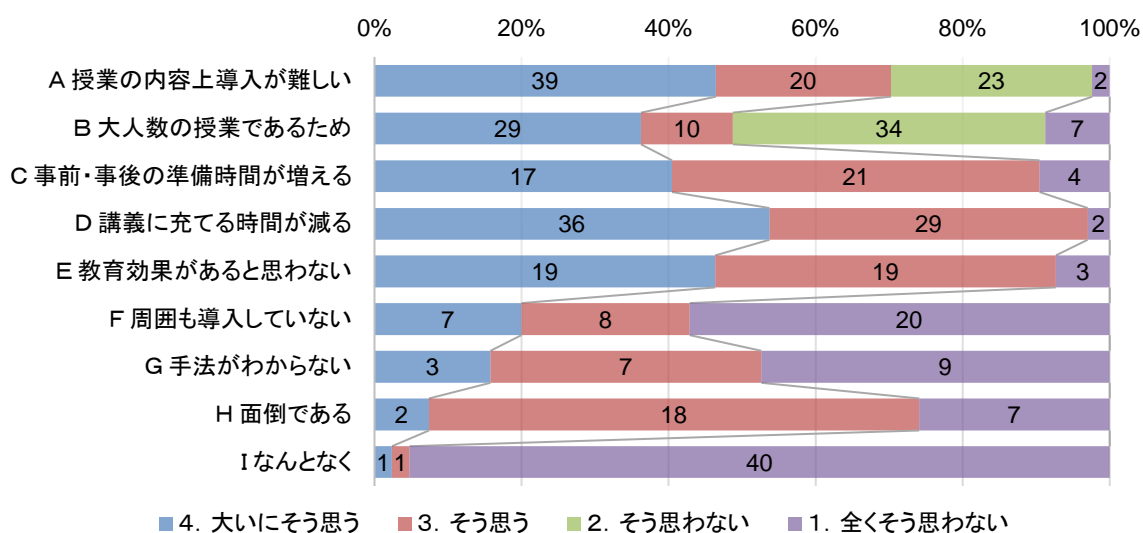
【問6】 ※問2で「z」を選択した場合のみ回答

AL手法を導入していないを理由について，該当する選択肢に☑を入れてください。

(上段：件数／下段：割合)

	4. 大いに そう思う	3. そう 思う	2. そう 思わ ない	1. 全く そう 思わ ない	合計
A 授業の内容上導入が難しい	39 46.4%	20 23.8%	23 27.4%	2 2.4%	84 100%
B 大人数の授業であるため	29 36.3%	10 12.5%	34 42.5%	7 8.8%	80 100%
C 事前・事後の準備時間が増える	17 22.1%	21 27.3%	35 45.5%	4 5.2%	77 100%
D 講義に充てる時間が減る	36 45.6%	29 36.7%	12 15.2%	2 2.5%	79 100%
E 教育効果があると思わない	19 23.8%	19 23.8%	39 48.8%	3 3.8%	80 100%
F 周囲も導入していない	7 9.2%	8 10.5%	41 53.9%	20 26.3%	76 100%
G 手法がわからない	3 3.9%	7 9.1%	58 75.3%	9 11.7%	77 100%
H 面倒である	2 2.6%	18 23.4%	50 64.9%	7 9.1%	77 100%
I なんとなく	1 1.3%	1 1.3%	34 44.7%	40 52.6%	76 100%

問6 AL手法を導入していない理由



J その他の理由 (自由記述)

- 単位取得率が規定内だから。
- 知識ベースの内容でありグループワークには向かない。人数が多く全員へのALが難しい。
- そもそも大学そのものが能動学習前提なのでナンセンス。
- 中間アンケートで学生の多くがアクティブラーニング導入を希望なかったので導入せず。
- ビデオを用いた反転授業ではないが事前にすべてもれなく予習させている。
- コアカリキュラム及び国家試験を考えると、時間的に15回では不足する。
- 教育段階として、まず作物学に関する知識を身に付けることが課題であるから。

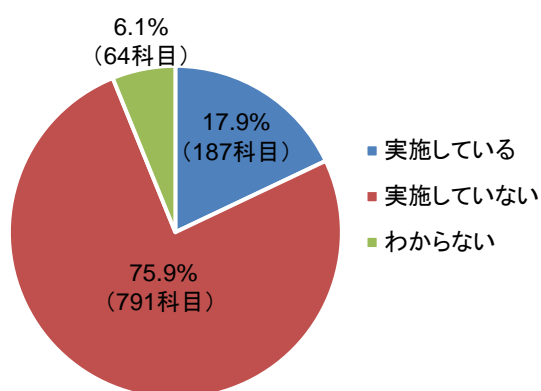
【問7】

この科目では、ルーブリックを用いて成績評価や学生の学修状況把握を実施していますか。該当するものに☑を入れてください。

- ① 実施している 187 科目
- ② 実施していない 791 科目
- ③ わからない 64 科目

(計 1042 科目)

問7 ルーブリックによる学修評価 (n=1042)



第3章

ファカルティ・ディベロッパー (F D e r)
の養成と組織的教育改善

第3章 ファカルティ・ディベロッパー（FDe r）の養成と組織的教育改善

3-1 取組概要

本学 AP 事業では、アクティブ・ラーニング実践や教育改善活動をリードするファカルティ・ディベロッパー（FDe r）を、各学科・センター等に 2 名以上養成・配置することを目標としている。それぞれ分野の異なる 11 学科を有する本学では、学科の事情や専門分野の特性に応じた教育改革の企画・実施が不可欠であり、その中心的な役割を FDe r が担うことで、各学科等のニーズに応じた組織的教育改善の実現を目指す。平成 30 年度は、FDe r を核とする改革推進を一層促すことで、新規事業を含めた多様な取組の展開を図った。

まず、FDe r による自律的かつ組織的な教育改善の推進を目的として平成 28 年度に設置した「FDe r 連絡調整ワーキンググループ（WG）」の体制強化を図り、その運用を支援した。後述のとおり、当該 WG の下で、所掌する各教育改善事業が大きく進展し、大きな成果を収めた。

次に、FDe r を主対象として、専用研修である「FDe r 養成講座」を開講し、教育改善の牽引役として求められる能力の育成に努めた。また、本学が目指す「教員・職員・学生」の協働による教育改善を実現するため、授業ピアレビューに職員・学生の参画を促したほか、新規の取組として「『教・職・学』協働による教育改革ミーティング」を試行した。同ミーティングでは、教員・職員・学生（主に学修支援アドバイザー）が相互に議論を交わしながら、本学に求められる教育改革の姿を探求するなど、学生の意見を取り入れた新たな教育改革の可能性について手応えを得ることができた。

このほか、教職員による他大学等の先進事例調査の実施を支援したほか、長らく課題としていた、教員の教育改善への取組を業績に反映させる仕組みの構築について検討を行った。

〈県立広島大学における FDe r の考え方〉

（1）FDe r の定義

本学では、FDe r の定義（求める人物像）を次のとおり定める。

担当授業等においてアクティブ・ラーニングを実践し、学科内の他の教員へアクティブ・ラーニングに関する指導・助言を行うとともに、本学におけるアクティブ・ラーニングの普及・浸透に努める者。

（2）FDe r の役割

- 自身の担当する授業においてアクティブ・ラーニングを取り入れ、授業改善を行う。
- 他の教員が担当する授業について、ピアレビューや助言を行う。
- 学科内及び学内における普及・浸透のため、事例発表や先進事例調査を行う。
- アクティブ・ラーニングの視点から、学科のカリキュラムに提言を行う。（追加）

（3）FDe r の指定条件

- ① AP 事業推進部会の部会員教員
- ② 行動型学修に係る経費助成事業に採択された教員
- ③ 先進事例調査に係る助成対象教員
- ④ 学科から推薦を受けた教員
- ⑤ その他、AP 事業が実施する各事業・取組に参画した教員

3-2 F D e rによる組織的教育改善の推進

3-2-1 新規 FDer の指名による組織拡大

平成 29 年度に AP 事業に参画した教員（行動型学修に係る経費助成申請，学外での先進事例調査や事業成果報告の実施など），及び学科から推薦があった教員の計 22 名を新規に FDer として指名し，組織拡大を図った。これにより FDer は総勢 66 名となった。

【所属別 FDer 人数一覧】

広島キャンパス		庄原キャンパス		三原キャンパス	
国際文化学科	7 人	生命科学科	8 人	看護学科	9 人
健康科学科	3 人	環境科学科	7 人	理学療法学科	4 人
経営学科	4 人			作業療法学科	4 人
経営情報学科	8 人			コミュニケーション障害学科	2 人
総合教育センター	4 人			人間福祉学科	6 人

3-2-2 F D e r 連絡調整WGにおけるグループ活動の強化

AP 事業における取組推進の実働を担う当該 WG について，昨年度の活動状況を踏まえた役割分担の見直しや，新たに FDer となった者への役割の割り振りを通じて，機能強化を図った（役割分担表は次頁のとおり）。この新たな分担の下で，各 FDer は，グループ内外の FDer と連携・協働を図りながら諸課題に取り組み，着実な事業推進を担った。

【各グループの活動内容】

グループ		主な活動内容
—	総括	1) ステークホルダーからの意見，外部評価委員会からの提言等の分析と実行 2) 教育改善の取組を業績として評価する仕組みの検討 3) FDer 自己評価ルーブリックの見直しと運用 4) 本学ならではの「高大接続」モデルの構築，具体化
1	組織的教育改善	1) カリキュラム・ポリシーの点検にもとづく全学的な教育改革へ向けての提言 2) 「AL の実施に係る意識調査」の結果分析とそれを反映した改善策の検討
2	アクティブ・ラーニングの実践と普及	1) 前後期ピアレビューの計画・運用・総括 2) 中等教育における AL 実践の参観計画立案・実行 3) AL 事例集の作成・公表
3	学修成果の把握	1) ALer 自己評価ルーブリックの運用 2) 成果を表すエビデンスのあり方(評価方法)の検討・収集，および成果の発信へ向けての検討
4	学修支援アドバイザーとの協働	1) 学修支援アドバイザー向け研修の実施 2) 学生による授業ピアレビューの実施，継続的フォローの実施 3) 教職員と学修支援アドバイザーによる合同研修会を開催し，共に ALer 養成策について意見を述べアイデアを提案する。 4) キャンパス別ラーニングコモンズ利用状況を踏まえた授業活性化策の検討

【FDer 連絡調整 WG 役割分担表】

	広島キャンパス	庄原キャンパス	三原キャンパス
総括	門戸 千幸 藤田 巧 (教学課長)	三苫 好治 石田 学 (教学課長)	細羽 竜也 横山 千衣 (教学課長)
1. 組織的教育改善	☆小川 仁士 (セ) 西本 寮子 (セ) 肖 業責 (情) 谷本 昌太 (健) 柳川 順子 (国) 藤田 巧 (教学)	◎三苫 好治 (環) 馬本 勉 (生) 福永 健二 (生) 橋本 温 (環)	◎細羽 竜也 (人) 本岡 直子 (看) 川原田 淳 (作)
2. AL実践と普及	☆岡田 高嘉 (セ) 市村 匠 (情) 重安 哲也 (情) 足立 洋 (経) 宇野 健 (情) 植村 広美 (国) 神原知佐子 (健)	◎荻田 信二郎 (生) 八木 俊樹 (生) 藤井 宣彰 (環) 藤田 景子 (生) 小林 謙介 (環)	◎飯田 忠行 (理) 黒田 寿美恵 (看) 船橋 眞子 (看) 金井 秀作 (理) 古山 千佳子 (作) 細川 淳嗣 (コ) 江本 純子 (人) 手島 洋 (人)
3. 学修成果の把握	◎五條小枝子 (セ) 広谷 大助 (情) 富田 哲治 (セ) 鈴木 康之 (国) 向居 暁 (セ) 折本 寿子 (情) 栗島 浩二 (経)	◎入船 浩平 (生) 津田 治敏 (生) 西本 潤 (環)	☆細羽 竜也 (人) 井上 誠 (看) 山中 道代 (看) 塩川 満久 (理) 吉川 ひろみ (作) 金子 努 (人) 松宮 透高 (人)
4. 学修支援アドバイザーとの協働	☆門戸 千幸 (セ) 原田 淳 (セ) 平野 実 (経) 岡本 弘道 (国) 森脇 弘子 (健) 小川 俊輔 (国) 藤田 巧 (教学) 篠原 達児 (学情)	◎原田 浩幸 (環) 楠堀 誠司 (環) 山本 幸弘 (生) 石田 学 (教学) 越智 直子 (教学)	◎津森 登志子 (看) 青井 聡美 (看) 岡田 麻里 (看) 日高 陵好 (看) 佐藤 勇太 (理) 山西 葉子 (作) 津田 哲也 (コ) 吉田 倫子 (人) 横山 千衣 (教学)

☆…各役割キャンパス間グループ長 (兼 キャンパス内グループ長)

◎…各役割キャンパス内グループ長

【所属の略称】

国…国際文化学科 健…健康科学科 経…経営学科 情…経営情報学科
 生…生命科学科 環…環境科学科 看…看護学科 理…理学療法学科
 作…作業療法学科 コ…コミュニケーション障害学科 人…人間福祉学科
 セ…総合教育センター 教学…教学課(各キャンパス) 学情…学術情報課

3-3 平成30年度FDe r養成講座の実施

3-3-1 平成30年度FDe r養成講座の実施

FDe r 教員の資質・能力の向上を目的として毎年度実施している「FDe r 養成講座」について、高大接続やティーチング・ポートフォリオをテーマとして計 5 回の研修を実施した。各研修はいずれも全学に公開しており、各 FDe r は、参加した他の教職員等との議論を通じて、本学の教育改革の在り方について考えを深めた。また、実施した研修のうちの 4 つで FDe r が講師やメンター、ファシリテーターを務めるなど、当該教員自身の成長に加えて、本学が理想とする「支え合い、学び合う」ことを通じて教員が成長し合う風土の醸成にも寄与した。

回	日時	場所	テーマ・講師・概要	参加者
1	●第1部 6月25日(月) 13:00～14:30	広島 2313 講義室 庄原 大講義室 三原 1101 講義室	【テーマ】 広島版「高大接続モデル」の構築へ向けて 【講師】 下崎 邦明(本学参与, 前広島県教育長) 【概要】 広島版「学びの変革」アクションプランによる人材育成の観点から、高大接続を強化する上で必要な教育改革や授業改善のあり方を学ぶ。	87名
	●第2部 6月25日(月) 14:40～16:10	広島 1215 会議室 庄原 第1会議室 三原 4305 会議室	【概要】 参加教員が下崎参与と本学の教育について意見交換し、教育改革に対する示唆を得た。	
2	【広島・庄原】 7月25日(水) 14:40～17:50 【三原】 10月26日(金) 13:00～16:10	広島 2313 講義室 庄原 1201 講義室 三原 4602 講義室	【テーマ】 ティーチング・ポートフォリオ・チャート作成ワークショップ 【講師】 吉川 ひろみ(保健福祉学部 教授) 【概要】 TPチャートの作成を通して教育活動を俯瞰し、日頃の活動の理念・信念を明らかにして、きづきを得る。	35名
3	8月10日(金) 13:00～18:45 8月11日(土) 9:00～18:45 8月12日(日) 9:00～17:00	広島 2451 講義室 ほか	【テーマ】 第4回県立広島大学ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ 【講師】 北野 健一, 東田 卓(大阪府立大学工業高等専門学校 教授) 【概要】 他教員及び他学科の授業改善に関する実践報告をポスター発表形式で行い、互いの取り組みを知ることで個々の授業等の改善に繋げる。	7名
4	【広島】 9月19日(水) 【庄原】 9月25日(火) 【三原】 10月19日(金)	広島 1215 会議室 庄原 第1会議室 三原 4305 会議室	【テーマ】 キャンパスFDe r協議会 【概要】 各キャンパスにおけるFDe rが一堂に会し、平成30年度AP事業における活動内容及びグループ別活動概要を共有することで、年度末までの活動を推進する。	42名
5	【広島】 10月18日(木) 16:20～17:50 【庄原】 10月19日(金) 14:40～16:10 【三原】 10月23日(火) 13:00～14:30	広島 2321 講義室 庄原 第1会議室 三原 4511 大学院 セミナー室	【テーマ】 「教・職・学」協働による教育改革ミーティング ーアクティブ・ラーナーを育成するために本学に必要なことー 【概要】 教員・職員・学習支援アドバイザー(以下「SA」という。)が相互に意見交換を行うことを通じてより良い大学教育の実現に寄与する資質・能力を育成する。	55名

3-3-2 授業ピアレビューの実践と授業改善

(1) 概要

教員が相互に教育方法について参照し合い、個々の授業内容の質向上に繋げることを目的として、本学 AP 事業では平成 29 年度から授業公開・相互評価（授業ピアレビュー）を実施している。本ピアレビューは、学生の視点に立った授業改善を狙いとしており、授業内容の「評価」ではなく、予め定められた観点に基づく学生の受講態度の「観察」を通じて、授業者が自らの授業を振り返るための気付きを得ることを特徴とする。平成 30 年度は、FDer を中心とした教員の公開・参加を引き続き推進しつつ、参観者に職員及び学生(※)を加えることで、多様な立場・観点からの意見を踏まえた授業改善の実現を目指した。また、職員及び学生の参観に際しては、参観に臨む心構えや観察のポイントを伝える事前研修の機会をキャンパス毎に設けた。

※学生の授業参観は、前年度に SA による参観を試行しており、平成 30 年度から本格実施。

(2) 前年度からの変更点

- ① 前年度は、授業公開期間の開始までに公開科目及び参加者を確定させる方式としていたが、「いつでも誰でも自由に授業を公開・参観できる」仕組みの構築を企図し、授業公開予定・参観希望を Google スプレッドシート上で管理し、全教職員で共有する形式とした。これにより、公開予定・参観希望を自由に追加可能となったほか、手続きの簡素化にも成功した。

公開日時	時間	授業科目名	FDer氏名	キャンパス	公開場所	特記事項	参観者
【記入例】10月15日(月)	4限目	英語IVa	高本 勉	庄原	CALL教室	参観可能者数:10名	
10月22日(月)	4*5限目	●●実験	◆◆◆◆	庄原	○O実験室		△△ △△
11月5日(金)	1限目	○O演習	□□ □□	庄原	◆◆講義室		○○ ○○
12月9日(月)	3限目	■■論	○○ ○	庄原	■■講義室		

図. 授業公開予定表のイメージ (Google スプレッドシート)

- ② 授業参観時の気付きを記入する様式「授業参観シート」の内容について、前期までに AP 部会員等から出された意見等を踏まえて改定を行い、後期授業ピアレビューから使用した。改定後のシートは p.44 のとおり。

(3) 授業ピアレビューの流れ

- Step1: FDer を中心とした教員に対し、授業の公開希望を募る。希望者は Google スプレッドシート上の授業公開予定表に公開希望を入力する。(公開予定は随時更新可能)
- Step2: 授業公開予定表を全教職員で共有し、参観希望を募る。教職員は、自身の興味・関心に応じて参観する授業を選択し、公開予定表に参観希望を入力する。
- Step3: 公開日当日、参観者は「授業参観シート」に、観点に基づき学生の受講態度を記録する。授業後、シートを授業者へ提出する。
- Step4: 授業者は、シートに基づき、授業改善に取り組む。なお、必要な場合は、シートの内容について参観者と授業研究会を設けることを推奨している。
- Step5: 公開期間終了後、公開者・参観者に対して授業ピアレビューに関する WEB アンケートを実施する。

(4) 実施状況及び結果

【①前期ピアレビュー】

■実施期間：6月下旬～7月下旬

■実施状況：

	広島キャンパス	庄原キャンパス	三原キャンパス	備考
公開科目数	21科目	19科目	16科目	
公開コマ数	26コマ	48コマ	27コマ	
公開者数	18人	11人	12人	
FDer	17人	10人	12人	
FDer以外	1人	1人	0人	
参観者数	51人	33人	4人	延べ人数
FDer	20人	16人	2人	
FDer以外	6人	1人	2人	
職員	19人	8人	0人	
学生(SA)	6人	8人	0人	

【②後期ピアレビュー】

■実施期間：10月第2週～1月下旬

■実施状況：

	広島キャンパス	庄原キャンパス	三原キャンパス	備考
公開科目数	14科目	12科目	24科目	
公開コマ数	42コマ	65コマ	58コマ	
公開者数	13人	9人	21人	
FDer	13人	9人	21人	
FDer以外	0人	0人	1人	
参観者数	17人	42人	59人	延べ人数
FDer	8人	13人	23人	
FDer以外	2人	4人	17人	
職員	4人	14人	0人	
学生(SA)	3人	11人	(※)19人	

※「授業支援活動」を伴う参加

(5) 公開・参観者による振り返り（事後評価アンケート）

教職員研修検討部会が主体となり、授業ピアレビューに参画した教職員及び SA 学生を対象として、授業の公開・参観経験の振り返りを目的とした事後評価アンケートを実施した。アンケートの結果は、集計のうえ、本ピアレビュー制度の効果検証及び制度改善に活用した。集計結果の概要は次に掲げる箇所のとおり。

- 前期ピアレビュー事業評価：pp.45～53
- 後期ピアレビュー結果を踏まえた平成 30 年度ピアレビュー総括：pp.54～63

授業参観シート

授業実施日時：	授業者氏名：
授業名：	参観者氏名：
受講者数（概数）：	授業形式： 講義・演習・実習・実験・その他

1 参観シートのねらい

このシートは、「アクティブ・ラーナー（生涯学び続ける自律的な学修者）を育成する」というねらいを達成するため、授業において学生が自ら学んでいるかどうかを把握する目的で使用します。

2 評点・気付きについて

具体例記載の内容の度合いを3段階で評価します。（3 あてはまる 2 十分ではない 1 あてはまらない）

「気付き」欄には、その観点で行われた活動（具体例以外のものを含む）について感想を記入してください。

該当する観点や具体例がない場合は評点を付ける必要はありません。

3 全体を通しての所見

授業中の学生の学び全体について、コメントしてください。教員の工夫が見られる点、参考になる点、改善の可能性のある点など、積極的に記述してください。

観点	具体例	評価	気付き
準備	ア 授業に参加する準備ができている。	3-2-1	
反応	イ 授業における発問や指示、板書に対して積極的に反応している。 (授業課題への取組を含む)	3-2-1	
思考表現	ウ 自分の考えをノート等に記載したり、発話によって表現している。	3-2-1	
省察	エ 質問カードやコメントシート等への記載や、教員への直接の質問を通じて、授業の振り返りをしている。	3-2-1	
協働	オ 協働的（対話的）な学びを通じて新たな発見をしている。	3-2-1	
社会性	カ 学修姿勢は適切（挨拶をする、遅刻や居眠りをしない等）であり、真摯に授業に参加している。	3-2-1	

全体を通しての所見

3-3-3 「『教・職・学』協働による教育改革ミーティング」の実施

(1) 概要

本学の全構成員が協働し、より良い大学教育の在り方について考え、全学が一体となって授業改善等の教育改革に邁進する風土情勢や仕組みの構築を目的とし、教員・職員・学生（主として SA）が本学の教育について議論する「『教・職・学』協働による教育改革ミーティング」を開催した。本ミーティングは、教員・職員・学生が一堂に会し教育について意見交換する本学初の試みとして企画され、参加者はそれぞれの立場から自由に意見を述べるなど闊達な議論が行われた。ミーティングを通じて、教育改善の参考となる多くの有益な意見が得られたほか、参加者自身の成長に寄与した。なお、平成 30 年度は第 5 回 FDer 養成講座として実施した。

(2) 実施内容

ア 目的

「生涯学び続ける自律的な学修者（ALer）」を全学で育成するために、教員・職員・学生（学修支援アドバイザー（SA）等）が相互の意見交換を通じてそれぞれ意識を高め、協働して、より良い大学教育の実現に寄与する資質・能力の育成に資する。

イ 意見交換テーマ

アクティブ・ラーナーを育成するために本学の授業で必要なこと

＜意見交換の内容＞

“事前に用意したデータ（全国の大学生及び本学学生の学修状況を示すデータ）を基に意見交換を行い、ALer の育成を推進する上で、本学に必要な方策を考えてみてください。”

ウ 実施日及び参加者数

区 分	実施日	教員	職員	学生	計
広島キャンパス	H30.10.18(木)	6 人	6 人	4 人	16 人
庄原キャンパス	H30.10.18(金)	7 人	3 人	9 人	19 人
三原キャンパス	H30.10.23(火)	7 人	3 人	10 人	20 人
計		20 人	12 人	23 人	55 人

(3) 事業評価結果（キャンパス別・属性別）

集計結果は次頁のとおり。

(4) 総括

- いずれのキャンパスにおいても、意見交換は活発に行われた。
- 短時間の意見交換であったことから授業改善策の具体化や職員の役割の明確化には困難な面があったものの、学生が感じている課題の共有化や ALer としての振り返り、教・職・学が協働して AL を推進していく必要性の共有化には一定の成果があった。
- 今後の継続を期待する一方で、時間の延長や参加範囲の拡充などの要請があった。

【事後評価アンケート結果】

属性	観 点	評価(平均値)			
		広島 C	庄原 C	三原 C	全学
教員	学生の ALer としての課題が抽出できたか	3.80	3.00	3.60	3.44
	授業に関連する課題が抽出できたか	4.00	3.00	3.60	3.50
	授業改善に通じる有用な示唆が得られたか	3.67	2.86	3.40	3.28
職員	学生の ALer としての課題が抽出できたか	3.00	3.00	3.00	3.00
	職員が教員と共に ALer 育成を推進する意義に関する認識が高まったか	3.33	3.33	3.33	3.33
	ALer 育成を推進するための職員としての役割がより具体的かつ明確になったか	3.33	2.67	3.33	3.17
学生	研修を通して ALer としての自己を省察できたか	3.00	3.11	3.40	3.22
	ALer として成長するために自分に必要な行動が具体的かつ明確になったか	3.25	3.00	3.20	3.13
共通	全体を通じて、ALer 育成に向けた教・職・学協働に資する示唆が得られたか	3.83	3.20	3.59	3.52

※ 評価は、1～4の4段階で、数値が高いほど「当てはまる」度合いは高い。

【ミーティングの様子】

■広島キャンパス



■庄原キャンパス



■三原キャンパス



3-4 先進事例調査の実施

事業推進や授業改善に必要な情報を得るため、FDerを中心として外部のシンポジウム等へ参加し、他大学等の先進事例について情報収集を行った。調査成果は、報告書や配付資料の共有、学内研修における報告により学内へフィードバックしたほか、AP部会員や事務局担当者と内容を共有し、事業の企画に活かした。参加したシンポジウム等の一覧は下表のとおり。

(期間：平成30年4月1日～平成31年3月3日)

	日程	シンポジウム等名称(場所)	参加人数
1	H30.6.30	第11回 JABEE 共催ワークショップーコミュニケーション実践道場(1)ー (場所:芝浦工業大学)	1人
2	H30.8.21	名古屋大学高等教育研究センター第151回招聘セミナー 第1回教育の質保証に関する研修セミナー (場所:名古屋大学 東山キャンパス)	1人
3	H30.8.21	平成30年度教育ネットワーク中国第2回研修会(FD/SD) (場所:サテライトキャンパスひろしま)	2人
4	H30.8.29	SPOD フォーラム 2018 (場所:香川大学)	1人
5	H30.8.30	次世代型教育推進セミナー ～アクティブ・ラーニングについて考える～ (場所:千葉県総合教育センター)	1人
6	H30.9.6	セミナー「公開講座ではじめる 研修体系の構築と導入」 (場所:株式会社インソース中四国支社)	2人
7	H30.9.10 ～9.11	AP 選定校合同 FD・SD ワークショップ (場所:神石高原ホテル)	2人
8	H30.9.12	比治山大学 平成30年度 AP 第1回セミナー (場所:比治山大学)	3人
9	H30.10.30	ことばと学びをひらく会 (場所:慶應義塾大学)	1人
10	H30.11.24	AP テーマ I 及びテーマ I・II 複合型合同シンポジウム (場所:キャンパスプラザ京都)	3人
11	H30.12.7	鶴見大学 FD 研修 (場所:鶴見大学)	1人
12	H30.12.8	ヨコハマ FD フォーラム (場所:横浜市立大学)	1人
13	H30.12.25 ～12.27	アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ (場所:大阪府立大学工業高等専門学校)	2人
14	H31.2.9	大阪府立大学・大阪市立大学・関西大学 AP 合同フォーラム (場所:関西大学梅田キャンパス)	1人
15	H31.2.10	第4回アカデミック・アドバイジング・サロン (場所:グランフロント大阪7階 ナレッジサロン)	3人
16	H31.3.2 ～3.3	第24回 FD フォーラム (場所:立命館大学衣笠キャンパス)	1人

3-5 教員の教育改善活動を評価する業績評価制度の検討

3-5-1 新たな業績評価項目の検討

FDerをはじめとして、地道な教育改善活動に取り組む教員の努力や成果を客観的に評価し、各教員の教育改善への意欲の底上げを図り、教育改革をさらに推進するため、教員業績評価制度における評価基準の見直しに着手した。具体的には、行動型学修の実施や授業ピアレビューへの参加、FD 研修講師等の活動を評価するための業績評価項目の改善について検討を行った。

この改正は、学内会議における審議を経て、平成 31 年度中の実施を予定している。

【評価の対象となる活動（例）】

- FD・SD 研修等への参加状況
- FD の講師活動等
- 授業における行動型学修の実施
- 授業における学修支援アドバイザー（SA）の活用
- 授業の公開・参観
- ティーチング・ポートフォリオの作成
- 科目別ルーブリックの作成・発信
- 高等学校への授業参観

3-5-2 業績評価制度改善の先行実施

前項の業績評価制度の改正に先立ち、速やかに教育改善の取組を評価する仕組みを実現するため、平成 30 年度の教員業績評価では、各教員に FD 関連活動の実績を特記事項（自由記述）として自己申告させ、これを点数化し研究費配分へと反映させる暫定的な制度改善を実施した。

第4章

学修支援アドバイザー（SA）の養成と 教育・学修支援活動

第4章 学修支援アドバイザー（SA）の養成と教育・学修支援活動

4-1 取組概要

県立広島大学では、学生の授業外学修の支援や、授業内におけるアクティブ・ラーニングのサポートを役割とする、従来のティーチング・アシスタント（TA）と異なる学生による新たな学修支援制度として「学修支援アドバイザー（Study Advisor：SA）」を推進している。SAは、授業内外の様々な学修支援を役割とすることを特徴とし、“学生同士”の学修支援を通じて、他学生の学びの質向上に貢献することは勿論、SA自身も「生涯学び続ける自律的な学修者（アクティブ・ラーナー：ALer）」として成長することを狙いとしている。

平成30年度は、SAの募集・養成による体制の拡充を図るとともに、SAによる授業内外の学修支援を全学的に実施した。また、授業ピアレビューやワークショップ型研修といった、教員や職員と協力して取り組む「教・職・学」の協働による教育改善活動にも参画し、学生目線から授業改善に資する意見を述べるなど、活動内容の高度化・拡大を図った。学期末には、FDeR教員をメンターとするSAの活動振り返り面談を実施し、SAが自身の取組姿勢を省察することによる、活動の改善及びALerとしての成長を促した。

《学修支援アドバイザー（Study Advisor：SA）の概要》

(1) 学修支援アドバイザーの定義

本学では、SAの定義（求める人材像）を次のとおりとする。

授業内外において本学学生への学修支援を行う学生であり、他者の学びを支援すること等を通じて、自身が学ぶ喜びを感じ、生涯学び続けるアクティブ・ラーナーを目指す者。

(2) 学修支援アドバイザーの役割

- ① 所定の日時にラーニングコモンズに待機し、学生の学修相談に応じる。
- ② 文献検索や課題作成、PC等機器の操作について支援を行う。
- ③ 自身が得意とする教科の学習指導（リメディアル教育）を行う。
- ④ 学修支援や学習指導を内容とする学内イベントを企画・実施する。
- ⑤ 担当教員の指示を受けて、事前学修を含む授業外学修のサポートや、授業（演習、実験及び実習を含む）内での授業運営支援を行う。
- ⑥ 教員の求めに応じて授業観察を行い、授業改善に資する意見を述べる。
- ⑦ 他者を支援・指導する立場として、知識・見識を広めるための努力をする。

【具体的な活動例】

学修相談 学習指導	①	・ラーニングコモンズに待機し、学修の悩みについて相談を受ける。
	②	・希望学生に対して、文献・資料の検索や、レポートの作成を支援する。 ・PCや電子黒板を使用する際に、操作を補助する。
	③	・希望学生に対して、高校の内容を中心とした教科学習の指導をする。
	④	・学生を対象に、資料検索やレポート作成についての講習会等を開催する。
授業支援	⑤	・授業外において、事前課題の作成をサポートする。 ・授業内において、グループ討議のファシリテーションをする。
	⑥	・教員の求めに応じて授業を参観し、受講生の様子（受講態度等）を観察する。 ・観察結果をもとに、受講者の視点から、授業改善について教員と意見交換する。
その他	⑦	・学内外で行われる講座やセミナーに積極参加する。 (参加に係る費用は、上限を設けた上でAP予算において負担する。)

4-2 SA募集・養成実績

(1) 概要

各キャンパスにおいてSAの募集・養成を行い、体制拡充を図った。SA募集は、一般学生からの公募及び教員による推薦の2通りの方法で実施し、意欲ある学生を積極的に採用した。また、SA候補学生は、各キャンパスのFDerグループ4代表教員が講師を務めるSA事前説明会に参加し、SAとなるにあたり必要な知識や、学修支援・授業参観の方法などを学んだ。

(2) 募集時期

4月～3月（各キャンパスが任意に設定）

(3) 事前説明(オリエンテーション)内容

AP事業及びSA制度の概要、SAとしての心構え、活動内容、授業支援・授業参観方法 等

(4) 養成状況(※H31年3月時点)

(人)

	1年	2年	3年	4年	大学院	合計
広島	0	3	6	9	1	19
庄原	0	0	4	5	5	14
三原	0	6	27	35	0	68
SA総数	0	9	37	49	6	101
うちH30養成人数	0	1	14	10	1	26

4-3 活動実績

(1) 概要

各キャンパスにおいて、教員や学生からの要望に応じた学修支援を実施した。SA学生は、多様な学修支援・授業改善活動に従事することで、他学生の学修の質向上に貢献するとともに、自身の成長に繋げた。活動のマッチングは、活動依頼者から提出された「学修支援アドバイザー派遣依頼書」(p.73)の内容に基づき、各キャンパスのAP担当職員等が仲介し行った。

(2) 活動時期

4月～3月

(3) 活動状況(※H31年3月時点)

	活動人数 (延べ)	活動時間 (延べ)	主な活動内容
広島	44人	161.17時間	<ul style="list-style-type: none"> ●授業支援(県大生として学ぶ広島と世界, 国語科教育法Ⅲ・Ⅳ) ●授業ピアレビュー ●CALL教室における機器の貸出・管理(授業時間外)
庄原	58人	327時間	<ul style="list-style-type: none"> ●新入学生への履修指導 ●授業ピアレビュー ●授業支援(果樹園芸学:ポスターセッションにおける質問・助言) ●ラーニングコモンズにおける個別学修支援
三原	86人	485.5時間	<ul style="list-style-type: none"> ●授業ピアレビュー ●授業支援 〔解剖学, 解剖学概論, 急性期看護実習, 慢性期看護実習, ヘルスアセスメント, 小児看護学概論, 母性看護方法論Ⅱ, 基礎看護実習Ⅱ, 成人看護方法論, 総合実習 ほか〕 ●ラーニングコモンズにおける個別学修支援 ●スタディースキルアップ勉強会(GPA低得点者対象)における学修支援・助言
合計	188人	973.67時間	

※活動実績は、人数・時間ともに延べ実績。

学修支援アドバイザーによる授業支援実施要領

平成28年9月26日

AP事業推進部会

1 趣旨

学生による他学生への学修支援を通じて、支援学生・被支援学生がともに学修への意欲を高めること、また授業内外における能動的学修の活性化を目的として、学修支援アドバイザー（以下「アドバイザー」という。）による授業での学修支援を実施する。

2 申請条件

教員は、次の条件を満たす場合に限り、担当授業へのアドバイザーの派遣を依頼することができる。

- (1) 申請の内容が、AP事業及びアドバイザーの趣旨に合致していること。
- (2) 学修支援業務に従事させること。特に、授業内外における能動的学修の活性化に資する業務であること。

3 申請方法

アドバイザーの派遣を希望する教員は、原則として派遣希望日の2週間前までに「学修支援アドバイザー派遣依頼書」（別記様式1）（以下「申請書」という。）を、所属するキャンパスのAP事務担当を通じて、AP事業推進部会長（以下「部会長」という。）まで提出する。

4 派遣者の決定

部会長は、提出された申請書の内容に基づき、次表のいずれかの方法で派遣者を決定する。

方法	派遣を希望するアドバイザーの指名	詳細
1	あり	・指名があったアドバイザーの了承が得られた場合は、当該アドバイザーとする。 ・指名があったアドバイザーの了承が得られなかった場合は、方法2により決定する。
2	なし	次に掲げる者の中で協議し、申請教員の了承が得られたアドバイザーとする。 ・申請教員 ・申請教員と同学科等のファカルティ・ディベロッパー ・アドバイザー

5 勤務管理と給与の支払い

- (1) 申請教員は、学修支援アドバイザー勤務表（別記様式2）により、アドバイザーの勤務状況を管理する。
- (2) 各月の勤務表は、当該月終了後速やかに、アドバイザーの所属するキャンパスのAP事務担当まで提出する。
- (3) 提出された勤務表に基づき、AP事務担当の所属課室において給与の支払い手続きを行う。

附 則

この要領は、平成28年9月26日から施行する。

提出日：平成 年 月 日

A P 事業推進部会長様

学修支援アドバイザー派遣依頼書

所 属 _____

氏 名 _____ (印)

次のとおり、担当授業への学修支援アドバイザーの派遣を依頼します。

授 業 名	
希 望 日 時	
場 所	(授業内・授業外)
支 援 の 内 容	
アドバイザーの指名 (希望する方に✓を入れる)	<input type="checkbox"/> す る (氏 名 : _____) <input type="checkbox"/> し ない (希望人数 : _____ 人)
アドバイザーに 求める能力等 ^{※1,2}	
備 考	

※1 登録者一覧の「得意分野・教科」欄を参考にご記入ください。

※2 アドバイザーを指名する場合もご記入ください。

【事務局使用欄】

申請のあった授業に対して、次のアドバイザーを派遣する。

学部／研究科	学科／専攻	学年	氏名	備考 (期間等)

学科長／ 全学共通教育部門長 確認欄		A P 事業推進部会長 確認欄	
--------------------------	--	--------------------	--

4-4 「教・職・学」協働の取組への参画

4-4-1 学生間授業ピアレビューの実施

(1) 概要

平成 29 年度に試行した SA の授業ピアレビューへの参画について、前年度の実施結果を踏まえて必要な改善を施し、正式に SA による授業参観を開始した。SA は、自らの関心に応じて選択した授業を参観し、教職員と同様に授業参観シートを用いて他学生の受講態度を観察・記録した。授業には、シートの記録を基に、当該授業の改善に資する意見を担当教員へ提供した。

(2) 成果

授業参観シートの記録からは、学生ならではの細かな気づきが多数見られ、授業担当教員からは「参考になった」との意見が多く聞かれた。また、SA は授業参観を通じて自らの学修姿勢を省察し、自律的な学修者としての成長に繋げることをテーマとして取り組んだが、参観した SA からは、自身の振り返りにも大いに役立ったとの意見が得られた（前掲：pp.45～63）。

4-4-2 『「教・職・学」協働による教育改革ミーティング」への参加

(1) 概要

10 月 18 日～23 日の期間において各キャンパスで開催した『「教・職・学」協働による教育改革ミーティング』に学生代表として参加し、本学の教育について、参加した本学の教職員と意見交換を行った（ミーティングの概要は前掲 pp.64～65 のとおり。）。

(2) 成果

ミーティングの中では、SA から、学生目線から見た本学の教育の良いところ、そうでないところについて積極的な意見が出された。事後のアンケートでは、「研修を通して ALeR としての自己を省察できたか」の問に多くの学生が肯定的な回答を示すなど、SA 自身の成長にも大きく寄与していることが確認された。

4-5 SA 活動の成果分析

4-5-1 被支援学生への効果把握

SA による学修支援の効果検証及び質向上を目的として、SA が活動した一部授業において、受講生を対象としたアンケートが実施された。結果の詳細は割愛するが、当該アンケートでは、支援を受けた学生から SA の支援活動を肯定的な評価が得られており、授業内支援において受講生の学修意欲向上や知識定着に良い影響をもたらしていることが示唆された。同時に、授業内における SA に対する支援のニーズ等も明らかになっており、このようなニーズ調査を他の科目でも実施することの有効性及び必要性を認識した。

4-5-2 振り返り面談による SA 学生の成長把握

SA の活動の実態を把握するとともに、日々の活動について SA から意見を集約し、SA 制度の改善策及び SA 学生が円滑に活動するための支援策を検討するため、FDeR 教員をメンターとする SA の活動振り返り面談をキャンパス毎に行った。具体的な流れは、メンター教員に p.75 『学修支援アドバイザー個票』に基づく面談に係る指導の留意点について」を事前に参照させ、p.76 「学修支援アドバイザー個票」の項目に基づき、SA 制度や活動に対する SA 学生の率直な意見や悩みを聞き取った。面談を受けて、メンター教員は SA に今後の活動に向けたアドバイスをを行ったほか、得られた意見を基に、SA 制度及び AP 事業の改善策を抽出・検討した。

「学修支援アドバイザー個票」に基づく面談に係る指導の留意点について

- 【1】学修支援アドバイザーとの面談については 20 分程度，個票を用いて行って下さい。（理想は年 2 回程度ですが 1 回でも構いません。）
- 【2】面談者は，可能な限り学修支援アドバイザーの所属している学部又は学科の FDer の教員が行ってください。
- 【3】面談時は，次の点を心がけてください。
- ①学修支援アドバイザーとしての活動内容から，学習相談のみの学生にはピアレビューへの参加を促したり，研修の参加を促したりするなど，学習支援アドバイザーの活動を幅広く行うことへのきっかけを作っていただくこと
 - ②学修支援アドバイザーとして困っていることや，工夫してみたいことなど学生の生の声を聞きとっていただくこと
 - ③学修支援アドバイザー自信が ALer として自らの学修を進めていけるように主体性を引き出したり，方向付けをしたり，活動の意味づけを行っていただくこと
- 【4】面談を終えた学習支援アドバイザーには個票の中にどのような面談を受けてどのように感じているかを記入させてください。
- 【5】面談を行った教員は，面談のメモ（案として添付していますが使いやすい形に変えていただいても結構です。）を残し，各キャンパスの学修支援アドバイザーの代表の先生にお届けください。
- 【6】個票は，面談を行った教員が，学生の同意を得たうえで一部コピーして，キャンパスの学修支援アドバイザーグループ代表の教員に送付してください。代表の教員は，コピーを取りまとめて本部経営企画室の担当者 (kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp) に送付してください。

学修支援アドバイザー個票

学部学科名				
学生番号				
名前				
学修支援アドバイザーとしての活動				振り返り
日時 / 内容	1 学修相談・学 習指導	2 授業支援	3 その他	ALer とし ての省察
(例) 7月13日		授業ピアレビュー参加(国 語科教育法Ⅲ)		模擬授業におけ る生徒役のイメ ージ作りが必要。
SA 担当教員との面談				
日	時	概 要		
ALer としての自己評価(年間を通した振り返り)				

第5章

学修成果の可視化の推進

第5章 学修成果の可視化の推進

5-1 取組概要

本学AP事業ではアクティブ・ラーニングの評価ツールの一つとしてルーブリックに着目し、平成27年度以降、普及・促進を図るための学内研修を開催してきた。また、平成29年度からはアクティブ・ラーナー（ALer）として求められる資質等の可視化を目的とした「アクティブ・ラーナー自己評価ルーブリック」について、策定に向けた検討を重ねてきたところである。

平成30年度は、ALer自己評価ルーブリックの本格的な運用開始を目指し、実施体制の検討・構築のための学内調整を行った。また、学内で広がりを見せつつある科目ルーブリックについても、学内の先導的な活用事例を広く収集・周知するとともに、更なる普及・促進の足がかりとするための科目ルーブリックの導入状況調査を実施した。

5-2 ALer自己評価ルーブリックの改定及び運用制度の構築

(1) ルーブリックの内容改定

平成29年度に試作したALer自己評価ルーブリックは、全学ディプロマポリシーをベースとして作成されており、本学が卒業生に求める人材像がダイレクトに反映されているが、一方で抽象度が高く、各評価項目の意図を学生が齟齬なく受け取るかが懸念材料であった。そこで、FDerグループ4を中心に、表現の見直しや、求める資質・能力の具体化等の改定作業を進め、より適切な自己評価を促すための改善を図った。

【p.80】改定後ALer自己評価ルーブリック

【p.81】改定前ALer自己評価ルーブリック

(2) 運用に向けた仕組み構築

本ルーブリックを用いた学生の自己評価の実施に向けて、総合教育センターとの連携の下、具体的な制度設計を行った。調整の結果、次の時期及び方法により運用開始することとなった。

【運用開始時期】

2019年度前期

【学生への提示方法】

「キャリア・ポートフォリオ・ブック(※)」の「学修態度」の項に組み込む。

※キャリア・ポートフォリオ・ブック（CPB）：

学生が自身のキャリアについて、自ら考え、評価し、充実した大学生活をデザインしていくことを支援するため、大学での学びや身につけた力を可視化することを目的としたポートフォリオ。入学時に全学生に配付。学生は、半期に1度実施される担当チューターとの面談において、CPBに記載した学修の状況等について他者評価を受け、学生生活の充実につなげる。

【運用の流れ】

- ① 各年度の前期・後期の期初に、ALerルーブリックを用いてALerとしての到達状況を自己評価する。
- ② 自己評価結果について、期初面談時に自身のチューター教員と話し合い、到達状況を客観的に把握する。
- ③ ①・②を入学時から4年間繰り返し（面談は計8回）、その都度、自身の学修について改善を図る

(3) 成果

平成 30 年度は、本ルーブリックの運用に係る制度の検討・調整作業に時間を要し、学生への提示及び実際の測定には至らなかったものの、実施体制を構築等で所期の目標を達成することができた。今後の計画として、次年度 4 月の期初面談から全学生による自己評価をスタートさせ、半年に一度の振り返りを通じて学生の ALer としての成長を促していく。同時に、ルーブリックの評価項目について引き続き点検・見直しを進め、不断の改善を図っていく。

Aler 自己評価ルーブリック

H.29. 7. 31.

	A. 実践力	B. 応用力	C. 基礎力
【知識・技能】	大学での学修方法を修得し、さらに学びを深めるために質問を発することができる。	授業外学修の進め方を理解し、実践できる。	基本的な学修方法や、情報収集の方法を知っている。
1. 学修・方略	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
【知識・技能】	修得した知識や技能を、他人に教えたり、問題解決に役立てたりすることができる。	修得した知識や技能を応用し、より深く学ぶことができる。	大学における幅広い学びを通じ、基礎的な知識と技能を身につけている。
2. 知識・応用	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
【思考力・判断力・表現力】	自ら組み立てた明確な意見を持ち、それを相手に的確に伝えることができる。	ものごとを多面的に捉え、柔軟に思考した上で、自らの考えを組み立てることができる。	同じことがらに對しても異なった理解や解釈が存在することを理解し、ものごとを多面的に考えることができる。
3. 意見・表明	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
【思考力・判断力・表現力】	熟考して得られた課題解決方法を、的確な方法で実行できる。	課題解決へ向けて、論理的、創造的に熟考することができ。	困難に直面したときに、解決すべき課題に気づくことができる。
4. 課題・解決	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
【主体性・協働性】	社会の諸問題に関心を持ち、主体的に学び続ける心構えができています。	自律して学修する意欲を持ち、日々の学修で実践できる。	向上心をもって学ぶことができる。
5. 自律・意欲	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
【主体性・協働性】	相手を尊重し、目標の達成に向けて協働することができる。	相互理解を進めるために対話することができる。	大学生生活において、同じ時間や場所を共有する相手思いやることができる。
6. 共感・協働	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)

- ・ 1～5の各項目について、現在の到達段階を、「A. 実践力」(6～5点)、「B. 応用力」(4～3点)、「C. 基礎力」(2～1点)で自己評価する。その際、A～Cに記述された内容について、「ほぼ達成」「半分程度達成」のいずれかを選び、□にチェックを入れる。
- ・ 全学共通とする。入学から卒業まで、毎年度、実施する。

自分（わたし）の“大学生活”

チューター面談時活用シート

【授業・学修生活】主体的な学修態度

まず、**特に主体的に参加した授業科目**を記入してください。次にその科目について、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」ごとに、1～6の水準のうち、その科目での自分の学修態度に近いところの右下の口に✓をしてください。

()年次(前期・後期)		記入日: 年 月 日	
特に主体的に参加した授業科目		科目名(複数可):	
	知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体性・協働性
6	知識を鵜呑みにせず、批判的に検討することが習慣化し、日常的に疑問を調べる。 <input type="checkbox"/>	十分に思考し判断した内容を、効果的に表現する。 <input type="checkbox"/>	グループワーク成果だけでなく、メンバー全員に配慮した行動をとる。 <input type="checkbox"/>
5	さらなる疑問について、複数の手段を用いて調べる。 <input type="checkbox"/>	思考や判断に基づいた発言が他者の思考を刺激し、ディスカッションとなる。 <input type="checkbox"/>	リーダーとしてグループワークの成果に責任をもつ。 <input type="checkbox"/>
4	疑問について調べる中で、さらに疑問を抱く。 <input type="checkbox"/>	思考や判断に基づいた発言をする。 <input type="checkbox"/>	ときどきリーダー的役割を果たす。 <input type="checkbox"/>
3	授業内に生じた疑問を教員に聞く。 <input type="checkbox"/>	求められなくても発言するが、思考や判断に基づいているか不明である。 <input type="checkbox"/>	たまにグループをリードする行動をとる。 <input type="checkbox"/>
2	授業内に生じた疑問を、ノート、本、インターネット等で調べる。 <input type="checkbox"/>	求められれば一程度発言するが、思考や判断に基づいているか不明である。 <input type="checkbox"/>	グループの方針に従い、行動する。 <input type="checkbox"/>
1	授業に出席しても疑問がない。 <input type="checkbox"/>	求められても、発言をしない。 <input type="checkbox"/>	日程調整や役割分担等グループワークに協力しない。 <input type="checkbox"/>

【教員コメント】

5-3 科目ルーブリックの導入状況・活用事例

ALer 自己評価ルーブリックとは別に、各科目の中で課題や到達度、学生のパフォーマンスの評価を目的として用いるルーブリック（本学では「科目ルーブリック」と呼称。）について、AP 事業での推進効果もあり科目や学科単位での導入が進み、特徴的な事例が生まれつつある。平成 30 年度は、機運が高まりつつあるルーブリックを用いた学修評価の実態把握を目的として、本学で初めてとなる科目ルーブリックの使用状況調査を実施し、今後の推進に向けた知見を得ることができた。以下、その結果を報告するとともに、本学を代表する科目ルーブリック導入科目である、初年次導入科目「大学基礎セミナー」及び全学共通教育科目の「地域情報発信論」について、活用事例を紹介する。

5-3-1 学士課程の授業におけるルーブリック使用状況調査

(1) 調査方法

「平成 30 年度担当科目におけるアクティブ・ラーニング実施状況調査」において、授業でルーブリックを使用しているか否かを問う質問（問 7）を設けた。（前掲 pp.27～35 参照）

(2) 結果

回答のあった 1053 科目中の 187 科目において、何らか形でルーブリックを用いた学生の学修状況把握を実施しているとの回答が得られた。

(3) 今後の展望

本調査における実態把握は、ルーブリックの導入の有無のみを問題としており、どのようなルーブリックを用いて、どのような形で評価を実施しているか等の詳細は、依然把握できていない。今後は、本調査を足掛かりとし、ルーブリックの開発や活用に係る学内の先導的事例の把握に発展させていくことで、アクティブ・ラーニングの成果検証の推進につなげていくことが課題である。

5-3-2 学士課程の授業における科目ルーブリック活用事例

(1) 実践事例

① 大学基礎セミナー

- 全学共通教育科目／1 年次対象／必修科目
- 初年次導入科目である当該科目において、大学生として必要な資質・能力を定めたルーブリックを学生に提示し、意識付けを行うとともに、自己評価により到達度を測定する。
- ルーブリックの様式等は pp.83～84 のとおり。

② 地域情報発信論

- 全学共通教育科目／2 年時対象／選択科目
- 集中講義として実施される当該科目において、ルーブリックに示した資質・能力について授業の実施前後で学生による自己評価を行い、授業を通じた学生の成長を測定する。
- 使用したルーブリックは pp.85～86、測定結果は p.87 のとおり。

(3) 今後の展望

上記の 2 事例については、各科目の担当教員により効果検証が行われており、成果の把握・蓄積が進みつつあるほか、学内外の発表機会を利用し結果を広く公表しているところである。本報告書では詳細を割愛するが、本事業の最終報告書においてその成果をまとめ、広く公開することを予定している。

「大学基礎セミナー」ルーブリックについて

総合教育センター

「大学基礎セミナー」は、大学生としての基本的な学修方法及び主体的に学ぶことができる能力を養うことを目的とした授業です。このルーブリックは、県立広島大学の必修科目である「大学基礎セミナー」の現状を把握するものです。現在の学修の状況について、裏面のルーブリックを用いて、自己評価してください。

記入後は、「大学基礎セミナー」担当者の指示にしたがって提出してください。

*このルーブリックによる自己評価の結果が、「大学基礎セミナー」の成績評価に影響することはありません。

また、個々の授業改善及び大学の組織的な教育力の向上を図る目的で実施する「授業改善のためのアンケート」とも異なるものです。

学籍番号	
------	--

自分の学修状況を自己評価してください。(3～0のどの段階か評点欄に記入してください。)

評価項目	評価基準	3：目標以上	2：目標達成	1：あと少し	0：努力が必要	評点
主体的な学修態度		授業内容や関連する新たな内容に対して興味・関心を持ち、常に主体的に学ぶことができる。	授業内容に対して興味・関心を持ち、主体的に学ぶことができる。	授業内容に興味・関心があるものの、あまり主体的に学ぶことができない。	主体的に学ぶことができない。	
授業外学修（課題、準備、復習等）時間（1科目の平均）		1時間以上	30分以上1時間未満	30分未満	全くしていない	
課題解決能力		重要度の高い新たな課題を発見し、その課題解決のために、具体的な作業計画を立て、かつ実行できる。	課題を発見し、その課題解決のために、具体的な作業計画を立て、かつ実行できる。	課題を発見できるが、その課題解決のために、具体的な作業計画を立てることができない。	課題を発見できない。	
情報検索能力		必要かつ信用できる情報を適切な方法で収集し、活用しやすい内容に整理できる。	必要かつ信用できる情報を適切な方法で収集できる。	必要な情報を適切な方法で収集できるが、信用できない情報も含まれている。	必要な情報を適切な方法で収集できない。	
文章構成力		自分の考えをレポートで正確かつ分かりやすく、そして説得力ある形で説明できる。	自分の考えをレポートで正確かつ分かりやすく説明できる。	自分の考えをレポートで説明できるが、不正確で分かりにくい点が見られる。	自分の考えをレポートで説明できない。	
プレゼンテーション能力		自分の考えをプレゼンの場で正確かつ分かりやすく説明でき、質問や批判に適切に対応できる。	自分の考えをプレゼンの場で正確かつ分かりやすく説明できる。	自分の考えをプレゼンの場で説明できるが、不正確で分かりにくい点が見られる。	自分の考えをプレゼンの場で説明できない。	
討議力		他の人の意見を聞き、その内容を理解した上で、積極的に自分の意見を述べ、建設的な議論を構築できる。	他の人の意見を聞き、その内容を理解した上で、積極的に自分の意見を述べることができる。	他の人の意見を聞き、その内容を理解できるが、積極的に自分の意見を述べることができない。	他の人の意見を聞くことができず、自分の意見を述べることができない。	

『地域情報発信論』科目ルーブリック:

8月27日 講義開始時

学籍番号: 氏名:

- 自分自身の学修成果を確認してもらうためのシートです。
- 成績評価には反映しません。
- 現時点でどの段階か、該当すると思う欄に○を記入してください。

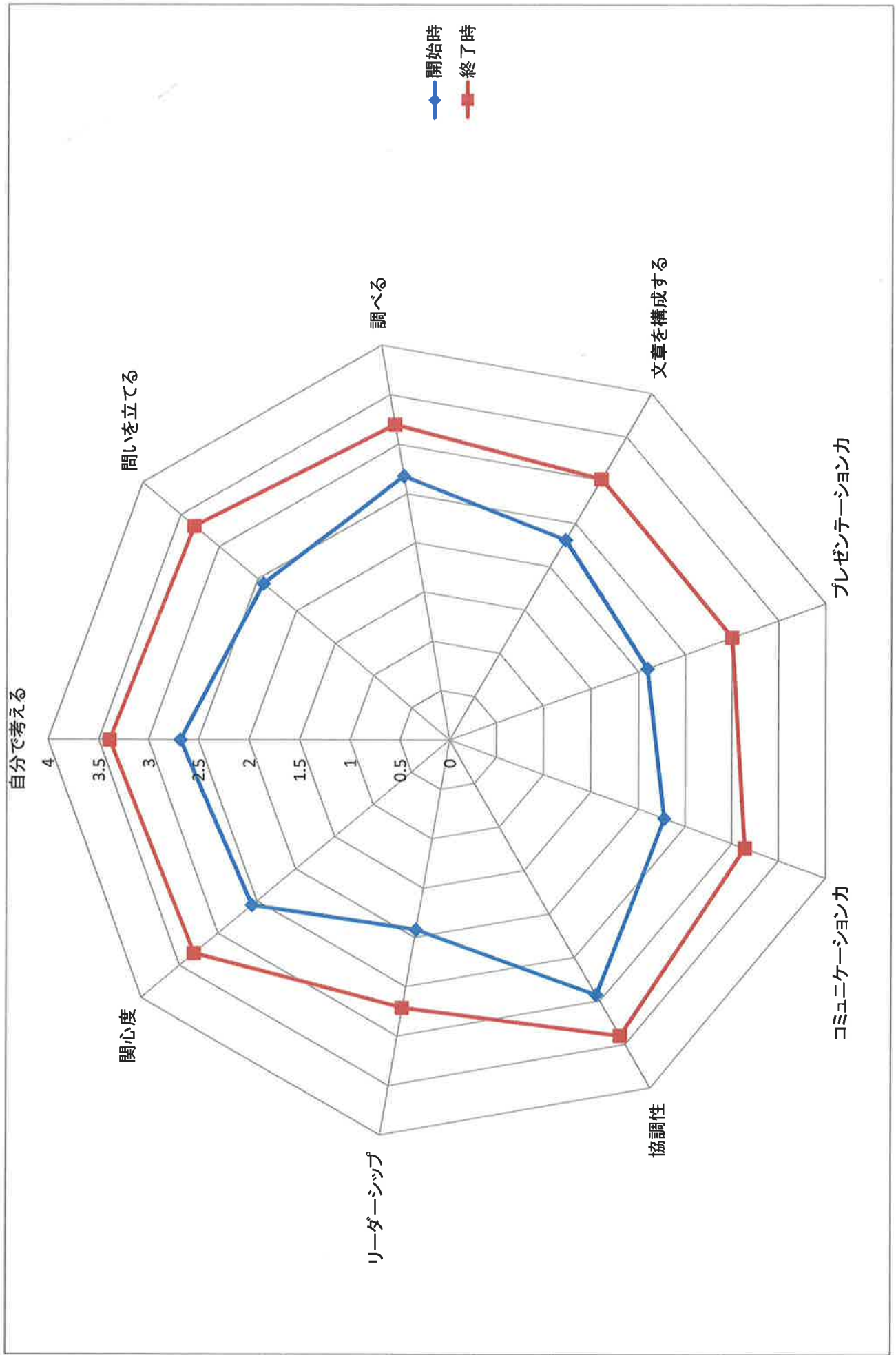
4 : あてはまる
 3 : ややあてはまる
 2 : ややあてはまらない
 1 : あてはまらない

項 目		4	3	2	1
自分で考える	授業内容や関連する新たな内容に対して、自分で考え、理解を深めることができる。				
問題を発見する 〈問い〉を立てる	新たな課題を発見することができる。 あるいは、どんなことを掘り下げればよいかという問いを設定し、その解決をはかることができる。				
調べる	必要な情報を適切な方法で収集し、活用しやすい内容に整理できる。				
文章を構成する	自分の考えを正確にわかりやすく、そして説得力ある形で文章にすることができる。				
プレゼンテーション力	自分の考えを正確にわかりやすく説明でき、質問や批判に適切に対応できる。				
コミュニケーション力	他の人の意見を聞き、その内容を理解した上で、積極的に自分の意見を述べるすることができる。				
協調性	他の人の意見を聞き、その上で、ともに問題について考えることができる。 また、グループの他の人と協働して作業をすることができる。				
リーダーシップ	グループ内の異なる主張や対立を把握した上で、自ら率先してメンバーに問いかけ、グループ内の意見を取りまとめることができる。 また、グループメンバーの積極的な参加を促すような発言や行動ができる。				
関心度	【テーマ：広島再発見】について、関心があり、テーマについて更に深く掘り下げたいと思っている。				

- 自分自身の学修成果を確認してもらうためのシートです。
- 成績評価には反映しません。
- 現時点でどの段階か、該当すると思う欄に○を記入してください。

4 : あてはまる
 3 : ややあてはまる
 2 : ややあてはまらない
 1 : あてはまらない

項 目		4	3	2	1
自分で考える	授業内容や関連する新たな内容に対して、自分で考え、理解を深めることができる。				
問題を発見する 〈問い〉を立てる	新たな課題を発見することができる。 あるいは、どんなことを掘り下げればよいかという問いを設定し、その解決をはかることができる。				
調べる	必要な情報を適切な方法で収集し、活用しやすい内容に整理できる。				
文章を構成する	自分の考えを正確にわかりやすく、そして説得力ある形で文章にすることができる。				
プレゼンテーション力	自分の考えを正確にわかりやすく説明でき、質問や批判に適切に対応できる。				
コミュニケーション力	他の人の意見を聞き、その内容を理解した上で、積極的に自分の意見を述べることができる。				
協調性	他の人の意見を聞き、その上で、ともに問題について考えることができる。 また、グループの他の人と協働して作業をすることができる。				
リーダーシップ	グループ内の異なる主張や対立を把握した上で、自ら率先してメンバーに問いかけ、グループ内の意見をとりまとめることができる。 また、グループメンバーの積極的な参加を促すような発言や行動ができる。				
関心度	【テーマ：広島再発見】について、関心があり、テーマについて更に深く掘り下げたいと思っている。				



第6章

高大接続改革の推進

第6章 高大接続改革の推進

6-1 取組概要

県立広島大学では、平成28年度に決定したAP事業期間の延長を受けて、新たに「高大接続改革の推進」を事業計画に加えた。これは、それまで大学として実施してきた高大連携の取組に加え、来たる高大接続システムの改革を見据え、授業の手法や評価などの「教育内容」において高校と大学がより相互理解を深め、円滑な高大接続に繋げることを狙いとするものである。また、広島県立の大学として県立高校各校との繋がりを一層強化し、公立大学の新たな高大接続モデルを開発・提示することも射程に置いている。平成30年度は、高等学校への授業見学や、高等学校と大学が相互に教育実践を報告し合う合同発表会（広島県教育委員会主催）への参画を通じて、高大連携の深化に努めた。他方、FDer教員と高校教員による共同研究が複数行われるなど、教員個人レベルでの高大連携の進展も確認できている。

6-2 高等学校への授業見学

(1) 取組内容

本学の教職員が実際に高等学校に赴き、生徒が学ぶ様子やアクティブ・ラーニングの実施状況等の高等学校教育の現状を知ることが目的として、先導的な教育実践に取り組む県内高等学校への授業見学を実施した。この見学は、各高等学校の公開授業研究会の機会を利用して行うもので、見学する教科は参加教職員の興味・関心に応じて選択した。参加者は、実際に授業を見るだけでなく、授業後の研究会で授業者と意見を交わすなど、高等学校教育への理解を深める有意義な機会となった。なお、教職員以外にも教員の呼びかけに応じた教職志望の学生数名が参加するなど、本学学生の成長にも繋がった。

【参加実績】

学校名	日程	教科・内容	参加者
広島市立基町高等学校	平成30年 10月23日(火)	国語	教員2名 学生8名
広島市立広島商業高等学校	平成30年 10月23日(火)	地歴・公民	教員2名 学生2名
広島市立美鈴が丘高等学校	平成30年 10月23日(火)	理科(化学)	教員1名
広島県立広島高等学校	平成30年 11月9日(金)	①英語 ②理科(物理) ③地理歴史・公民	教員2名 職員1名
計			18名

(2) 成果

今年度は少人数の参加にとどまったが、比較的文・理のバランス良く教科選択が行われた。参加教員による報告からは、高等学校の授業実践から良い部分を取り入れようとする姿勢が見られるなど、高等学校教育への理解の深化とともに、授業改善の充実に寄与したことが伺えた。また、10名もの学生が参加したことから、学生にも一定のニーズがあると予想される。今後の高大連携は、取組の幅を広げる上でも、学生を交えた事業について検討の余地があろう。

6-3 平成30年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会への参画

(1) 取組内容

広島県内の高等学校の教育実践例を学び、本学の教育改革・授業改善を図るとともに、本学の教育・授業実践事例について高等学校教員へ広く周知するため、広島県教育委員会との共催により「平成30年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会」を開催した。本学は、パネルディスカッション及びポスター発表において、AP事業の成果や教育実践の報告を行った。

なお、前年度と異なり、高等学校の「カリキュラム・マネジメント研修」を兼ねて開催したため、パネルディスカッション及びポスターセッションにおける本学の発表も、カリキュラム・マネジメントに係る取組を主たるテーマとして報告した。

(2) 実施概要

ア 日時 平成31年1月25日（金）9:30～16:30

イ 場所 【全体会（午前）】サテライトキャンパスひろしま

【分科会（午後）】広島県民文化センター 地下1階展示室

ウ 内容 当日のプログラムは次のとおり。

時刻	プログラム	内容	登壇者・発表者等
9:30～ 9:50	開会行事	開会の辞	
9:55～ 10:35	【カリキュラム・マネジメント研修】 校内研修報告	高等学校のみ参加	
10:45～ 11:55	【カリキュラム・マネジメント研修】 パネルディスカッション 『育てたい資質・能力』からカリ キュラム・マネジメントを考える	<ul style="list-style-type: none"> ● 高等学校による報告 ● 大学による報告 ● パネルディスカッション 	高校：広島県立世羅高等学校 広島県立呉商業高等学校 大学：西本 寮子 宮島学センター長 モデレーター：馬本 勉 学長補佐
13:05～ 13:55	【分科会ポスターセッション】 大学発表	本学教員による発表 (20分×2回)	11学科，総合教育センター， 宮島学センター
14:05～ 15:55	【分科会ポスターセッション】 高校等発表	国公立立高校及び県立 教育センターによる発表	高等学校等21グループ
16:10～ 16:30	閉会行事	挨拶，閉会の辞	中村 健一 学長 諸藤 孝則 広島県教育委員会事務局教育部長

(3) 報告内容

ア 全体会

高等学校対象の研修報告の後、高校・大学によるカリキュラム・マネジメントや教育実践の報告及びパネルディスカッションを行った。本学からは、西本寮子宮島学センター長が登壇し、宮島をフィールドとする教育・研究実践の取組や、元々国際文化学科の取組であった「宮島学」が全学共通教育へと拡大されたカリキュラム改善の経緯等を報告した。

【高 校】報告①：広島県立世羅高等学校 永谷 修三 教諭

報告②：広島県立呉商業高等学校 隅田 一 教諭

【大 学】報告者：西本 寮子 宮島学センター長

テーマ：『宮島学』で学びを深める

【モデレーター】馬本 勉 学長補佐・AP事業推進部会長

イ 分科会

午後の分科会は、大学及び高等学校等が3つの会場に分かれてポスターを掲示し、同一内容を2回ずつ発表する形式のポスターセッションを実施。大学と高等学校が相互に発表・質問し合うことで、教育実践について情報共有が図られた。

【大 学】

発表者：各学科（11学科）、総合教育センター全学共通教育部門、宮島学センター

発表内容：カリキュラム・マネジメントに係る各学科及びセンターの取組

その他、各学科及びセンターにおける授業実践や授業改善等の組織的取組

※本学発表テーマ一覧は p.96、発表したポスターの原稿は pp.97～109 のとおり。

【高校等】

発表者：国公立高等学校、教育研究会（全21事例）

発表内容：課題発見・解決学習推進プロジェクト等による教育実践事例報告

(4) 参加者

区 分	計
高等学校教員・県教委関係者等	164
県立広島大学 教員（発表者等含）	15
県立広島大学 職員	5
合 計	184

※参加対象：広島県内の高等学校教員、広島県教育委員会関係者等、本学教職員

(5) 参加者の主な意見・感想等（参加者アンケートから抜粋）

【アンケート集計結果】

区 分	全体会	分科会		
		大学発表	分科会全体	
大変参考になった	44	140	満足	80
参考になった	62	144	やや満足	54
あまり参考にならなかった	12	6	やや不満	6
参考にならなかった	1	0	不満	0

【意見・感想】

[大学の取組・発表に対して]

- ・ 地域と連携して体験を重視されていることがよくわかりました。
- ・ 身近な大学の現状や講義の内容等が知れてよかった。
- ・ 大学の教育改革の取組みが分かって参考になりました。
- ・ 総合的な探求の時間にむけ、地域とのつながり、そこからどう生徒の資質を評価していくか参考になった。
- ・ 健康科学科...外部との連携という点で参考になった 宮島学...「宮島学」の存在は知っていたが、何をしているか知らなかったなので、具体的に分かってよかった。
- ・ バックグラウンドを外国に持つ生徒が大半を占める学校と関わることで、そのような生徒のためにもなるし、大学の学生にとっても研究テーマが見えてきたり、自分の進むべき道が決まったりするというのが大変興味深かったです。

- 大学で付けたい力、そのための取組みが良く分かりました。高大連携がスムーズに行くよう高校での取組みからの継続性を考慮して、高校の取組みを考えていく必要性を感じました。
- 地域の適材を活かした取組み・地域連携の必要性を感じました。参考になりました。
- 評価をもとにした取組みなので、分かりやすく、参考になりました。
- 外国にルーツがある子供の支援は県大の大きな目玉になる可能性のある、優れた取組みであると感動しました。

[その他、大学に対しての意見]

- 高校でも取り入れたい内容があり、今後連携を図りたい。
- 高校の取組みとあまり変わらないように感じた。
- 大学全体で一貫した取組み内容はどれも大変参考になりました。
- 県立大学としての役割を意識されているからこそ、県立学校との連携・取組等の共有を進められていると感じました。
- 大学1年生で取り組まれている内容の一部は、高校生でも取り組むことができる内容もあった。大学生ならではの取組みを具体的に、ピンポイントで発表してもらいたかったと少し思いました。
- 生徒が進学先でどのようなことをしているのか参考になり、イメージがもてました。
- 高大連携もありますが、小・中を意識した授業につながると、生徒の意識も少しずつ自主的に考えていくことを助けると感じた。
- 大学についての話を聴く機会が少ないので参考になりました。宮島学など興味を持てるものでした。
- 宮島学の取組みが参考になった。大学の授業参観がしたい。
- 宮島学以外においても発表してほしい。それから宮島学での常に変化する新しい取組みを伝えてほしい。
- 大学の先進的な取組み素晴らしいです。それぞれの学科の専門性を活かした取組み参考になりました。
- 保健福祉学科で共通するロールプレイングによる擬似患者体験プログラムが参考になりました。
- 単に実践を発表するだけでなく、評価等の方法や分析まで欲しい。
- 大学の取組内容についてご紹介いただけるこのような機会がもっとあればよいと思いました。高大接続のイメージがわかりました。
- 個別にお話できる時間は限られるので、事務局で高・大をつなぐやりとりを調整できる体制もあるといい。もっともこれらと思えばコンタクトしておりますが、後で要旨を見直してから興味がわくこともあります。高校側が卒業生の動向調査を当人を対象にしているが、大学側では入学していただき、研究室で育てるので高校が大学教員と高校側の取組みの接点のヒントになる。受入教育へのアンケート・ヒアリングが可能なのでは。

(6) 成果

高等学校のカリキュラム・マネジメント研修を兼ねた平成30年度の合同発表会は、午前及び午後ともそれに類する内容の報告が中心であった。本学では「カリキュラム・マネジメント」という概念は一般的でないものの、教育課程の不断の見直しによるアクティブ・ラーナー育成という観点から、参加教職員は高校の発表から貴重な知見を得ることができた。

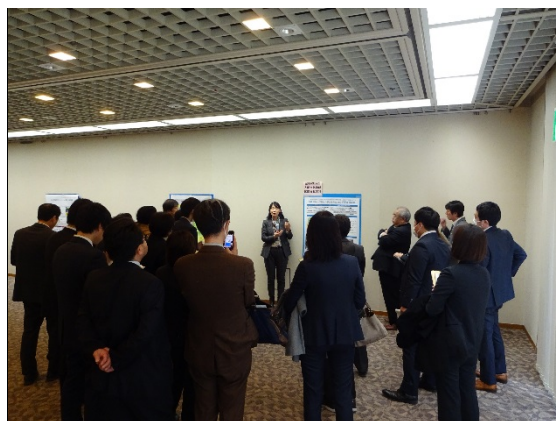
高等学校関係者からの反応としては、「参考になった」等の肯定的意見のほか、「大学に授業参観がしたい」といった意見も見られた。今後の高大接続強化を考える上で、大学から高校への一方的な授業見学だけではない、新たな相互交流について重要な示唆が得られた。

(7) 参考

【全体会の様子】



【分科会・閉会行事の様子】





平成30年度 広島県高等学校教育研究・ 実践合同発表会

開催日時

平成31年 1月 25日 (金)

10:45～16:30 [午前:全体会/午後:分科会]

本学参加対象

教職員, 学生(教員志望の学生を歓迎します)

会場

広島市中区大手町1-5-3

【全体会】

サテライトキャンパスひろしま 大講義室

【分科会】

広島県民文化センター 地下展示室*

*サテライトキャンパスと同じ建物の地下1階です。

全体会 10:45～12:05

サテライトキャンパスひろしま 大講義室

10:45 パネルディスカッション

大学と高校が, カリキュラム・マネジメントについて取組を紹介し合い, そのあり方について議論を交わします。

■事例報告

- ・県立広島大学(登壇: 西本 寮子 宮島学センター長)
- ・世羅高等学校
- ・呉商業高等学校

■モデレータ 馬本 勉 学長補佐

12:00 諸連絡

12:05～ 休憩

※今回の全体会(パネルディスカッション)は, 高等学校のカリキュラム・マネジメント研修の一環として行われます。

分科会(ポスターセッション) 13:05～16:00

広島県民文化センター 地下展示室

13:05～13:55

ポスターセッション I (大学)

各学科及びセンターの組織的な取組(特徴的な授業実践事例を含む教育プログラム)

【第1展示室】

- ・国際文化学科
- ・健康科学科
- ・経営学科
- ・経営情報学科

【第2展示室】

- ・生命科学科
- ・環境科学科
- ・総合教育センター
- ・宮島学センター

【第3展示室】

- ・看護学科
- ・理学療法学科
- ・作業療法学科
- ・コミュニケーション障害学科
- ・人間福祉学科

14:05～15:55

ポスターセッション II (高等学校)

- ① 平成30年度「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」研究開発校
- ② 平成30年度スーパーサイエンスハイスクール支援事業指定校
- ③ 平成30年度スーパーグローバルハイスクール支援事業指定校
- ④ 平成30年度国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業指定校
- ⑤ 広島県高等学校教育研究会

閉会行事 16:10～16:30

サテライトキャンパスひろしま
大講義室

16:10 大学挨拶 中村 健一 学長

16:25 閉会挨拶 諸藤 孝則 広島県教育委員会教育部長

担当・問い合わせ

本部経営企画室 AP事業担当
TEL 082-251-9727 (内線 1230)
E-Mail kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp

平成30年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会（県立広島大学第6回FDer養成講座）
 県立広島大学[ポスターセッションⅠ]発表一覧

資料番号順

区分	No.	学部学科名	発表者	テーマ	資料番号	発表場所	発表時間
Aグループ	1	人間文化学部 国際文化学科	植村 広美	学科専門科目におけるサービス・ラーニングの取組み ー外国にルーツをもつ子どものための学習支援活動ー	1	第1展示室	1回目 13:05～13:25 2回目 13:35～13:55
	2	人間文化学部 健康科学科	鍛島 秀明	学生の主体的な学修としてのCalbee Future Labo「新商品開発プロジェクト」をより深化させる組織的な取組 ー学生の成長と今後の課題ー	2		
	3	経営情報学部 経営学科	足立 洋	経営学科におけるカリキュラム改善の取組み ～中国税理士会提供講座の開講～	3		
	4	経営情報学部 経営情報学科	広谷 大助	初年次導入科目 経営情報学研究序論の取組みとその検証	4		
Bグループ	5	生命環境学部 生命科学科	福永 健二	「フィールド科学」におけるグループワーク「庄原探訪」について	5	第2展示室	
	6	生命環境学部 環境科学科	橋本 温	環境科学分野の体系の理解と専門キャリアの形成にかかる取組み	6		
	7	総合教育センター 全学共通教育部門	本岡 直子	県立広島大学全学共通教育の課題と展望	7		
	8	宮島学センター	西本 寮子 大知 徳子	「宮島学」を基盤とした教育の実践 ー宮島を学ぶ、宮島で学ぶー	8		
Cグループ	9	保健福祉学部 看護学科	津森 登志子	大人数・大講義室講義科目におけるクリッカーを使用した双方向授業	9	第3展示室	
	10	保健福祉学部 理学療法学科	長谷川 正哉	理学療法学科における模擬患者演習のとらえ	10		
	11	保健福祉学部 作業療法学科	古山 千佳子	作業療法学科における地域プロジェクトの取組み	11		
	12	保健福祉学部 コミュニケーション障害学科	津田 哲也	言語聴覚士を目指す学生のための模擬患者による医療コミュニケーション演習の学習効果	12		
	13	保健福祉学部 人間福祉学科	吉田 倫子	主体的な社会福祉実習を行うための事前学習の見直し	13		

6-4 高等学校と連携した共同研究等の推進

(1) 取組内容

大学が主導して取り組む高大接続改革の取組以外に、本学教員が個別に取り組む高等学校との連携（講演講師や外部委員の受託，共同研究の推進等）も積極的に行われている。このうち、FDer 教員による高大連携も取組も進められ、平成 30 年度に進められた共同研究の事例として、FDer 教員が地域の高等学校と連携した取組をにより進められ、ポスター発表の機会を通じ学内外へ報告が行われた。詳細は下記及び別紙のとおり。

所属	教員名	連携先	取組内容
生命環境学部 生命科学科	荻田 信二郎	学校法人安田学園 安田女子中学高等学校	p.111
生命環境学部 環境科学科	三苦 好治	広島県立庄原実業高等学校	p.112

(2) 今後の課題

上記は一部の事例であるものの、AP 事業による高大接続推進を契機として様々な高大連携の取組が行われるなど、着実にその機運は高まりつつあると考えられる。高等学校と大学とがより連携を密にすることは、個別の取組を超えて双方の教育に良い影響をもたらすことから、AP 事業終了後も積極的に推進していくことが求められる。今後の課題としては、個別の取組の実態把握に努めるとともに、報告機会を設けることで全学的な周知・普及を進めていく。

“高大連携型ALの試み”

平成30年度 安田学園 安田女子中学高等学校
生徒研究発表会への県大生の参加を通じて

県立広島大学
Prefectural University of Hiroshima

学校法人 安田学園



安田女子中学高等学校

平成31年3月8日（金）平成30年度 県立広島大学教育改革フォーラム
報告者：生命科学科・大学院生命システム科学専攻（FDer）荻田 信二郎
ogita@pu-hiroshima.ac.jp

Point 1

ファシリテート（連携）の足がかり

まずは、教員間のチャンネルを維持できること（これまでのフォーラム発表等でお会いした先生方と、メール等を介した日常的なイベント開催等の情報交換やイベント訪問に努める）。

当該イベントは、まずは教員のみ参加（例えば授業参観）でもよいが、前後で教員間の打ち合わせ等、直接情報交換ができることが望ましい（今回は、高大の生徒参加型の研究発表会であり、ニーズとシーズがマッチした事例として柔軟に対応いただいた。⇒後述）。

学生が大学院で取り組んでいる研究は日常的な「ALの実践場」であり、研究進捗や成果発信のスキルUPについては、日頃から十分議論しておくことが大切である。

Point 2

プレゼンター（ALer：アクティブラーナー）について

今回参加した学生は、教育・研究に真摯に取り組んでいる大学院生であり、TA（ティーチングアシスタント）やRA（リサーチアソシエイト）として従事している他、本学の重点事業「研究・教育環境の国際化推進をコアとした大学院の質的改革に資するプログラムの構築」における国際学会発表支援制度の採択者である。⇒プレゼンターとして高い資質があった。

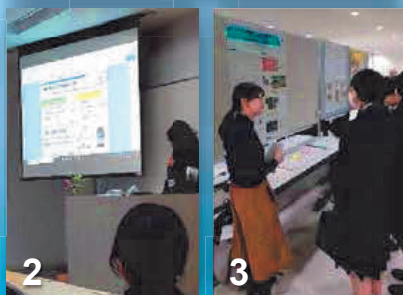
当該イベントでは、高校生らが行う英語による発表の場もあり、大学院留学生は母国の説明や、留学体験などを交えて紹介することで、自身が発表の中でどのように魅力をアピールするかを工夫するよう努めた。会場からも複数の質問をいただき、良いALの機会となった。

日本の学生は、研究説明のみならず、生徒に対しては大学案内やアドバイス、教員の方にはより詳細な説明や議論を行うことで、Q&Aを通じて多くの気付きを得たようであった。

Point 3

今回の連携と対応について

安田学園では、平成24年度に文部科学省より指定を受けたスーパーサイエンス事業において推進してきた成果を、中高6年間で系統性を持たせた課題研究への取り組みや成果・過程の評価研究として継続して推進している。平成30年12月15日（土）に安田女子大学を会場にした当該イベントでは、同校の姉妹校である台湾の蘭陽女子高級中学の生徒との交流、安田女子大学・広島市立大学・県立広島大学・広島大学・愛媛大学の学生などの発表もあり、近隣の中学校・高等学校・大学の生徒、学生及び教職員、約1300人を動員した極めて先進的な取り組みであった。本学からは以下の通り3名の大学院生が参加、発表を通じて自己研鑽し、大学の魅力紹介を行う新たな「ALの実践場」をいただいた。この事例は双方の関係強化に有効であると考えており、「高大連携型AL」として発展させたい。



県大生の発表課題について

- ✓ Establishment of high-efficient tissue culture protocol of Dokudami (*Houttuynia cordata* Thunb.) in liquid culture **口頭：英**
- ✓ Effect of plant growth regulators on early shoot regeneration of bamboo **口頭：英**
- ✓ ナス科植物の茎における薄切片法を用いた分裂活性制御の有効性の検証 **ポスター：和**

安田女子中学高等学校の発表会について

<http://www.yasuda-u.ac.jp/jh/event/2862.html>



県大生の所属と研究内容について

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/~ogita/index.html>



- 1: 参加した県大大学院生（留学生2名＋県内生1名）
- 2: 英語セッションで研究紹介をする留学生
- 3: ポスターセッションで研究・大学紹介をする県内生

アクティブ・ラーニング的手法を取り入れた 新しい高大連携の挑戦的取り組み ～地域の課題を地域の特産で解決しよう～

県立広島大学 資源循環プロジェクト研究センター&学部FDer責任者：三苫好治
 県立広島大広島大学 生命環境学部生命科学科：吉野智之、山本幸弘、村田和賀代、藤田景子
 県立庄原実業高校 食品工学科 黒川元治

概要

庄原市は、広島県の北部に位置し、緑豊かな地域です。人口は4万人弱であり、主な産業は農・林業です。特に農業は、農業産出額ベースで、広島県内順位1位（227億円弱）、全国順位60位となっており、耕種農業と畜産農業の両方でバランスよく構成されています（畜産農業に焦点を当てると、広島県内では1位、全国では29位となっています：第1次産業従事者割合 庄原市20.2% <65歳以上75.9%>、広島県全体3.1%）。近年、有害鳥獣によって耕作地域が荒らされたり、それらが豚コレラの感染経路となっていたり、庄原市では、その防除対策費に年間34,679千円もの予算が投入されています。残念ながら抜本的な対策技術もなく、離農者増加の一因となっています（H27統計資料より抜粋）。

そこで本取り組みは、**地域の課題を逆手に取り、大学と高校がこれまでにない連携形態を構築し、地域の新たな特産を生み出す取り組み**を行っています（本研究センターではイノシシ忌避装置など開発・販売実績有）。具体的には、**イノシシ肉を地域の特産品と掛け合わせ、新たな特産品の開発を計画**しました。「地域に元気を！」と頑張ってます！ 地域の特産の収集・購入や連携は、これまでの地元企業との共同研究を強みにもつ県立広島大学「資源循環プロジェクト研究センター」と「しょうばら産学官連携推進機構」が担当し、調理方法については生命科学科食品資源科学コースの藤田助教が中心となりアドバイスをを行い、高校生が幾つもの試作品を作りました。成分分析では食品開発で多くの実績をもつ吉野准教授や山本准教授が担当しました。これから販売へと展開予定であり、今後、農業経済学がご専門の村田准教授が参画予定です。



打ち合わせ風景



学生の自主性を重んじ、高校&大学教員はコーチングに徹した

原材料



地域の特産を掛け合わせた味づくりや食感作りに奔走（酒粕やチーズホー）

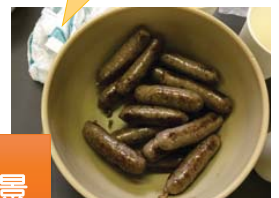


調理風景

調理に悪戦苦闘！でも楽しく工夫をモットーに。



毎回試食。その後、意見交換。美味しい、不味いなど自由闊達な意見交換の後、次の調理方法や調味料の配合量などの案を作成。



まとめ

過疎に悩む庄原市で、勉学に励む高校生や大学生にとって、ここ庄原はかなり興味の薄い地域に思えた。しかしながら、視点を変え、発想を豊かにすることで、同様の課題を抱える自治体の先進研究の場であることを学生自ら認識した。その取り組みの一端が、高校と大学の強みを持ち寄り連携する本プロジェクトであり、課題だった題材・材料に新たな付加価値を生み出すプロセスを経験中である。今後、教員としては、本プログラムをさらに発展させ、参加学生の成長度を数値化する等の取り組みや、教育プログラムの成果物が「地域の活性化」に貢献できるような“高大接続プログラム”を提案したい。

試食風景



6-5 高大接続に係る学内の取組（参考）

本学では、AP 事業以外にも様々な場面において、多様な形での高大連携の取組が実施され、また進行中である。以下、各事例とその概要を紹介する。

● 第 22 回教材生物バザールへの参画

- 平成 30 年 5 月 16 日（水）に広島県立教育センターで行われた「第 22 回教材生物バザール」へ、生命環境学部等の教員 2 名が参加し、参加した高等学校等の初等・中等教育機関の教員に対して、授業や実験等で利用可能な教材生物の提供を行った。

【提供教材】

ネナガノヒトヨタケ、タケ培養細胞、クラミドモナス等の教材及び活用方法の提供

● 本学の教育改革推進に係る県教育委員会からの人材派遣

- 前広島県教育長を参与として受入れ、教育改革について助言を得た。

● 県立高等学校改編に伴う協定の締結

- 保健福祉学部と吉田高等学校（平成 31 年 4 月～「探求科」設置）及び広島県立庄原格致高等学校（平成 31 年 4 月～普通科における医療・教職コースの設置）における高大連携に関する協定を締結した。

● 学部等再編に係る公立高等学校へのアンケート調査の実施

- 令和 2 年 4 月からの本学学部等再編に向けて、公立高等学校に対して下記 2 件のアンケート調査を実施した。なお、アンケートには再編後のカリキュラム等に係るパンフレットを同封した。

①「学部・学科再編等の教育改革による学士課程における主体的・能動的な深い学びの実現に向けたアンケート調査」

②設置認可（届出）書類の一部となる「学生確保の見込み」に関するアンケート

- 模擬講義（高等学校へ大学教員を派遣し授業を実施）
- 高大連携公開講座（教育ネットワーク中国主催公開講座）
- 県大へ行こうー授業公開週間ー（高校生・高校教員による大学授業への参加）
- 教員免許状更新講習の実施
- 高校訪問（大学教職員による入試広報活動）

第7章

事業成果の発信（広報・発表）

第7章 事業成果の発信（広報・発表）

7-1 取組概要

本学 AP 事業の取組を広く学内外へ発信し、成果の周知及び波及を図るための広報活動及び学外での成果発表を実施した。平成 30 年度は情報発信の質的・量的な充実に努め、本学の取組の様子や学生の成長が、AP 選定校をはじめとして全国の高等教育機関や、県内高等学校の生徒や関係者等に一層伝わるよう広報展開を図った。

具体的には、毎年度作成しているニューズレターや報告書等の広報物作成に加え、文部科学省や AP テーマ I 選定校（※）等の学外機関との協働による広報に取り組んだ。また、高校生や高校教員等に対して取組を紹介する機会を新たに設け、入試広報としての側面から本学教育の魅力発信に努めた。年度末には、本学事業の成果報告を兼ねた「教育改革フォーラム」を開催し、講師や参加者とともに、教員・職員・学生が協働した教育改革の在り方について議論を深めた。

【※APテーマI選定校（全9校）】

- 徳島大学（幹事校）
- 県立広島大学
- 立正大学
- 京都光華女子大学
- 徳山大学
- 福岡工業大学
- 崇城大学
- 仙台高等専門学校
- 明石工業高等専門学校

7-2 広報物作成・配付

7-2-1 学内広報物

平成 30 年度は、次の①～④に掲げる広報物の作成・配付を行った。

- ①「AP 事業推進部会ニュース Vol.5」の作成・配付（pp.117～120）
 - 配布先：学内教職員，学内研修会講師，外部評価委員，他大学・高等学校，平成 30 年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会の参加者 など
- ②「平成 29 年度県立広島大学 AP 事業報告書」の作成・配付
 - 配布先：学内教職員，外部評価委員 など
- ③「大学案内」における AP 関連記事の内容拡充
- ④入試広報パンフレット「*imagine*」におけるアクティブ・ラーニング推進の取組紹介

7-2-2 APパンフレット

文部科学省及び日本学術振興会が取りまとめ作成した「AP パンフレット」において、本学の取組を紹介した（pp.121～122）。当該パンフレットは、全国の大学等へ配付されたほか、日本学術振興会のHPにおいて閲覧可能である。

■URL：<https://www.jsps.go.jp/j-ap/index.html>



生涯学び続ける自律的な アクティブ・ラーナーの育成をめざして

No single answer to that question.



学長補佐・AP事業推進部会長 馬本 勉

平成30年7月豪雨で被災された皆様、今なお苦しい日々をお過ごしの皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

災害のたびに思うことがあります。この非常時に私は何をすればよいのだろうか、と。職場や家庭で果たすべき責任や、地域社会で求められる貢献など、To Doリストにはいくつもの項目が並びます。その中には、「できること、できないこと」「急ぐこと、急がないこと」があり、行う方法も様々です。その上、災害時には「しないほうがよいこと」もたくさん生じます。状況が目まぐるしく変化する中、「私は何をすればよいのか?」という問いに対し、適切な答えが出せたかどうかわからないまま、いつも無力感に苛まれます。せめて、自らに「今、何ができる?」と問うことだけは続けたい。何が起っているか正確に知り、伝えたい、と思います。

同僚からのメールや SNSで、何人もの学生がボランティアとして汗を流していることを知りました。地域の課題を肌で感じ取り、解決のために行動する学生諸君の姿勢にハッとさせられます。無力感なんて言ってもらえない、できることからすぐに始めよう。そう思いました。

◇ ◇ ◇

非常時に限らず、私たちの身の回りは「正解のない問い」だらけです。それに対して「より良い解」を出せる人材を育てたい、というのが昨今の教育改革の柱にあるように思います。だから知識詰め込み型だけでなく、アクティブ・ラーニング(AL)を、ということなのでしょう。

ALは能動的な学びを促す手法の総称です。そして、この言葉に対して抱く思いは、教える側も学ぶ側も実に様々です。とかく活動に注目が集まるALですが、それ以外に大切なものもたくさんあります。私は広島キャンパスの執務室のホワイトボードに、新聞から次の言葉を書き写しています。

「ALの本質は教育手法の形式ではなく、自律的な学修者を育てるという教育理念にある」

(日本経済新聞, 2017年7月4日)

県立広島大学では、生涯にわたって学び続ける自律的な学修者、すなわちアクティブ・ラーナー(ALer)を育てることを目標に掲げています。ALerに育った学生諸君を社会へ送り出す、それを可能にする方法の、あくまでもその一つに、いわゆる「アクティブ・ラーニング」による授業が含まれます。それはどんなものか、どうすればよいのか。

多くの疑問に答えるために、私たちの大学では「行動型」(フィールドワーク、キャンパス間交流など)と「参加型」(グループワーク、プレゼンテーションなど)に分類した手法の例を明示し、その推進を後押ししてきました。全てのキャンパスで様々な結びつきを実現する「県立広島大学型アクティブ・ラーニング」(Campus Linkage Active Learning:CLAL)。ゴールはあくまでもALerの育成です。

では、授業手法以外に、どうすればALerを育てることができるのか? 考えられる答えのいくつかを紹介します。

○教員・職員・学生が共に大学教育を創る

「教職学協働」

○ALの導入と普及を牽引する教員

「ファカルティ・デイベロッパー(FDer)」

○学生相互の学びを支援する学生

「学修支援アドバイザー(SA)」

○高等学校での学びを入学後につなげる

「高大接続」

○学修成果をより分かりやすく伝える

「学びの可視化」

これらの理念や仕組みを具体化した多くのことが、今、県立広島大学の全てのキャンパスで動いています。すべてはALerを育て、地域社会に貢献するという本学の使命を果たすためです。

答えは一つではありません。様々なアイデアが集まるからこそその大学です。そして universityという言葉の成り立ちは、多様な力が融合し、強みを増すことを示唆するものだ、改めて思いました。

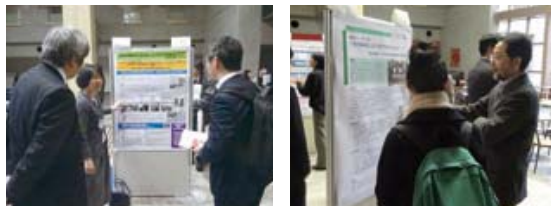
(7月18日, 生命環境学部・全学共通教育(英語))

■ 平成29年度教育改革フォーラムを開催しました

県立広島大学では、毎年度末に AP事業を振り返る「教育改革フォーラム」を開催しています。29年度は、「アクティブ・ラーナー育成の課題と展望 ～高大接続時代を迎えて～」をテーマとして、平成30年3月8日(木)に開催しました。高等教育政策の全体像を知る講演、本学 FDerによる取組の報告、パネルディスカッションと続き、白熱した議論が展開されました。また、外部評価委員による講評からは、これまでの教育成果を研究としてまとめる文化を創ろうという提言もありました。今後も、大学をあげてさらなる前進を続けます。

① アクティブ・ラーニング実践報告 (13時20分～13時50分)

フォーラムの開会に先立ち、教育研究棟2の1階 コミュニティプラザにて、本学教員によるアクティブ・ラーニング実践事例や授業改善の取組を紹介する「アクティブ・ラーニング実践報告」を実施しました。報告はポスターセッション形式で行われ、発表者・閲覧者が活発に意見交換するなど、終始盛り上がりを見せました。



② 教育改革フォーラム (14時00分～17時30分)

続いて、大講義室に会場を移し、平成29年度県立広島大学教育改革フォーラムが行われました。

はじめに、中村 義勝氏(文部科学省高等教育局大学振興課法規係長)から、「高大接続改革とアクティブ・ラーニング～その背景と今後の方向性について～」と題して基調講演をいただきました。講演では、近年の高等教育改革の現状、高大接続改革におけるアクティブ・ラーニングの位置づけ、3つのポリシーに基づく大学運営の考え方など、詳細な資料に基づき様々な観点からお話を頂戴しました。



次に、本学教員による事業報告を行いました。まず、馬本 勉 AP事業推進部長から、「県立広島大学 AP事業の3年半を振り返って」と題して、事業採択から約3年半を経た本学 AP事業の進捗状況や課題について報告がありました。

続いて「平成29年度県立広島大学ファカルティ・ディベロッパー成果報告」では、本学のファカルティ・ディベロッパー(FDer)が登壇し、発表を行いました。本学では、FDerによる自律的・機動的な改革推進をより促進するため、29年度から FDer連絡調整ワーキンググループ内に4つのグループを設けています。この4グループが主体となり推進している、アクティブ・ラーニングの導入と実践、授業ピアレビューの実施、アクティブ・ラーナー自己評価ルーブリックの作成と試行、学修支援アドバイザーによる授業支援等の各取組について、登壇した各グループの代表者4名から、取組の概要説明と成果報告がありました。いずれの報告からも、取組の着実な進展が伺えました。



続く全体討議では、講演講師の中村氏及び成果報告者4名を登壇者に迎え、フロアを交えたディスカッションを行いました。テーマである「アクティブ・ラーナー育成の課題と展望」について、登壇者による討議のほか、フロアから多くの質問が寄せられるなど、活発な議論が展開されました。最後に、総括として、本学 AP評価委員の佐藤 万知氏(広島大学高等教育研究開発センター准教授)から講評をいただき、討議を締めくくりました。



今回のフォーラムは、アクティブ・ラーニングの推進を核とする本学 AP事業の取組を振り返りながら、生涯学び続けるアクティブ・ラーナーの育成を実現するために今後なすべきことを、参加者全員が考え、共有する非常に有意義な機会となりました。

■ 高大接続改革に向けた高大連携を推進しています

本学では、平成28年度から高大接続改革を見据えた県内高等学校等との連携に着手し、広島県教育委員会との意見交換や、県内高校との合同発表会実施により交流を深めてきました。平成29年度は、教育内容での高大接続を一層促進するため、新規取組として広島県内の高等学校への授業見学を実施したほか、28年度に続き「広島県高等学校教育研究・実践合同発表会」へ参画するなど、さらなる連携強化を図りました。

① 県内高等学校への授業見学

高等学校におけるアクティブ・ラーニングの実施状況を把握し、授業改善の参考とすることを目的として、教職員による県内高等学校への授業見学を実施しました。平成29年度は、県立高校2校及び広島市立高校2校の4校(計5回)の授業見学を実施し、高校における主体的な学びに触れることができました。

平成29年10月17日(火)には、教職員11名が広島県立広島高等学校を訪問し、授業見学を実施しました。広島県における「学びの変革」の先進校である同校では、アクティブ・ラーニングを取り込んだ授業が多数実践されており、参加した教職員は、いきいきと議論する生徒の様子に驚きつつ、授業を見学しました。また、見学後には意見交換会が行われ、同校の先生方に対して、本学参加者から多くの意見や質問が上がるなど、活発な議論が行われました。

実施日	訪問先	教科等	参加人数
1 10月17日	広島県立広島中学・高等学校	数学、英語	11名(職員含む)
2 10月23日	広島県立三次高等学校	総合的な学習の時間	3名
3 10月24日	広島市立舟入高等学校	保健体育	1名
4 10月24日	広島市立安佐北高等学校・広島中等教育学校	理科(生物、物理)	2名
5 11月9日	広島県立広島中学・高等学校	公開授業研究会	8名



授業見学の様子



意見交換会の様子

② 平成29年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会

平成30年1月24日(水)、広島県教育委員会との共催により、サテライトキャンパスひろしま等を会場として「平成29年度広島県高等学校教育・研究実践合同発表会」を開催しました。当行事は、国や県教育委員会から事業指定を受けている県内高等学校が、各校の教育研究・実践についての発表及び意見交換を通じて、教育の充実を図ることを趣旨として毎年開催されています。28年度に続き2年連続の参画となった本学は、全体会及び分科会において、アクティブ・ラーニングの実践事例や学科等における組織的な教育改善の取組を報告しました。

本学の発表に対して、高校関係者からは多くの有益な質問や意見をいただきました。また、高校の発表内容からは、本学のALや高大接続の推進につながる示唆を得ることができました。29年度も、参加した高校と大学の教員が、双方の教育について相互理解を深める非常に良い機会となりました。

①全体会 報告者：西本 寮子 副学長、馬本 勉 学長補佐
タイトル：「高大接続改革に向けての県立広島大学の取組」

②分科会 形式：ポスターセッション
報告件数：計13件(発表部局及びタイトルは下表のとおり。)

学科・センター	タイトル
1 国際文化学科	英語科目における反転授業
2 健康科学科	学生の主体的な学修としての Calbee Future Labo「新商品開発プロジェクト」をより深化させる組織的な取組
3 経営学科	ゼミの充実とその対外的広報に重点を置いた学科FDの取組み
4 経営情報学科	大学における学習に向けた初年次導入教育の取り組み
5 生命科学科	導入教育としての大学基礎セミナーの取り組み
6 環境科学科	地域課題解決に向けて高校及び大学の強みが高次に融合した新たな人材育成モデル
7 看護学科	保健福祉学部看護学科における学修支援アドバイザーの取り組み
8 理学療法学科	理学療法学科における高大接続のとりくみ
9 作業療法学科	大学での「ホームルーム」の必要性
10 コミュニケーション障害学科	学生が安心して臨床実習に臨むための実習前学修プログラムの効果と課題
11 人間福祉学科	地域の課題解決に取り組む学生の学びと地域貢献について
12 総合教育センター 全学共通教育部門	学修環境が生み出すインタラクション：全学共通・英語教育の実践から
13 宮島学センター	『宮島学』を基盤とした教育の実践－宮島を学ぶ・宮島で学ぶ－



全体会の様子



分科会の様子

TOPIC

「支え合い、学び合う」教育改善の実現へ向けて

— 県立広島大学では、教員・職員・学生が一体となり取り組む授業改善システムの構築を目指しています

本学が目指す FDer養成の目標の一つに「支え合い、学び合う」授業改善システムの構築があります。これは、授業改善が個々の取組に留まることなく、教員が相互に授業改善について意見し、協力し合うことで、県立広島大学が一丸となつての組織的な教育改善の実現を目指すものです。

平成29年度は、FDerの相互授業参観により授業改善を図る「授業ピアレビュー」を実施したほか、FDerによるAI等取組の実践報告会や、授業ピアレビューへの学生参加も試行しました。

①授業の見方に関する研修（第2回FDer養成講座）

ピアレビュー実施の事前研修として、平成29年の6月から7月にかけて、「授業の見方」をテーマとする FDer 対象研修を各キャンパスで開講しました。講師を務めた 門戸 千幸 総合教育センター教授から、広島県の中等教育で広く実践されてきた、授業ピアレビューに関する考え方やノウハウが伝えられ、また受講した FDer は、学生を観察することの重要性を理解しました。



②FDerによる授業ピアレビュー

平成29年度の前期(7月)と後期(12月~1月)の二期にわたって、FDerによる授業ピアレビューを実施しました。参観した FDer は、授業の見方に関する研修の内容を踏まえて受講生の様子を観察し、その様子を「授業参観シート」へ記録して授業者へ提供しました。また、授業者である FDer は、授業参観シートの内容を踏まえた授業改善に努めました。平成29年度は、試行段階ながら、3キャンパス合わせて延べ75名が授業を公開し(89科目)、また延べ92名が授業を参観しました。

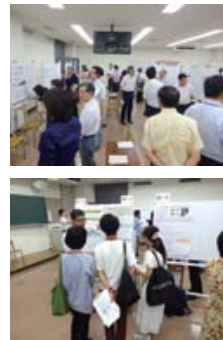
③学生間ピアレビュー

平成29年度後期ピアレビュー期間において、「学生」が授業を受講する他の「学生」の様子を観察し、学生目線から授業改善への提言を行う「学生間ピアレビュー」を試行しました。参観者は、事前に研修を受けた学修支援アドバイザー(SA)が努めました。参観した SA は、熱心に学生の様子を観察し、授業後も積極的に、授業改善に係る教員への提言を行いました。29年度は、延べ12名が7件の授業参観を実施しました。



④FDer実践報告会（第3回FDer養成講座）

平成30年9月14日(木)、広島キャンパス講義室を会場とし、FDerがアクティブ・ラーニングや教育改善の取組を発表する、ポスターセッション形式の実践報告会を開催しました(第3回 FDer 養成講座)。発表した FDer は、発表内容について他の FDer や教職員、また SA と意見交換することで、授業改善への示唆を得ることができました。



お知らせ 本学のアクティブ・ラーニング実践動画が公開されています

本学は、APテーマ I (アクティブ・ラーニング) 選定校9校(幹事校:徳島大学)による連携事業の一環で、アクティブ・ラーニング実践授業の動画撮影及び公開に取り組んでいます。既に公開済みの動画を、下記サイトから閲覧することができますので、ぜひご覧ください。

- ◆ 公開内容 生命環境学部環境科学科「大学基礎セミナー」(1学年対象)
- ◆ URL <https://www.youtube.com/watch?v=WASOAZ8uIDg>

■ 県立広島大学 AP 関連ホームページ

AP事業ページ (QRコードからアクセスできます。)
<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/ap/>

ラーニングコモンズ紹介ページ
<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/lcs/>



編集後記

事業開始から5年目を迎えた AP 事業ですが、平成29年度は、これまでにないほど大きく改革が進化した一年となりました。特にピアレビューや SA は試行錯誤の連続でしたが、着実に成果を積み重ねることができました。事業終了が迫る中で、今後はこれらの成果を学内へ根付かせていくことが一層求められます。私は、その鍵は「協働」にあると考えています。「教員・職員・学生が協働して大学を創る」。大言壮語かもしれませんが、これを私自身のテーマとし、事業推進に尽力してまいります。(AP 事業推進部会ニュース編集担当 伊藤 俊)

■ 本学 AP 事業に関するお問い合わせ先

県立広島大学 AP事業推進部会(経営企画室内)

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号
 E-mail: kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp
 Tel: 082-251-9727 (直通). Fax: 082-251-9405





県立広島大学

アクティブ・ラーナーの育成に向けた組織的な教育力向上の取組

【取組の概要】

県立広島大学のAP事業は、「生涯学び続ける自律的な学修者(アクティブ・ラーナー:ALer)」の育成を目的とした授業方法の見直し・改善を進め、行動型学修(教室外での能動的な学び)と参加型学修(教室内での能動的な学び)を軸とする「県立広島大学型アクティブ・ラーニング(Campus Linkage Active Learning:CLAL)」の推進に重点的に取り組む。あわせて、ファカルティ・ディベロッパーの養成と組織化、学修支援アドバイザーによる学修支援、学修成果の可視化方策の検討といった、CLALの推進とその効果測定を支える学内の組織・制度面の一体的な整備に取り組む、「体系的な教育プログラム—授業改善—自己評価システム」を一連のものとして捉える教育改革を推し進める。さらに、高大接続改革を見据えた、広島県教育委員会や県内高等学校との連携を強化し、公立大学としての教育改革及び高大接続のモデル化を目指す。

【取組のポイント】

- ▶ アクティブ・ラーニング導入・実践に係る経費支援
- ▶ ファカルティ・ディベロッパー(FDer)の養成と、FDerを中心とした組織的教育改善
- ▶ 学修支援アドバイザー(SA)の養成と、教職員との協働
- ▶ 学修成果の可視化方策の検討
- ▶ 県内高等学校と連携した高大接続改革の推進



【キーワード】

「ファカルティ・ディベロッパー(FDer)」、「組織的教育改善」、「行動型学修」、「教・職・学の協働」、「授業ピアレビュー」、「高大連携」

【人材育成目標】

県立広島大学は「地域に根ざした、県民から信頼される大学」を基本理念に掲げ、教育・研究・社会貢献に取り組んでいる。2014年度には、主体的に考え行動し、社会で活躍できる学生を育成するための指針となる「全学人材育成目標」(下記枠内)を定めた。

県立広島大学は、主体的に考え、課題解決に向けて行動できる実践力と豊かなコミュニケーション能力を備え、幅広い教養と高度な専門性に基いて、高い志とたゆまぬ向上心をもって地域や国際社会で活躍できる人材を育成します。

【教育上の課題】

2005年の3つの県立大学の統合による開学以来、県立広島大学は次の教育上の課題を抱えていた。

- 授業に対する学生の満足度が90%を超えている一方、授業外学修時間は伸びず、学生の主体的学びを引き出せていない。
- 広島県内にそれぞれ100km離れた3つのキャンパスを抱えており、キャンパスを越えた学生の交流が十分ではない。

【これまでの取組、実績・成果】

＜取組＞

学生をアクティブ・ラーナー(ALer)として育成するため、本事業では、「行動型」及び「参加型」の学修を軸とする県立広島大学型アクティブ・ラーニング(CLAL)の推進に取り組む。具体的には、CLAL推進を支える次の5つの取組を一体的に推進し、着実に改革を進める。

- ① アクティブ・ラーニング(AL)実施のための経費支援や学修環境の整備を行い、ALの導入など授業改善の試行を促進する。
- ② AL実践や教育改善を牽引する「ファカルティ・ディベロッパー(FDer)」を養成し、組織的な教育改善を進める。
- ③ 「学生による学修支援」を役割とする「学修支援アドバイザー(SA)」を学生の中から養成する。SAはFDerと協働して学修支援に取り組む、活動を通じて自らもALerとして成長していく。
- ④ ALerとしての学生の成長を把握するため、ルーブリックの開発など学修成果の可視化方策を検討する。
- ⑤ ALを核とした高大接続の在り方の模索するため、県内高等学校との連携を強化し、高大接続改革の推進を図る。

■事例1 「行動型学修実践支援制度」

県内各地をフィールドとした学外学修や、キャンパスを超えた学生交流を推進するため、授業内においてキャンパス外へ移動する学生の移動支援を実施。FDerの担当授業を中心に、従来にはない体験的な学びが開発され、2017年度末までに47件の挑戦的な取組が実施されるなど、授業改善が加速した。



フィールドワークの様子

■事例2 「『教員・職員・学生』の協働による授業ピアレビュー」

FDer養成研修の一環として、2017年度からFDerによる授業ピアレビュー(授業公開・参観)を開始し、授業改善の促進を図った。初期はFDer教員どうしの参観が主であったが、非FDer教員やSA、事務職員にも参観が広まるなど、第三者の意見を取り入れた授業改善を行う制度・文化面の下地を構築できた。授業を公開したFDerからも前向きな意見が聞かれるなど、良い影響をもたらしている。

平成29年度前期	広島	庄原	三原	平成30年度前期 (数値は暫定値)	広島	庄原	三原
公開科目数	13	11	11	公開科目数	21	19	16
公開コマ数	19	27	14	公開コマ数	26	48	27
公開者数	12	8	11	公開者数	18	11	12
FDer	10	8	11	FDer	17	10	12
FDer以外	2	0	0	FDer以外	1	1	0
参観者数(名<)	11	19	16	参観者数(名<)	51	33	4
FDer	9	19	16	FDer	20	16	2
FDer以外	2	0	0	FDer以外	6	1	2
				学生(SA)	6	8	0
				職員	19	8	0



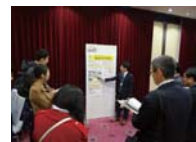
SA学生(写真手前、青い服)による授業ピアレビューの様子

■事例3 「高大接続改革の推進」

広島県立の大学として、県内の高等学校との「人材育成」の接続を強化するため、広島県教育委員会及び県内高校の協力を得て、高校と大学が相互に教育の理解を図るための取組を開始した。

2016年度からは、県内高等学校の教育研究・実践合同発表会へ参画し、大学の教育実践事例を発表。高校関係者と情報共有を図ることができた。

2017年度からは、県内高校への授業参観を実施。高校の授業実践現場を知ることで、高大接続の在り方について議論を深めた。



合同発表会における報告の様子



高校への授業参観の様子

＜実績・成果＞

- ・ 行動型学修の推進により、キャンパスを越えた学生の交流が活性化し、コミュニケーション能力などの汎用的能力が向上した。
- ・ 授業ピアレビューを通じて、教員の授業改善への意識が向上した。また、職員及びSAの参画により、大学が一丸となって教育改善に取り組む雰囲気が醸成された。
- ・ 高等学校との連携が加速し、高校でのAL実践の理解が深まるなど、ALer育成へ向けた相互理解が進んだ。

【今後の取組の計画】

AP事業において実現した各取組を、事業終了後も継続していくための制度的整備や、教職員の一層の意識醸成に取り組む。

- ・ これまでの行動型学修の成果を整理・分析し、効果があった取組については、必要に応じて補助金終了後の継続的な実践支援を検討する。また、そのための制度整備にも着手する。
- ・ FDerを中心とした組織的な教育改革は、これまで着実に成果を上げてきた。今後は、AP事業後の継続的な改革実施を見据えつつ FDer養成の在り方を検討し、研修体系の整備に着手する。また、大学教員としての資質向上を目的としたティーチング・ポートフォリオの普及・拡大にも努める。
- ・ ALer育成のための人材育成という観点から、「教・職・学」の協働を加速する。具体的には、授業ピアレビューの活性化や、教員・職員・学生が教育について意見交換する場を設けていく。
- ・ これまで実現してきた高大連携の取組を継続し、高大接続の改革につなげる。

- ・ 学生のALerとしての成長の可視化を目的として開発を進める「ALer自己評価ルーブリック」について、全学的な導入を進めるとともに、改良のための検討も重ねる。

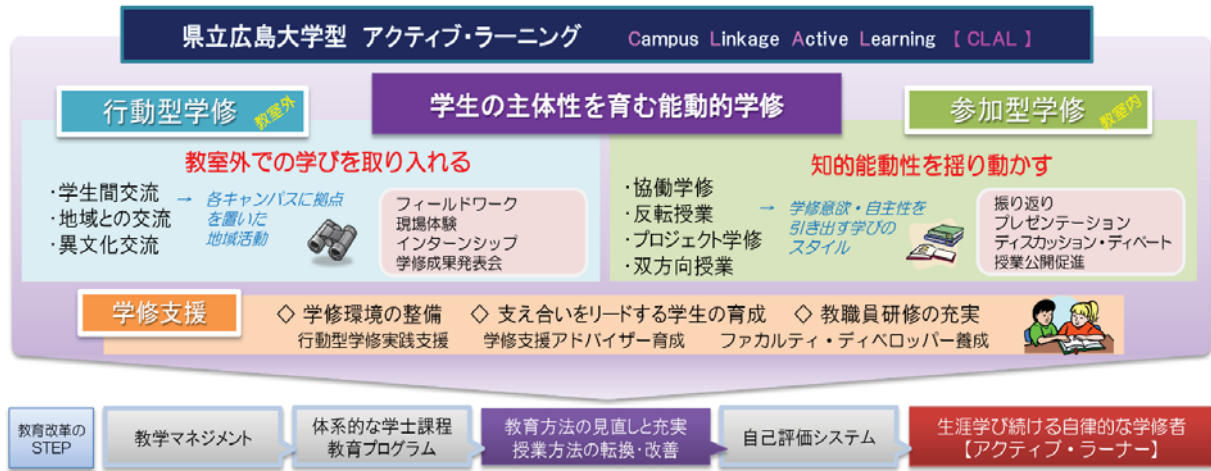
【本取組における成果と社会へのインパクト】

- 行動型学修の推進により、異分野の学生が協働して地域課題解決に取り組む学びの環境を整えた。これは、地域の教育力を活用した人材育成のモデルとして波及が期待できる。
- 組織的なFDer養成と、FDerを中心とした改革推進は、教育改善に対する学内構成員の意識を高め、FDerが他の教職員や学生(SA)と協働して教育改善を進める組織的基盤を構築した。これは、FDer推進の新たなモデルとして波及が期待できる。
- 高大接続改革の推進により、県立高等学校との教育実践に重点を置いた連携を一層深めることができた。これは、公立大学による新たな高大接続モデルとして波及が期待できる。

【本取組の質を保証する仕組み】

AP事業推進部会の主導のもと、FDerが4つの役割毎にワーキンググループを組織し、改革を推進している。各グループの事業進捗は工程表により管理され、目標や進捗状況を部会や他グループと密に共有しながら連携を図るなど、一体的な事業推進に努めている。また、毎年度に一度、外部の有識者を招聘して事業進捗について評価・助言をもらう「AP評価委員会」を開催している。評価委員会で得られた評価は、AP事業推進部会などの学内会議で報告・共有するほか、次年度計画に反映させ、事業改善につなげる。

取組概要 地域活動を組み込み、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を揺り動かす深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「能動的学修」を学士課程教育に計画的に導入して教育改革を進める全学的な取組である。これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたり学び続ける自律的な学修者アクティブ・ラーナーの育成を目指す。



具体的実施計画における指標	2014年度 (起点)	2017年度 (実績)	2019年度 (目標)	具体的実施計画における指標	2014年度 (起点)	2017年度 (実績)	2019年度 (目標)
ALを導入した授業科目数の割合	66.9%	67.2%	70.0%	人間文化学部 学部内授業公開科目数	6科目	49科目	45科目
AL科目のうち、必修科目数の割合	45.4%	51.2%	70.0%	経営情報学部 フィールドスタディー実践科目群に包摂する科目の受講者数	106人	497名	100人
ALを受講する学生の割合	84.7%	89.8%	100.0%	生命環境学部 フィールド科学科目の受講者数	152人	253人	250人
学生1人当たりAL科目受講数	—	7.5科目	8.0科目	保健福祉学部 学修ポートフォリオ導入率	20%	27.6%	50%
ALを行う専任教員数	38.4%	63.9%	60.0%	授業公開実施科目数	23科目	220科目	40科目
学生1人当たりのAL科目に関する授業外学修時間	—	週8時間	週16時間				
全学共通教育 キャンパス間(もしくは地域)移動実践科目受講者数	98人	309人	300人				

7-3 APテーマI 選定校連携事業

7-3-1 成果報告書の作成

APテーマI 選定校幹事校の徳島大学が取りまとめ作成した「APテーマI（アクティブ・ラーニング）成果報告書」において、本学の取組を紹介した（pp.124～127）。本冊子は、徳島大学から全国の大学等へ配布されたほか、APテーマIポータルサイト「Active Learning Online（ALO）」において閲覧可能である。

■URL：<https://al-online.jp/theme1report.html>

7-3-2 「Find! アクティブラーナー」掲載用動画撮影

テーマI 選定校が共同で取り組む、アクティブ・ラーニング実践授業動画の公開・共有サイト「Find! アクティブラーナー」を利用したアクティブ・ラーニングの実践事例の広報について、昨年度に続き動画を1本撮影した。当該動画は、「Find! アクティブラーナー」のサイト及びYouTubeで閲覧可能である。

【撮影当日の概要】

- ア 日 時 平成30年10月2日（火）13:00～18:00
イ 場 所 三原キャンパス
ウ 対象授業 チーム医療福祉演習（保健福祉学部4年生）
エ 担当教員 作業療法学科教授 吉川 ひろみ（主担当）
オ 当日の動き ① 13:00～15:40 授業撮影
② 16:10～16:40 学生インタビュー撮影
③ 16:40～17:20 教員インタビュー撮影



■Find!アクティブラーナー：<https://find-activelearning.com/set/3518/con/3519>

■Youtube：<https://www.youtube.com/channel/UCzLBsYZryxvVSHSq5aPERPw/videos>

7-3-3 選定校協議会への参加

APテーマI 選定校の会議体である「選定校協議会」へ参加し、広報活動の推進方策等について他の選定校と意見を交わした。議題は次のとおり。

なお、第5回協議会は本学サテライトキャンパスを会場として開催された。

第5回協議会	第6回協議会
<p>■日 時:平成30年7月3日(金)13:00～16:00 ■場 所:サテライトキャンパスひろしま ■出席者:3名(教員2名,事務局2名) ■議 題: (1)平成30年度大学教育再生加速プログラムテーマI及びテーマI・II複合型共同開催シンポジウムについて (2)「APテーマIアクティブ・ラーニング」に関する授業動画撮影進捗状況について (3)アクティブ・ラーニング・オンライン(ALO)の利用状況について (4)大学教育再生加速プログラムテーマI成果報告書の作成(案)について (5)大学教育再生加速プログラムテーマI幹事校業務スケジュール(案)について (6)採択期間終了後のアクティブ・ラーニング・オンライン(ALO)の運用(案)について</p>	<p>■日 時:平成30年11月24日(金)10:00～11:00 ■場 所:キャンパスプラザ京都 ■出席者:3名(教員1名,事務局2名) ■議 題: (1)「Find!アクティブラーナー」授業動画撮影の進捗状況について (2)アクティブ・ラーニング・オンライン(ALO)の運営計画について (3)平成31年度スケジュールについて (4)大学教育再生加速プログラムテーマI成果報告書について</p>

生涯学び続ける自律的な学修者(AIer)の育成 に向けた『教・職・学』協働による教育力の向上

行動型・参加型を軸とする県大型アクティブ・ラーニング(CAL)により、学生の主体的な学びの姿勢を育てる。また、教員・職員・学生が協働し、全学を上げて教育改善に取り組む。

○取組の概要

CLALの導入・実践を支える5つの取組により、学生の主体性を育む教育を実現

【事業の目的】県立広島大学のA・P事業は、授業方法の見直し・改善により、行動型学修（教室外での能動的な学び）と参加型学修（教室内での能動的な学び）を軸とする県立広島大学型アクティブ・ラーニング（Campus Linkage Active Learning: CLAL）の導入を進め、学生の学修意欲を喚起することで、生涯学び続ける自律的な学修者（アクティブ・ラーナー: AIer）を育成することを目的とし

ている。

【取組の概要】AIer育成に向けた改革を推し進めるため、本学A・P事業では次の5点に重点的に取り組む。

- (1) アクティブ・ラーニングの導入・実践支援
 - (2) F・DePの養成と授業改善
 - (3) 学修支援アドバイザーの養成と学修支援
 - (4) 学修成果の可視化方策の検討
 - (5) 高大接続改革の推進
- アクティブ・ラーニング（AL）に関する研修の実施や学修環境の整備をはじめとして、教育改善を牽引する教員の育成、学生との協働による教育改善、AIerとしての学生の成長把握、ALを核とした高大接続の在り方の模索といった各取組を一体的・複合的に推進することで、着



図1 各キャンパスの位置とCLALの理念

実に成果を上げるとともに、事業終了後も持続的に教育改善に取り組む制度づくりに努めている。



県立広島大学

2005(平成17)年に3つの県立大学が統合し開学。県内に4つのキャンパスを有し、人間文化・経営情報・生命環境・保健福祉の4学部を擁する。主体的に考え、行動し、地域社会で活躍できる実践力ある人材の育成を目的としている。

(問い合わせ先)

県立広島大学本部経営企画室
〒734-8558 広島市南区宇品東1丁目1-71
TEL: 082-251-9727(直通)
FAX: 082-251-9405

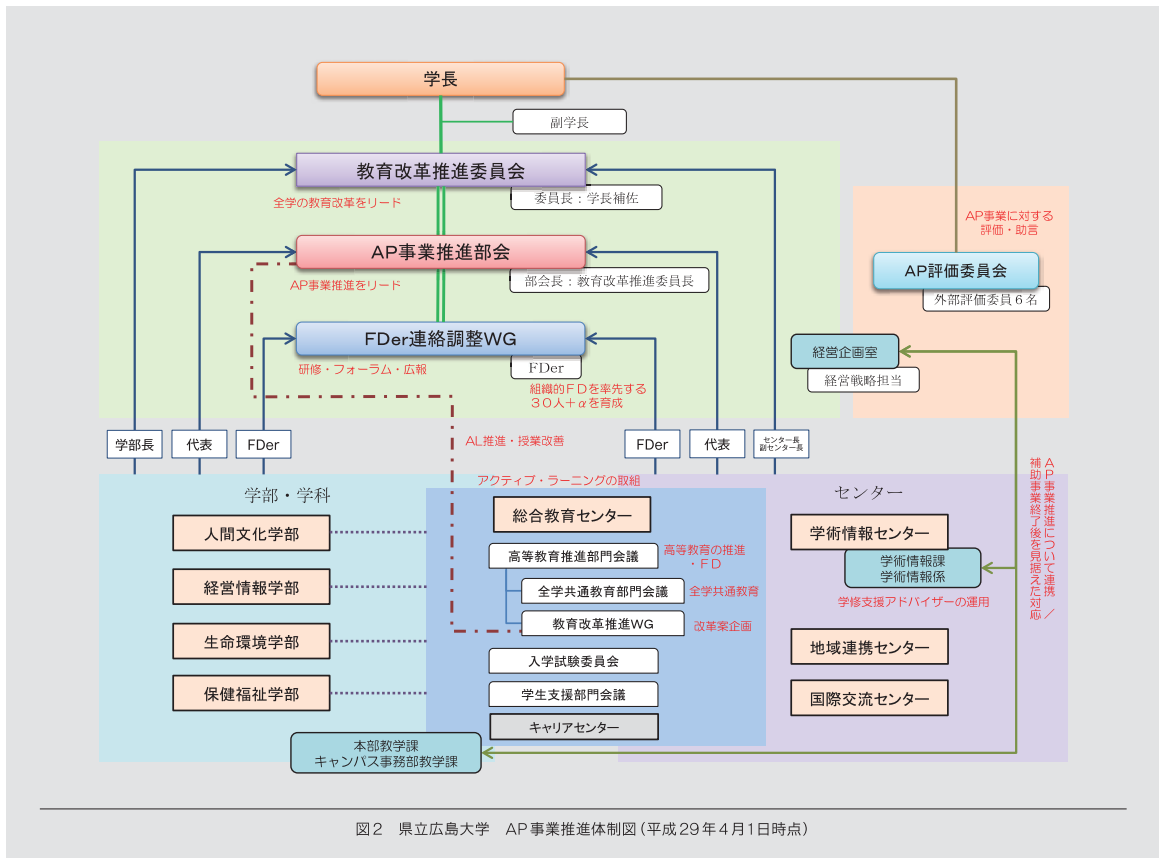
【事業推進体制】教育改革の実質化を目的として平成25年度に設けた学長補佐（教育改革・大学連携担当）を長とする「教育改革推進委員会」のもとに、事業推進主体である「AP事業推進部会」を設置した（図2）。また、FDerを中心とした組織的な教育改革を進めるため、AP部会直轄の「FDer連絡調整ワーキンググループ」を設けた。このWGの中でFDerは「①組織的教育改善」「②AL実践と普及」「③学修成果の把握」「④学修支援アドバイザーとの協働」のいずれかの役割別グループに所属し、キャンパス内はもちろん、他キャンパスのFDerと相互に連携しながら、機動的に教育改善に取り組んでいる。

○進捗・成果

各取組の着実な進展により、学生の学びやFDerの意識が変容

【各取組の進捗】

(1) ALの導入・実践支援・CALの土台を成す行動型・参加型の2つの学修の、積極的な導入・実践を促すための経済的・物的支援を実施した。まず、行動型学修については、従来の学びを加速・改善さ



せる、または教室外での学びを新たに取り入れる授業に対して、県内各地や他キャンパスへの学生の移動を支援する経費助成制度を平成26年度から開始した。この制度により、平成30年度までに計47件の挑戦的な取組が実施され、従来には

ない体験的な学びが開発されるなど、授業改善が加速した。また、延べ2,000人以上の学生がフィールドワーク等の地域活動や、他キャンパス所属学生との交流による対話的な学びを経験し、学修意欲の向上につなげた。

また、参加型学修については、アンケート等から抽出した教員の希望に基づき、ICT機器（タブレット端末及び専用アプリ）や小型の可動式ホワイトボードを各キャンパスに配備した。これにより、授業内での利用による双方向型授業の推進や、授業外学修の促進に寄与した。

(2) FDeR養成と授業改善…本事業では、自らの授業において率先してALを実践し、学内の授業改善を牽引するファカルティ・デベロップ（FDeR）の養成に取り組んでいる。平成30年8月時点で、全学で65名の教員がFDeRを務め、ALの実践や学内研修のファシリテーション、学内外でのAL実践事例発表を率先して行っている。また、FDeRとしての専門性の育成を目的とし、FDeR向けに毎年4～5回の研修（FDeR養成講座）を開講している。

(3) 学修支援アドバイザーの養成…学内の既存制度を発展・拡充させる形で、「学生による学修支援」を担う「学修支援アドバイザー（Study Advisor：SA）」を養成し、SAによる新たな学修支援を開始した。SAは本学学生（学部2年生以上、

大学院生）から選出・構成され、授業内外におけるアクティブ・ラーニング支援など、他学生の学びのサポートを主な役割とする。また、授業ピアレビューへ参加し、学生目線から教員へ授業改善に資する意見提供を行う。平成29年度は3キャンパスで129人がSAを務め、のべ552時間の活動を行った。

(4) 学修成果の可視化方策の検討…総合教育センター高等教育推進部門と連携し、ルーブリックを用いた定期的な評価・点検により学生の学修成果を可視化する制度的準備を開始した。また、「ALerとしての」学生の成長度合いを測定する「ALer自己評価ルーブリック」の開発に着手し、評価の試行に取り組んでいる。

(5) 高大接続改革の推進…広島県下の高等学校は、県教育委員会が進める広島版「学びの変革」により、教育の質的転換に力を入れている。高校の優れた教育を学び、高大の「教育」の接続を推し進めるため、本事業では平成28年度から、県教育委員会及び県内高校との連携を開始した。

平成28年度から参画している「広島県高等学校教育研究・実践合同発表会」では、高校と本学が相互にAL等の教育研究・実践事例を発表し合い、相互の教育への理解を深めた。さらに、平成29年度は県内高校への授業参観を実施。計5回の参観に教職員延べ25人が参加し、実際

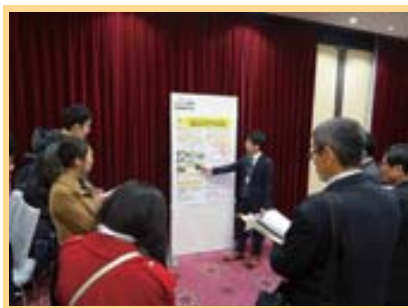


写真2 合同発表会ポスター発表（左）及び高校参観（右）の様子

の授業の中で高校におけるAL実践の現状を学んだ。

【取組の成果】以上の取組から、本学学生の学びと、それを支える教員の意識が大きく変化してきている。表1の必須指標については、年度や指標でばらつきがあ

るものの、事業初年度よりも数値が向上している指標が多い。例えば「アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合」は、初年度は実施時間を問わないAL導入科目が66・9%であったのに対し、平成29年度はUAL科目（ALを1学期に300分以上実施している科目）が67・2%、さらに実施時間を問わないAL導入科目が92・1%となった。また「アクティブ・ラーニングを行う専任教員数」は、初年度から30%近く向上しており、AL実施に対する着実な意識向上が窺える。

さらに、事業を通じて教員・職員・学生の協働が進んでいることも特筆すべき成果である。平成29年度からAP事業において実施している授業ピアレビューでは、当初はFDeR教員のみを対象としていたが、徐々にその対象を拡大し、現在では、FDeR以外の教員、事務職員、そしてSAが参加するまでになっている（図3）。授業公開者は、参観者が記録した「授業参観シート」をもとに参観者と意見交換を行うが、授業改善に対して授業者から前向きな意見が聞かれるなど、良い影響をもたらしている。AP事業を通じて、全学が一体となって教育に取り組む機運が、着実に高まりつつある。

すべての構成員が

FDerマインドを持ち、

「教・職・学」連携を進める

本事業では、推進者としての FDer が多くの役割を担っている。申請段階から「自前の」FDer 養成を謳ってきた本学では、学部学科から推薦された FDer 候補者を中心に、「FDer とは何か」を学ぶところからスタートした。AP 経費による A/L 実践者を徐々に仲間に加えながら、FD の企画運営や SA の活動サポート、AP 制度設計に至るまで、徐々に守備範囲を広げてきた。現在では、FDer 自己評価ルーブリックの各指標（目標）と事業工程表に基づき行う、4 つの役割別グループによる組織的な FDer の活動を通じて、A/Lea として輝く学生を育てようというマインドが全学へ広がり始めている。ここから「教・職・学」連携の機運が芽生え、授業ピアレビューが活性化した。AP 事業後を見据えた研修体系構築の議論もスタートしている。

今後は、名実ともに「教育の県大」と呼ばれるよう、AP 事業の成果を柱に据えた大学教育改革を推し進めたい。そのために FDer の果たすべき役割はますます大きくなるだろう。幸い、FDer の多

くがティーチング・ポートフォリオによる省察を経て、学生の教育に力を注いでいる。この FDer マインドに加え、A/Lea

を育てる学風へ結実すると信じ、すべての構成員に広げていきたい。

表1 大学教育再生加速プログラム (AP) 事業 必須指標に対する達成度 (実績)

項目	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合 ^{注1}	66.9%	72.3%	74.8%	67.2%
アクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目数の割合	45.4%	35.1%	40.0%	51.2%
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合 ^{注2}	84.7%	94.4%	92.1%	89.8%
学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目受講数	—	8.4科目	6.5科目	7.5科目
アクティブ・ラーニングを行う専任教員の割合	38.4%	54.8%	57.5%	63.9%
学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間(1週間当たり)	—	9時間	11時間	8時間

注1：【調査方法】平成26年度…ALを導入している科目を、実施時間を問わずカウント。
平成27年度以降…CLALの基準(ALを1学期に300分以上実施)を満たす科目のみカウント。
注2：ALを導入している必修科目(卒業論文を含む)が配置されている学科の学年を、一律で受講しているとみなしカウント。

(1) 平成29年度前期 ・試行として、FDerを中心に実施				(2) 平成29年度後期 ・非FDer教員の実施を促進 ・学生(SA)による参観を開始				(3) 平成30年度前期 ・昨年度から参観シートを改良 ・事務職員による参観を開始			
	広島	広島	三原		広島	広島	三原		広島	広島	三原
公開科目数	13	11	11	15	14	25		21	19	16	
公開コマ数	19	27	14	46	47	65		26	48	27	
公開者数	12	8	11	13	8	23		18	11	12	
FDer	10	8	11	13	8	11		17	10	12	
FDer以外	2	0	0	0	0	12		1	1	0	
参観者数(来-)	11	19	16	9	23	14		51	33	4	
FDer	9	19	16	9	23	12		20	16	2	
FDer以外	2	0	0	0	0	2		6	1	2	
学生(SA)				2	5	1		6	8	0	
								19	8	0	

図3 平成29年度～平成30年度前期における授業ピアレビューの実施成果



学長補佐/AP事業推進部会長
生命環境学部
教授
馬本 勉 うまもと・つとむ

英語教育学専門。ICTとアクティブ・ラーニングを融合させた英語授業や、新聞社とタイアップした地域情報発信論で「行動型」や「参加型」のCLALを実践中。FDer 養成や高大接続等、AP事業を統括。



本部経営企画室
スタッフ
伊藤 俊 いとう・すぐる

平成27年度にAP専任職員として入職。AP事業に係る事務全般及び研修企画等を担当する。大学院時代の専門は高等教育論。大学教育のほか、高専出身のため、高専の制度や工学教育にも関心を持つ。

7-4 高等学校生徒・保護者・教員への事業PR

(1) 概要

高校生，高校教員及び保護者に対する事業成果発信を目的として，下記の機会を利用し，AP事業におけるアクティブ・ラーニング推進の取組等について説明や事例紹介を行った。

行事名	日程	実施内容	参加者数※
大学説明会	平成30年 6月17日(日)	①取組紹介ポスターの展示及び説明 ②アクティブ・ラーニング実践授業の動画紹介(※Find!アクティブラーナー掲載動画)	664名
オープンキャンパス (広島キャンパス)	平成30年 8月7日(火)	①取組紹介ポスターの展示及び説明 ②アクティブ・ラーニング実践授業の動画紹介(※Find!アクティブラーナー掲載動画) ③AP事業推進部会ニュース Vol.5 の配付	1,989名
計			2,653名

※イベント全体の参加者数

(2) 参加者からの意見

参加者アンケートからは、「主体的に学ぶことができるように大学側がサポートしてくれるところに魅力を感じた」「アクティブラーニングがあり，一人一人の学生をきいてくれるところが分かった」といった肯定的な意見が寄せられており，アクティブ・ラーニングに対する関心の高さが伺えた。

7-5 学外発表

下表の各機会を通じて，本学 AP 事業の取組及び成果について対外的に発表を行った。

	イベント等名	日時	場所	報告者	聴衆	備考
1	SPODフォーラム2018 ポスターセッション	平成30年 8月29日(水)	香川大学	三苫 好治	460名※	p.129
2	APテーマ I 及びテーマ I・II 複合型合同シンポジウム	平成30年 11月24日(土)	キャンパスプラザ 京都	馬本 勉	150名 程度	抄録集： pp.132～135 参加報告： pp.136～138
3	平成30年度広島県高等学校 教育研究・実践合同発表会	平成30年 1月25日(金)	サテライトキャン パスひろしま	西本 寮子 馬本 勉 ほか	167名	第6章参照
4	広島国際大学 FD研修会	平成31年 2月12日(月)	広島国際大学	馬本 勉	100名 程度	招待講演
5	宮城大学 高大連携シンポジウム	平成31年 2月18日(月)	SS30(住友生命 仙台中央ビル)	馬本 勉	60名 程度	招待講演

※フォーラム全体の参加者数



FDerによる授業公開と「教・職・学」ピアレビュー

県立広島大学 AP事業推進部

発表者：三苦 好治（生命環境学部 教授 / 庄原キャンパス FDer代表）



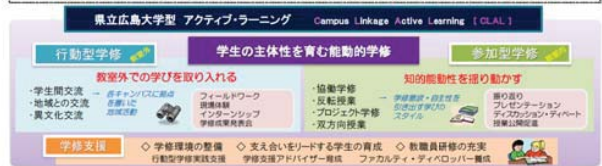
大学教育再生加速プログラム

1. 県立広島大学のAP事業

- ◆ 県立広島大学の教育的課題
 - 「授業の満足度は高いが、授業外学修時間が伸びない」(※学内調査より)
 - ⇒ 学生の主体的学び(の姿勢)を引き出せていない。
 - ◆ 平成26年度AP事業 テーマI (アクティブ・ラーニング) 採択
 - 行動型学修・参加型学修を軸とする「県大型アクティブ・ラーニング(CLAL)」を推進
 - ファカルティ・ディベロッパー(FDer)を養成 [対象:各学科・総合教育センター教員]
 - AL手法の積極的導入、組織的授業改善をリード。
 - 学修支援アドバイザー(SA)を養成 [対象:学部生2年生以上、大学院生]
 - 他学生の学びを支援する学生。学生同士の学び合いを促進。
- ⇒ 生涯学び続ける自律的な学修者(アクティブ・ラーナー:ALer)の育成へ

大学名: 県立広島大学
テーマ: テーマI (アクティブ・ラーニング)

取組内容 地域活動を組み込み、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的動機性を高め深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「参加型学修」を学生教育に積極的に導入して教育改善を推進する学制的取組である。これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたり学び続ける自律的な学修者(アクティブ・ラーナー)の育成を目指す。

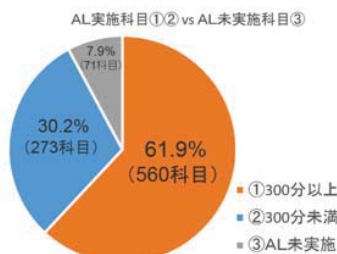


2. ALの「導入」から「改善」へ

- ◆ 平成29年度AL実施率
 - 調査回答科目中: **92.1%** (904科目中、833科目でALを導入・実施)
- ◆ ALの「導入」から「改善」へ
 - AL導入・実践 フェーズ移行 点検・改善、質的充実
 - 「支え合い、学び合う」持続的な教育改善の仕組み・文化づくり

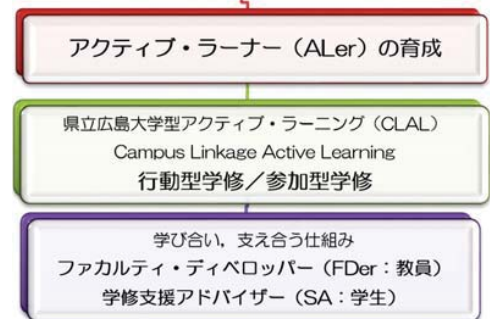
◎ 全学的な授業ピアレビューの実施

- 教員(主にFDer)の授業公開・参観
 - ⇒ 相互参観により、授業の質、改善への意識を高め合う
- 事務職員の授業参観
 - ⇒ 第三者(非教員・学生)の視点/自大学の教育を知る
- 学生(SA)の授業参観
 - ⇒ 学生目線から授業改善への意見提供/他者の学びから、自己の学びを見つめ直す



教員・職員・学生が協働する授業ピアレビューの実現へ！！

組織的な教育改革



	A. 実践力	B. 応用力	C. 基礎力
1. 組織的教育改善	カリキュラム・ポリシー(編成方針、教育・評価方法)をアクティブ・ラーニング(AL)の観点から点検し、カリキュラム上の課題の指摘と、改善のための提案ができる。	大学入学以前に培った「学力の3要素」をさらに発展・向上させ、学生を社会に送り出すために必要なことがらを説明できる。	「学力の3要素」とは何か説明できる。
2. AL実践と普及	ALの授業を公開するとともに、他者の授業を参観し、改善することができる。	ALの手法を用いて授業を行い、その振り返りにより授業改善をすることができる。	ALとは何か説明できる。
3. 学修成果の把握	アクティブ・ラーナーとしての到達度をほかるルーブリックを作成・活用し、学生の成長を可視化することができる。	ルーブリックの活用方法を理解し、作成することができる。	ルーブリックとは何か説明できる。
4. 学修支援アドバイザーとの協働	学修支援アドバイザーと協働し、アクティブ・ラーナーを育てる授業をすることができる。	学修支援アドバイザーの役割を理解し、その活動の具体例を示すことができる。	学生による学修支援の意義が説明できる。

	A. 実践力	B. 応用力	C. 基礎力
【知識・技能】	大学の学修方法を理解し、さらに学びを深めるために活用することができる。	授業外学修の方法を把握し、実践できる。	基本的な学修方法や、情報収集の方法を知っている。
1. 学修・方法	【自己評価】(4.0) 【平均評価】(3.0)	【自己評価】(4.0) 【平均評価】(3.0)	【自己評価】(2.0) 【平均評価】(1.0)
2. 知識・応用	獲得した知識や技能を、他人に教えたり、問題解決に役立てたりすることができる。	獲得した知識や技能を応用し、より深い学びを達成し、問題解決に役立てることができる。	大学における幅広い学びを通じて、基礎的な知識と技能を身につけている。
【態度・行動力・表現力】	【自己評価】(4.0) 【平均評価】(3.0)	【自己評価】(4.0) 【平均評価】(3.0)	【自己評価】(2.0) 【平均評価】(1.0)
3. 意見・説明	自ら組み立てた問題や意見を、それを相手に理解してもらえることができる。	自ら組み立てた問題や意見を、それを相手に理解してもらえることができる。	ものごとを説明し、ものごとを論理的に述べることができる。
【思考力・判断力・表現力】	【自己評価】(4.0) 【平均評価】(3.0)	【自己評価】(4.0) 【平均評価】(3.0)	【自己評価】(2.0) 【平均評価】(1.0)
4. 課題・解決	獲得した知識や技能を用いて、課題解決に向けて、主体的に取り組むことができる。	課題解決に向けて、主体的に取り組むことができる。	課題解決したときに、振り返りを行うことができる。
【主体性・協働性】	【自己評価】(4.0) 【平均評価】(3.0)	【自己評価】(4.0) 【平均評価】(3.0)	【自己評価】(2.0) 【平均評価】(1.0)
5. 自律・意欲	自ら学習し、目標達成に向けて取り組むことができる。	自ら学習する意欲を持ち、日々の学修に意欲を込めることができる。	自主的に学ぶことができる。
【主体性・協働性】	【自己評価】(4.0) 【平均評価】(3.0)	【自己評価】(4.0) 【平均評価】(3.0)	【自己評価】(2.0) 【平均評価】(1.0)
6. 共感・協働	他者の学びを尊重し、目標達成に向けて協働することができる。	他者の学びを尊重し、目標達成に向けて協働することができる。	大学生活において、同じ目標を共有する相手と協働することができる。

3. 「教・職・学」ピアレビューの実践

- ◆ ピアレビューの流れ
 - ① 教員(主にFDer)の中から公開希望を募る。
 - ② 教員(主にFDer)、事務職員、SAに対して参観希望を募る。(参観予定者は事前研修を受講)
 - ③ 参観者は、授業参観シート中の各観点に基づき、**授業を受講する学生の様子**を中心に観察。
 - ④ 参観結果を授業者へフィードバックし、授業改善について意見交換。
- ◆ 実施のポイントと実績

(1) 平成29年度前期
・試行として、FDerを中心に実施

	広島	庄原	三原
公開科目数	13	11	11
公開コマ数	19	27	14
公開者数	12	8	11
FDer	10	8	11
FDer以外	2	0	0
参観者数(延べ)	11	19	16
FDer	9	19	16
FDer以外	2	0	0

(2) 平成29年度後期
・非FDer教員の実施を促進
・学生(SA)による参観を開始

	広島	庄原	三原
公開科目数	15	14	25
公開コマ数	46	47	65
公開者数	13	8	23
FDer	13	8	11
FDer以外	0	0	12
参観者数(延べ)	9	23	14
FDer	9	23	12
FDer以外	0	0	2
学生(SA)	2	5	1

(3) 平成30年度前期 (数値は暫定値)
・昨年度から参観シートを改良
・事務職員による参観を開始

	広島	庄原	三原
公開科目数	21	19	16
公開コマ数	26	48	27
公開者数	18	11	12
FDer	17	10	12
FDer以外	1	1	0
参観者数(延べ)	51	33	4
FDer	20	16	2
FDer以外	6	1	2
学生(SA)	6	8	0
職員	19	8	0

学 部・学 科	授業実施日時	授業名	授業者氏名	参観者氏名
学 部・学 科	30年 月 日			
授業実施日時	第() 講			
授業 名				
参観者氏名				

観点	具体例	評価	気づき
知識	授業を受ける準備ができていた。	3-3-1	
反応	授業における疑問や疑問に対し、積極的に反応している。	3-3-1	
思考	授業中の疑問(ポイントやキーワード)に自分の考えを述べている。	3-3-1	
協働	疑問やキーワードへの疑問を解消して、授業を楽しんでいる。	3-3-1	
協働	質問や発言を通じて、他者の学びを尊重している。	3-3-1	
社会性	授業中の役割を尊重して参加している。	3-3-1	

授業参観シート(様式)

※三原キャンパスは、豪雨被害の影響により、規模を大幅に縮小してピアレビューを実施

4. 成果と課題

- 【成果】
 - 授業改善意識の向上
 - 教員・職員・学生の相互対話を通じて授業改善を図る。全学的な「支え合い・学び合い」の意識醸成

- 【課題】
 - 他者の授業を見る目、コメント力の向上 ⇒ 効果的な研修等の実施
 - 公開者の増加 ⇒ 非FDer教員の参加を促す制度の検討・運用
 - 参観者の増加 ⇒ 職員、学生が教育改善へ参画する文化の醸成

アクティブ・ラーニングと 学修成果の可視化

参加費
無料



H30.

11/24±

13:00~17:00
(受付12:30~)

キャンパスプラザ京都
4階 第2講義室
(京都市大学のまち交流センター)

■申込方法

参加を希望される方は、平成30年11月16日(金)までに右記URLまたはQRコードから申し込みフォームを開き、必要事項を入力の上申し込みください。空席があれば参加可能ですので、シンポジウム前日までにお問い合わせください。



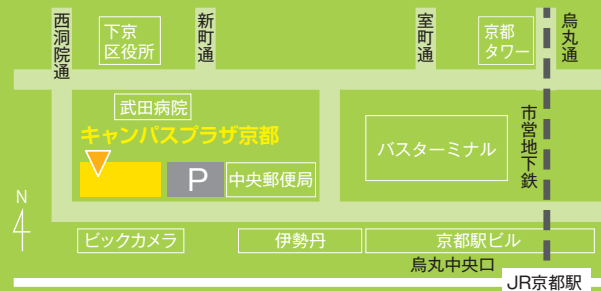
<http://bit.ly/2OhX8ME>

■お問い合わせ

徳島大学学務部教育支援課教育企画室
〒770-8501 徳島市新蔵町 2-24
TEL.088-656-7686
E-mail:kykikakuk@tokushima-u.ac.jp

■アクセス

京都市営地下鉄烏丸線、近鉄京都線、JR各線「京都駅」下車。徒歩5分。



キャンパスプラザ京都(京都市大学のまち交流センター)
〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る東塩小路町939

アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化

開催日時 平成30年11月24日(土)13:00～17:00(受付:12:30～)

開催場所 キャンパスプラザ京都(〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る東塩小路町939)

プログラム

テーマⅠ 及び テーマⅠ・Ⅱ 複合型共同開催シンポジウム

時間	内容	詳細
13:00-13:05	開会挨拶	代表校から挨拶(徳島大学 野地学長)
13:05-13:10	企画主旨	司会者より趣旨説明
13:10-13:40	幹事校取組紹介	徳島大学 ■登壇者:川野 卓二(教授) ■発表タイトル:テーマⅠ 幹事校の取組 京都光華女子大学短期大学部 ■登壇者:定松 淳(講師) ■発表タイトル:“チームAP”としての全選定校の交流の促進
13:40-14:30	選定校事例紹介①	テーマⅠ 選定校 県立広島大学 ■登壇者:馬本 勉(学長補佐) ■発表タイトル:アクティブ・ラーナーの育成を目指す 県立広島大学の取組 仙台高等専門学校 ■登壇者:川崎 浩司(准教授) ■発表タイトル:仙台高専におけるAP事業への取り組み
14:30-14:45	休憩	
14:45-15:35	選定校事例紹介②	テーマⅠ・Ⅱ 複合型選定校 山口大学 ■登壇者:林 透(准教授) ■発表タイトル:総合的な大学教育改革のためのエンジン ～山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)の使命～ 長崎大学 ■登壇者:若菜 啓孝(教授) ■発表タイトル:長崎大学における授業改善への取り組みと 学修成果の可視化について
15:35-15:50	休憩	
15:50-16:50	パネルディスカッション	フロアとの議論
16:50-17:00	閉会挨拶	代表校から挨拶(京都光華女子大学短期大学部 若井副学長)

主催 徳島大学・京都光華女子大学短期大学部

アクティブ・ラーナーの育成を目指す県立広島大学の取組

馬本 勉

県立広島大学生命環境学部

1. はじめに

県立広島大学では、行動型学修（フィールドワークやキャンパス間交流等を含む教室外での能動的な学び）と参加型学修（ディスカッションやプレゼンテーション等を含む教室内での能動的な学び）からなる県立広島大学型アクティブ・ラーニング（Campus Linkage Active Learning : CLAL）の導入によって授業方法の見直し・改善を進め、学生の学修意欲を喚起することで、生涯学び続ける自律的な学修者（アクティブ・ラーナー : ALer）を育成する試みを続けている。

ALer の育成を推し進めるため、次の5点に重点を置いて取り組んできた。

- [1] アクティブ・ラーニング（AL）の導入・実践支援（ALに関する研修の実施や学修環境の整備）
- [2] ファカルティ・ディベロッパー（FDer）養成と授業改善（教育改善を牽引する員の育成）
- [3] 学修支援アドバイザー（SA）養成と学修支援（学生との協働による教育改善）
- [4] 学修成果の可視化方策の検討（ALerとしての学生の成長を把握）
- [5] 高大接続改革の推進（ALを核とした授業改善、人材育成を通じた高大接続の模索）

これらを一体的・複合的に推進することで、着実に成果を上げるとともに、事業終了後も持続的に教育改善に取り組む制度づくりに努めている。

2. これまでの経緯：運営体制

教育改革の実質化を目的として25年度に設けた学長補佐（教育改革・大学連携担当）を長

とする「教育改革推進委員会」のもとに、事業推進主体である「AP 事業推進部会」（以下、AP 部会）を設置した（図2）。また、組織的な教育改革をFDe中心で進めるため、AP部会内に「FDer 連絡調整ワーキンググループ」（以下、WG）を設けた。このWGの中でFDerは以下のいずれかの役割を持つグループに属し、グループ内はもちろん、他グループや他キャンパスのFDerと相互に連携しながら、機動的に教育改善に取り組んでいる。

- ①組織的教育改善
- ②AL実践と普及
- ③学修成果の把握
- ④学修支援アドバイザーとの協働



図1 各キャンパスの位置とCLALの理念

3. ALの導入・実践支援

CLALの土台を成す行動型・参加型の2つの学修を積極的に導入し、実践を促すため、経済的・物的支援を実施した。

まず行動型学修では、選定直後より経費助成制度を開始し、フィールドワーク等で地域に向向く、あるいは他キャンパス所属学生との交流をともなう授業へ参加する学生に対して、バス借り上げ等の交通費を助成した。

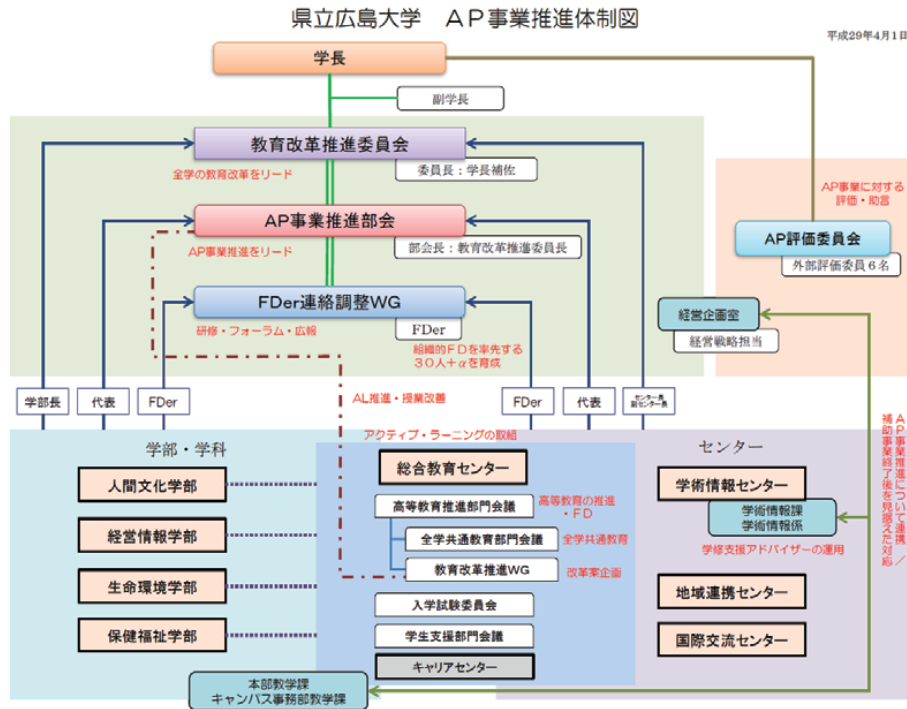


図2 県立広島大学 AP事業推進体制図 (平成29年度4月時点)

27年度以降、全学共通教育科目をはじめ47の授業で、延べ2,000人以上の学生が教室外の学びを経験し、学修意欲の向上につながった。特に、行動型学修を積極的に推進している全学共通教育科目では、県内産業・文化への理解の深化や、専門分野を超えた3キャンパス間学生交流の機会となった。

参加型学修については、アンケート等から抽出した教員の希望に基づき、ICT機器(タブレット端末及び専用アプリ)や小型の可動式ホワイトボードを各キャンパスに配備した。これにより、授業内での利用による双方向型授業の推進や、授業外学修の促進に寄与した。



図3 全学共通教育「地域情報発信論」におけるフィールドワークとポスターセッション

4. FDer 養成と授業改善

本学では、自らの授業において率先してALを実践し、学内の授業改善を牽引するファカルティ・ディベロッパー (FDer) の養成に取り組んでいる。H30年8月現在、全学で65名の教員がFDerを務め、ALの実践や学内研修のファシリテーション、学内外でのAL実践事例発表を行っている。本学では専門を問わず、一般教員の中から養成しているが、FDerとしての知識や技能を高めるため、毎年4~5回の研修(FDer養成講座)を開講している。

5. SA 養成と学修支援

学内の既存制度を発展・拡充させる形で「学生による学修支援」を担う「学修支援アドバイザー (Study Advisor : SA)」を養成し、SAによる新たな学修支援を開始した。SAは本学学生(学部2年生以上、大学院生)から自薦、他薦により選出され、授業内外におけるアクティブ・ラーニング支援など、他学生の学びのサポ

ートを主な役割とする。また、授業ピアレビューに参加し、学生の視点で学生の学びを評価し、教員に対して授業改善に資する意見提供を行っている。29年度は3キャンパスで129人がSAを務め、のべ552時間の活動を行った。

6. 学修成果の可視化方策の検討

AP事業期間中は、本学の授業アンケートやFDを従来から担ってきた総合教育センター高等教育推進部門との間で「棲み分けと協働」を保ちつつ活動している。AP部会で制度設計や企画を担当し、制度として持続的に運用する際には総合教育センターの枠組みを用いるなど、良い意味で「持ちつ持たれつ」を進めている。

学修成果の可視化については、高等教育推進部門で主に評価のための授業ルーブリック、AP部会ではALerの成長をはかる自己評価ルーブリックの開発を進めている。後者のルーブリックは、29年度に暫定版を示し、試行と検討を続けてきたが、30年度中に方針を固め、具体的な運用へと向かう予定である。

7. 高大接続改革の推進

広島県の高等学校では、県教育委員会が進める広島版「学びの変革」により、教育の質的転換に力を入れている。高校の優れた教育を学び、人材育成面での高大接続を推し進めるため、本学では28年度から、県教育委員会及び県内高等学校との連携を開始した。

28年度から参画している「広島県高等学校教育研究・実践合同発表会」では、高校と大学がAL実践事例や組織的改善を発表し合い、相互理解を深めている。この発表会を契機として、新たな高大連携の試みがいくつもスタートした。さらに、29年度は県内高等学校への授業参観を開始し、計5回の機会に教職員延べ25人が授業参観を行った。大学の教職員にとって、高校におけるAL実践を体感する貴重な機会となった。



図4 合同発表会ポスター発表(左)及び高校参観(右)の様子

8. 授業ピアレビューと教・職・学の協働

これまでに述べた5つの取組を通じて、学内における教員・職員・学生の協働が進んでいることは特筆すべきであろう。29年度からAP事業において実施している授業ピアレビューでは、当初はFDer教員のみを対象としていたが、徐々にその対象を拡大し、現在では、FDer以外の教員、事務職員、そしてSAが参加するまでになった(図5)。授業公開者は、参観者が記録した「授業参観シート」を元に参観者と意見交換し、改善に努めることとしているが、授業をめぐる様々な対話が生まれ、各所で身近なFDが繰り広げられるようになった。参観者のコメントをもとに改善を行った授業では、期末アンケートの結果が上向くなど、良い影響をもたらしている。AP事業を通じて、全学が一体となって教育に取り組む機運が、着実に高まりつつあると言えるだろう。

この点は、事業初年度よりも数値が向上している当初の指標によっても見て取ることができる。例えば「アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合」は、初年度は実施時間を問わないAL導入率が66.9%であったのに対し、29年度は92.1%に達している。そのうちの約3分の2はALを1学期に300分以上(15回授業のそれぞれで90分中20分間以上相当)を実施している科目である。

「アクティブ・ラーニングを行う専任教員数」は、初年度から30%近く向上しており、AL実施に対する着実な意識の向上が伺える。

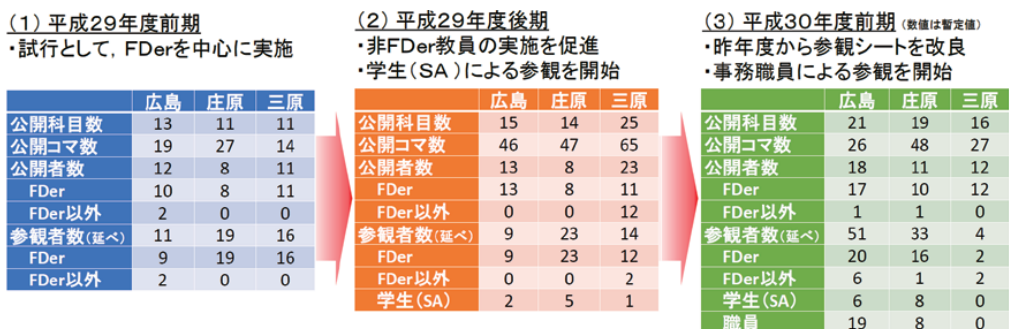


図5 29年度～30年度前期における授業ピアレビューの実施実績

9. 全ての構成員がFDerマインドを

本学のAP事業では、推進者としてのFDerが多くの役割を担っている。申請段階から「自前の」FDer養成を謳ってきた本学では、学部学科から推薦されたFDer候補者を中心に、「FDerとは何か」を学ぶところからスタートした。AP経費によるAL実践者を徐々に仲間に加えながら、FDの企画運営やSAの活動サポート、AP制度設計に至るまで、徐々に守備範囲を広げてきた。現在では、先に述べた4つの役割グループごとに、FDer自己評価ルーブリックに記した指標(目標)と、AP部会の際に進捗状況を確認する事業工程表に基づき、組織的なFDer活動を行っている。ここから、ALerとして輝く学生を育てようというFDerマインドが全学へ広がり始めている。特に29～30年度にかけ、「教・職・学」連携の機運が芽生え、授業ピアレビューが活性化してした。AP事業後を見据えた研修体系構築の議論もスタートしている。

今後は、名実ともに「教育の県大」と呼ばれるよう、AP事業の成果を柱に据えた大学教育改革を推し進めていきたい。そのためにFDerの果たすべき役割はますます大きくなるだろう。幸い、FDerの多くがティーチング・ポートフォリオ(TP)による省察を経て、前向きな姿勢で学生の教育に力を注いでいる。

TP作成ワークショップは28年度からFDer養成講座の一環として学内でやっているが、年々、メンターおよびメンティーとして参画する教員

が増えている。アカデミック・ポートフォリオ(AP)やスタッフ・ポートフォリオ(SP)を作成するため、学外のワークショップに参加するFDerや担当職員もあり、学内へのTP導入を後押ししている。

私たちがTPを重視する理由の一つは、TP関係者に見られるモチベーションの高さや、チームワークの強さが群を抜いているという点である。このことは、本学ならではの教育改革モデルの構築へ向け、大きな一歩となっていくものと思われる。

10. おわりに

授業ピアレビューやTP作成を通じ、FDerマインドをもった構成員(教員、職員、学生)が増加し、教育改革を加速させていく。AP事業に選定される前から重ねてきたFDの動きが、本当の意味で実を結びつつあるということであろう。

29年度末に実施した教育改革フォーラムにおいて、外部評価委員のおひとりから、「これからは、制度設計から、教育文化の醸成へと向かってほしい」というコメントを頂戴した。

これまで試行錯誤の末、様々な「教育改革ツール」を形作ってきたが、そこに魂を吹き込み、真の改革へと結びつけるのは、私たち一人ひとりである。

AP事業期間を通じて模索し続けた「ALer育成」。これが私たちにとって「当たり前」となる日を思い、事業終了まで走り続けたい。

報 告 書

用 務	第 6 回大学教育再生加速プログラム (AP) テーマ I 選定校協議会 平成 30 年度 AP テーマ I 及びテーマ I・II 複合型共同開催シンポジウム
日 時	平成 30 年 11 月 24 日 (土) 10:00～11:00 [協議会] 13:00～17:00 [シンポジウム]
場 所	キャンパスプラザ京都 2 階第 2 会議室 [協議会] 5 階第 2 講義室 [シンポジウム]
出席者	学長補佐 馬本 勉 本部経営企画室 川口 博之, 伊藤 俊 (報告者)
内 容	<p>平成 30 年 11 月 24 日 (土) に行われた, AP テーマ I 選定校協議会及び AP テーマ I 及びテーマ I・II 複合型共同開催シンポジウムに参加した。シンポジウムについては, AP 採択校を含め全国の大学等から参加があり, 参加人数は 120 名程度であった。詳細を以下に報告する。</p> <p>AP テーマ I 選定校協議会 10:00～11:00 出席者: 25 名 (会議資料参照) 概 要:</p> <p>(1) 「Find! アクティブラーナー」授業動画撮影の進捗状況について [資料 1]</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 幹事校 (徳島大学) から, H30 年度の撮影進捗状況について報告があった。 ● H31 年度の撮影希望の確認が行われ, 本学を含む 5 校が立候補し, 撮影候補となった。 (撮影候補: 県立広島大学, 立正大学, 徳山大学, 福岡工業大学, 明石高専) <p>(2) アクティブ・ラーニング・オンライン (ALO) の運営計画について [資料 2]</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 幹事校から, H30 年度の月別セッション数について報告があった。 ● 前回協議した事業終了後の ALO 運用について, 移行先サイト (Facebook アカウント) の運用開始の報告と, 組織や個人のアカウントを利用した情報拡散についての依頼があった。 <p>(3) 平成 31 年度スケジュールについて [資料 3]</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 幹事校から, H31 年度のイベント等のスケジュールについて説明があった。 ● H31 年度テーマ I シンポジウムの開催候補地について協議し, 関東開催で調整を進めることで合意した。 <p>(4) 大学教育再生加速プログラムテーマ I 成果報告書について</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 作成を進めていた同報告書について, 完成物が配付された。なお, テーマ I 各校には 100 部ずつ配付するが, さらに必要である場合は増刷を検討するとのことであった。 ● 報告書のデジタル版の扱いについて協議し, 年度内を目途に ALO にて PDF を公開することとなった。あわせて, 公開後は, 採択校各校の HP に誘導リンクを掲載することで合意した。 <p>平成 30 年度 AP テーマ I 及びテーマ I・II 複合型共同開催シンポジウム 13:00～17:00</p> <p>13:00～13:05 開会挨拶: 徳島大学 野地 澄晴 学長 13:05～13:10 企画主旨 13:10～13:40 幹事校取組紹介</p> <p>(1) 徳島大学: 「テーマ I 幹事校の取組」 登壇者: 徳島大学 川野 卓二 教授 概 要: テーマ I 幹事校の徳島大学から, テーマ I 選定校の連携事業について報告があった。 (ALO の運用, 選定校協議会の開催, H29AP テーマ I シンポジウムの開催 等)</p> <p>(2) 京都光華女子大学短期大学部: 「“チーム AP” としての全選定校の交流の促進」 登壇者: 京都光華女子大学短期大学部 定松 淳 講師 概 要: テーマ I・II 複合型幹事校の京都光華女子大学短期大学部から, AP 全選定校の連携を促進する取組について報告があった。</p> <p style="text-align: center;">〔 チーム AP 構想, AP 全テーマ合同報告会の開催 (H30. 1. 20) チーム AP 合宿 (H30. 9. 10～11) の開催, AP アーカイブの運用 等 〕</p>

13:40～14:30 選定校事例紹介1 (テーマⅠ 選定校による報告)

(1) 県立広島大学：「アクティブ・ラーナーの育成を目指す県立広島大学の取組」

登壇者：馬本 勉 学長補佐

概要：馬本学長補佐から、本学 AP 事業の取組について報告を行った。



シンポジウム会場及び事例報告の様子

(2) 仙台高等専門学校：「仙台高専における AP 事業への取組」

登壇者：仙台高等専門学校 川崎 浩司 准教授

概要：

- 仙台高専の AP 事業は、次に掲げる主な取組により、教員の意識向上や教育環境整備を進めている。これらの取組から、H29 年度の AL 導入科目（※）は 83.7% に上っている。
 - 教員研修の工夫：ありきたりのテーマや形式によらず、自由な雰囲気や発言できる双方向型 FD の実施により、AL に否定的な教職員との意見交換や問題共有が円滑化した。
 - インフラ整備：安価な備品購入の徹底、技術職員の協力、学生プロジェクトを通じた学生の手による教室改装により、低コストでの AL 実施環境を実現。学生にとっては、環境改善意識や課題解決能力が向上に寄与した。
 - 授業評価の改善：授業評価・即時改善システムの開発と運用（授業終了後、持ち込み端末により学生が授業を評価し、即時集計）により、授業 1 回ごとの授業改善を実現。これにより、授業の質向上や学生の満足度向上に寄与。
- 学生の成長評価：PROG テスト（河合塾が提供する、学生のジェネリックスキルを評価するテスト）により測定。AP 選定以降、学生のコミュニケーション能力等のジェネリックスキルは着実に伸びを見せている。
- 情報発信の強化：他高専への取組提供や、宮城県教育委員会との連携（包括協定締結）により、成果波及や地域との課題共有を推進。

※AL 導入科目の認定は、AL 実施時間数のみでなく、実践したスキルや使用した機器等を定量化し、基準に達した科目のみを認定。

14:45～15:35 選定校事例紹介2 (テーマⅠ・Ⅱ複合型選定校による報告)

(1) 山口大学：「総合的な大学教育改革のためのエンジン

～山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の使命～

登壇者：山口大学 林 透 准教授

概要：

- 山口大学 AP 事業は、次の 3 つの特徴的取組から教育改善を促進している。
 - AL ポイント制度（授業の AL 度合いを示す数値）により、授業内の学修行動を可視化。AL ポイントは、学生が授業履修の参考にできるようシラバスに掲載している。さらに、優れた AL 実践教員を「AL ベストティーチャー」として表彰し、AL ベストティーチャーを講師とする模擬授業型ワークショップ (2017 年度～) を開催することで、学内教員への AL 実践ノウハウの波及を図っている。
 - コモンループリック（科目によらず使用可能な、汎用性を持つループリック）を開発し、共通科目「山口と世界」で導入。シラバスと連携した運用により普及を促進。
 - 教員・職員・学生が意見を交わすワークショップの開催等を通じて、大学運営・改革への学生参画が加速している。また、学生の主体性を育む正課内外の取組開発にも努める。
- 学生の成長の可視化は、次の 3 つの取組を組み合わせることで実質化を図っている。
 - 山口大生に期待される汎用的能力の概念整理
 - 山口大学独自の学修成果可視化システムによる把握
 - 山口大学独自の DP 達成度可視化システムによる把握

- テーマⅠ・Ⅱ複合型選定校として、テーマⅠとテーマⅡの架橋を目指している。具体的な取組としては、ALポイントと学内各種調査（学生授業評価、学修行動調査、学修到達度調査）を多変量解析により分析し、AL実践と学修成果との間の因果関係の把握に努める。

(2) 長崎大学：「長崎大学における授業改善への取り組みと学修成果の可視化について」

登壇者：長崎大学 若菜 啓孝 教授

概要：

- 長崎大学のAP事業では、教養教育におけるアクティブ・ラーニングを積極推進している。同大学の教養教育は「モジュール型」（特定の課題の解決を目的としてパッケージ化された教養教育の科目群（モジュール）を、学生が選択し履修する制度）を採用しており、モジュール単位での効果的・効率的なアクティブ・ラーニング推進を行う。
- 学修評価については、これまで別個に運用していた各種学修評価のあり方を見直し、DPの達成度の評価という観点から設問を改め、一体的に運用・分析する仕組みとした。
- 学修ポートフォリオにより個々の学生の学修状況を把握している。学修ポートフォリオは、DPに即したルーブリックによる自己評価と、学内の他システムから自動反映される学修状況（履修状況、学修成果物の評価等）に基づき、総合的に把握可能な仕組みとなっている。

15:50～16:50 パネルディスカッション

- パネルディスカッションでは、選定校事例紹介の報告者4名が登壇し、フロアを交えた議論が行われた。全体を通じ、闊達な意見交換がなされた。
- ディスカッション後、参加していた大学教育再生加速プログラム委員会（日本学術振興会）の委員から、「AP選定校は、多数応募があった大学や高専の中から選ばれており、いわば全国の高等教育機関を代表して補助金を受けている。自大学のための改革にとどまらず、他大学への波及を十分に意識して事業に取り組んでほしい」とのコメントがあった。



パネルディスカッションの様子

16:50～17:00 閉会挨拶：京都光華女子大学 若井 彌一 副学長

■協議会について

テーマⅠ連携の取組は、成果発信など主として広報に関する取組が多く、今回の協議会でも広報推進について前向きな協議が行われた。一方で、本学はテーマⅠ連携による広報の機会を有効活用できていないため、今後は積極的に情報発信に努めたいと考えを新たにした。

■シンポジウムについて

- 本シンポジウムは全国から多くの高等教育関係者が参加しており、今回の事例報告を通じて、本学AP事業の成果を広く周知することができた。シンポジウム後には、馬本学長補佐のもとへ質問や情報提供の依頼が寄せられており、他大学への成果波及の観点から、大きな成果であったと感じている。
- 登壇した他校の事例報告からは、本学が課題としているいくつかの取組に対して有益な示唆が得られた。今後の事業企画に際して、必要に応じて参照して行きたいと考えている。
- また今回、多くの先導的な取組に触れ、類似する本学の取組について、優位な部分と改善を要する部分を確認することができた。本来、他大学は競合他社にあたるが、AP選定校というある意味で互恵的な関係の中では、教育に関する情報のやり取りが比較的容易である。この機会を活用し、先進事例と本学の取組を比較・相対化し、絶えずベンチマーキングを行っていくことも有効であろうと感じた。

感想

7-6 教育改革フォーラムの開催

本学 AP 事業の成果報告を行うとともに、学内外からの参加者とともに教育改革の在り方を考える「平成 30 年度県立広島大学教育改革フォーラム」を、平成 31 年 3 月 8 日（金）に開催した。今回は、平成 30 年度事業において重点的に取り組んだ、教員・職員・学生が一丸となり教育改善に取り組む「教・職・学」の協働に主眼を置いて成果を発信し、講師からの意見を交えながら、今後の在り方を議論した。また、開会前にはポスターセッションを開催し、学内教員が主体となり行うアクティブ・ラーニング実践等の事例報告を行った。

なお、本フォーラムは、本学が加盟する一般社団法人教育ネットワーク中国（ENICA）の「2018 年度第 8 回研修会・高大連携研究交流会」として位置付けて開催した。

(1) 概要

ア 日 時 平成 31 年 3 月 8 日（金）14:00～17:30

イ 場 所 県立広島大学 広島キャンパス 2143 大講義室（主会場）

庄原キャンパス 1201 講義室，三原キャンパス 1101 大講義室

ウ テーマ 「アクティブ・ラーナー育成に向けた『教・職・学』の協働」

エ 内 容 プログラムは次のとおり

時間	内容	登壇者・発表者等
13:20～ 13:50	ポスターセッション 「アクティブ・ラーニング実践報告」	各学科等からの代表教員
14:00～ 14:10	開会挨拶 趣旨説明	中村 健一 学長 馬本 勉 AP 事業推進部会長
14:10～ 15:20	基調講演 「生涯学び続ける自律的な学修者の 育成—教員・職員・学生の役割—」	中井 俊樹 愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室 副室長／教授
15:30～ 16:20	実践報告(1) 「平成 30 年度 AP 事業推進総括」	岡田 高嘉 総合教育センター准教授
	実践報告(2) 「『教・職・学』協働の取組報告」	教員:黒田 寿美恵 保健福祉学部教授 職員:越智 直子 庄原キャンパス事務部教学課教学係長 SA:山本 千里 総合学術研究科生命システム科学専攻 1 年 藤野 凌平 保健福祉学部看護学科 4 年 横山 千晶 人間文化学部国際文化学科 4 年
16:30～ 17:15	質疑応答・全体討議	モデレーター: 肥後 功一 島根大学副学長／ 本学 AP 評価委員会委員長 登壇者: 中井俊樹, 岡田高嘉, 黒田寿美恵, 越智直子, 山本千里, 藤野凌平, 横山千晶
17:15～ 17:25	講評	肥後 功一 島根大学副学長
17:25～ 17:30	閉会挨拶	西本 寮子 副学長
18:00～ 19:30	情報交換会	希望者

(2) 参加者数

(人)

	教員	職員	学生	学外 (一般)	学外 (ENICA)	合計
広島C	48	8	3	17	32	108
庄原C	20	2	0	—	0	22
三原C	35	2	0	—	2	39
合 計	103	12	3	17	34	169

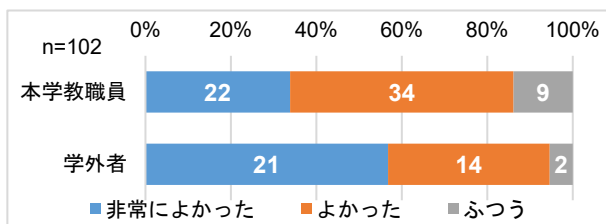
(3) 参加者アンケート結果

Q 1 所属

選択肢	回答者	割合
県立広島大学	69	66.3%
大学関係者(教員)	10	9.6%
大学関係者(職員)	12	11.5%
学生	0	0%
保護者	0	0%
初等・中等教育関係者(教員)	7	6.7%
初等・中等教育関係者(職員)	1	1.0%
その他	5	4.8%
合計	104	100%

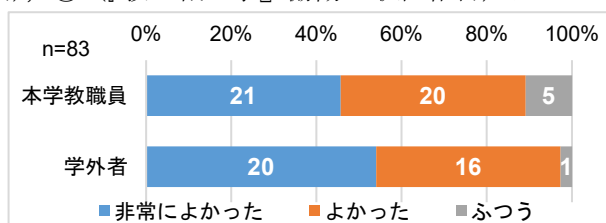
Q 2 基調講演「生涯学び続ける自律的な学修者の育成-教員・職員・学生の役割-」について

選択肢	本学関係者		学外者	
	回答数	割合	回答数	割合
非常に良かった	22	33.8%	21	56.8%
よかった	34	52.3%	14	37.8%
ふつう	9	13.8%	2	5.4%
あまりよくなかった	0	0%	0	0%
よくなかった	0	0%	0	0%
合計	65	100%	37	100%



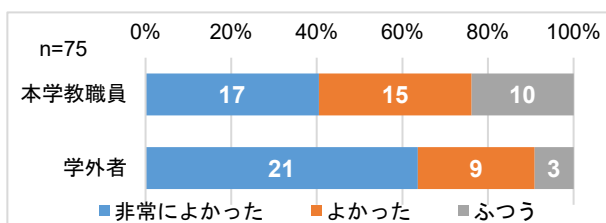
Q 3 実践報告①(平成30年度AP事業推進総括), ②(『教・職・学』協働の取組報告)について

選択肢	本学教職員		学外者	
	回答数	割合	回答数	割合
非常に良かった	21	45.6%	20	54.1%
よかった	20	43.5%	16	43.2%
ふつう	5	10.9%	1	2.7%
あまりよくなかった	0	0%	0	0%
よくなかった	0	0%	0	0%
合計	46	100%	37	100%



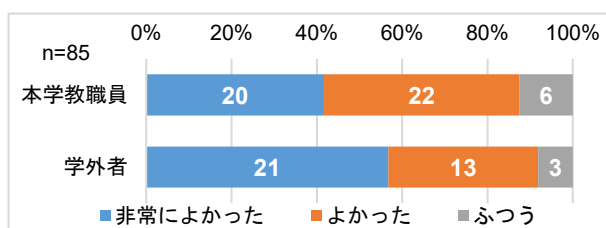
Q 4 質疑応答・全体討議について

選択肢	本学関係者		学外者	
	回答数	割合	回答数	割合
非常に良かった	17	40.5%	21	63.6%
よかった	15	35.7%	9	27.3%
ふつう	10	23.8%	3	9.1%
あまりよくなかった	0	0%	0	0%
よくなかった	0	0%	0	0%
合計	42	100%	33	100%



Q 5 フォーラム全体について

選択肢	本学関係者		学外者	
	回答数	割合	回答数	割合
非常に良かった	20	41.7%	21	56.8%
よかった	22	45.8%	13	35.1%
ふつう	6	12.5%	3	8.1%
あまりよくなかった	0	0%	0	0%
よくなかった	0	0%	0	0%
合計	48	100%	37	100%



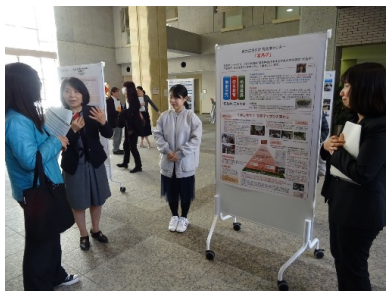
Q 6 フォーラムへの参加動機(当てはまるもの上位2つに○)

選択肢	本学関係者		学外者	
	回答数	割合	回答数	割合
県立広島大学の取組に興味があったため	18	21.9%	13	22.8%
アクティブ・ラーニングについて興味があり, その情報収集の機会として	49	59.8%	26	45.6%
「大学教育再生加速プログラム」に興味があり, その情報収集の機会として	10	12.2%	6	10.5%
教育ネットワーク中国(ENICA)の研修会・交流会として	0	0%	6	10.5%
その他	5	6.1%	6	10.5%
合計	82	100%	57	100%

(4) フォーラムの成果

今回のフォーラムは、平成 30 年度に重点的に推進した教員・職員・学生の協働をテーマとし、職員及び学生による実践報告も行うなど、従来とは一線を画した形で取組成果の発信に努めた。結果として、外部からの参加者が昨年度比で増加したほか、実施後アンケートでは極めて肯定的な評価が得られるなど、対外的に大きなインパクトを与えることができた。

(5) 当日の様子



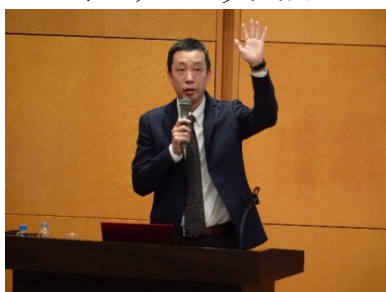
ポスターセッション



開会挨拶



趣旨説明



基調講演



実践報告①



実践報告②



全体討議①



全体討議②



全体討議③



全体討議④



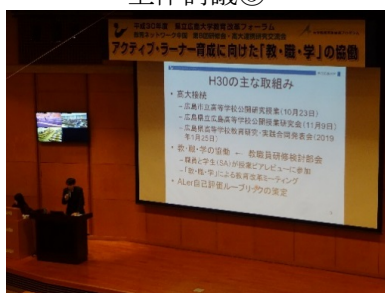
全体討議⑤



講評



閉会挨拶



会場の様子①



会場の様子②



文部科学省
大学教育再生加速プログラム「高大接続改革推進事業」
テーマI: アクティブ・ラーニング
(平成26年度選定事業)

大学教育再生加速プログラム

平成30年度 県立広島大学教育改革フォーラム

アクティブ・ラーナー育成に向けた「教・職・学」の協働



基調講演 中井 俊樹 先生

平成31年

3/8

金

14:00～17:30

受付開始 13:20～

ポスターセッション 13:20～13:50

参加
無料

県立広島大学 広島キャンパス 2143大講義室
広島市南区宇品東一丁目1番71号

◆プログラム

- 13:20～13:50 **ポスターセッション**
「アクティブ・ラーニング実践報告」
- 14:00～14:10 **開会挨拶・趣旨説明**
- 14:10～15:20 **基調講演**
「生涯学び続ける自律的な学修者の育成
ー教員・職員・学生の役割ー」
中井 俊樹 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室
副室長 / 教授
- 15:30～16:20 **実践報告**
報告①「平成30年度AP事業推進総括」
岡田 高嘉 総合教育センター准教授 /
AP事業推進部会部会員
報告②「『教・職・学』協働の取組報告」
黒田 寿美恵 保健福祉学部教授 ほか4名
・教員による取組報告
・職員による取組報告
・学生(学修支援アドバイザー:SA)による
取組報告
- 16:30～17:15 **質疑応答・全体討議**
モデレーター 肥後 功一
島根大学副学長(戦略企画担当) /
大学院教育学研究科教授
県立広島大学AP評価委員会委員長
- 17:15～17:30 **講評・閉会挨拶**
- 18:00～19:30 **情報交換会(参加費2,000円)**

◆対象

本学教職員・学生、大学・高校等関係者、高等教育に関心のある方

◆アクセス

- 【市内電車でお越しの方】県病院前電停から徒歩7分
【広電バスでお越しの方】県立広島大学前(広島キャンパス)下車徒歩1分
【広島バスでお越しの方】県立広島大学前(広島キャンパス)下車徒歩1分
※駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用下さい。



県立広島大学
Prefectural University of Hiroshima

お問い合わせ

県立広島大学AP事業担当(本部経営企画室内) 〒734-8558 広島市南区宇品東一丁目1番71号
TEL 082-251-9727 E-mail kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp

第8章

外部評価

第8章 外部評価

8-1 外部評価の概要

本学 AP 事業では、年度毎に取組を点検し、必要な見直し・改善を図るための事業の外部評価として、本学が設置する「県立広島大学 AP 評価委員会」による評価、及び日本学術振興会大学教育再生加速プログラム委員会によるフォローアップを通じた取組の点検・改善に取り組んでいる。平成 30 年度も、この 2 つの評価による事業の見直しを図り、事業最終年度の計画へと反映させた。

8-2 県立広島大学 AP 評価委員会による外部評価

8-2-1 概要

平成 30 年度の AP 事業の進捗状況を点検・評価し、次年度に向けて取組の改善を図るため、外部有識者委員会である「AP 評価委員会」を開催した。評価委員は、高等教育関係者 4 名、中等教育関係者 1 名、及び産業界関係者 1 名の計 6 名の委員により構成され、各自の専門分野や業務の見地から、事業の改善や教育改革の一層の推進に繋がる適格かつ有益な評価をいただいた。開催内容及び各委員からの評価について、詳細を次のとおり報告する。

8-2-2 開催概要

ア 日 時 平成 31 年 3 月 8 日（金）11:00～13:00

イ 場 所 広島キャンパス役員会議室

ウ 出席者

■評価委員 4 名（欠席 2 名）

所属・役職	氏名	備考	出欠
広島大学 高等教育研究開発センター 准教授	佐藤 万知 委員		欠席
東北大学 大学院教育学研究科 准教授	島 一則 委員		出席
島根大学 副学長／大学院教育学研究科 教授	肥後 功一 委員	委員長	出席
北九州市立大学 教授	見館 好隆 委員		出席
広島県教育委員会 教育部 高校教育指導課 課長	阿部 由貴子 委員		欠席
マツダ株式会社 常勤監査役	河村 裕章 委員		出席

※欠席した 2 名については、後日訪問・説明し、評価をいただいた。

■本学関係者 8 名

所属・役職	氏名
理事長（兼）学長	中村 健一
理事（兼）副学長（教育・学生支援担当）	西本 寮子
学長補佐・AP 事業推進部会 部会長	馬本 勉
AP 事業推進部会 副部会長	門戸 千幸
事務局次長（兼）本部経営企画室長	佐藤 哲義
本部経営企画室 主幹	川口 博之
本部経営企画室 主任	濱田 縁
本部経営企画室員	伊藤 俊

エ 評価項目

次の7項目について、それぞれ5点満点で評価及びコメントをいただいた。

(1) 県立広島大学型アクティブ・ラーニング (CLAL) の推進について
(2) ファカルティ・ディベロッパー (FDer) の養成について
(3) 学修支援アドバイザー (SA) 養成について
(4) 学修成果の可視化について
(5) 高大接続改革の推進について
(6) 広報活動 (テーマ I 選定校連携事業含む) について
(7) 平成 30 年度事業全体について

評価段階【5 非常に優れている・4 優れている・3 普通・2 やや課題あり・1 多くの課題あり】

8-2-3 評価委員からの評価一覧

	佐藤 委員	島 委員	肥後 委員	見館 委員	阿部 委員	河村 委員	H30 評価 平均	H29 評価 平均
(1) 県立広島大学型アクティブ・ラーニング (CLAL) の推進について	4	5	4	4	5	4	<u>4.3</u>	4
(2) ファカルティ・ディベロッパー (FDer) の養成について	5	4	4	4	5	4	<u>4.3</u>	4.2
(3) 学修支援アドバイザー (SA) の養成について	4	4	3	4	4	4	3.8	3.8
(4) 学修成果の可視化について	4	4	3	3	4	3	3.5	3.5
(5) 高大接続改革の推進について	5	4	3	3	5	3	<u>3.8</u>	3.5
(6) 広報活動 (テーマ I 選定校連携事業含む) について	5	4	4	3	4	3	<u>3.8</u>	3.3
(7) 平成 30 年度事業全体について	4	4	4	4	5	3	4	4

※「H30 評価平均」欄の下線部：前年度より向上した項目

8-2-4 評価委員からのコメント等

(1) 県立広島大学型アクティブ・ラーニング (CLAL) の推進について

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	4	順調に普及が進んでおり、また現状把握のための手法にも改善を加えている点。	これまでは、行動型学修、参加型学修という授業形態を指標としてアクティブ・ラーニングの普及を進めてきているが、そういった授業形態が増えつつある中で、改めて自分たちが目指すアクティブ・ラーナーとはどういった人物像なのか、ということ再検討することも重要かと考える。本 AP で定義するところのアクティブ・ラーニング型の授業が 100%になることを目指すよりも、学位プログラムとしてアクティブ・ラーナーの育成に成功することの方が、本質的には重要である。そこで、各専攻の文脈において、自分たちの専攻で学位を取得したアクティブ・ラーナーの姿を再定義してもらい、カリキュラムや授業形態が、そういった方向に学生が成長することを支援する形になっているのかを確認するといった作業に取り組んで見るのもいいのではないかと。

<p>B 委員</p>	<p>5</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・行動型学習の成果検証への展開 ・参加型学習に係るエビデンスに基づくニーズの高い物品の購入による学習推進 ・アクティブ・ラーニング実践事例集の作成の取組は、アクティブ・ラーニングの拡大、波及に向けた重要な起点として評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行動型学習について、実績の箇所の「別紙2」がどの資料を指すのかわからなかったが、仮に「実績一覧」を指すのであれば、成果検証結果（分析）が明らかになっているとはいえないのではないかと。これに関しては、学外実習等成果報告書の具体的な内容を紹介することが制度設計上もとめられているのでは？ ・参加型学習について、ニーズの高い物品の購入がどのような効果をもたらしたのか？といった点についても、利用状況や利用方法・効果などを、事例的にでも調べておくことは、考えてよいように思う。 ・アクティブ・ラーニング実践事例集は極めて重要な、県立広島大学における実践エビデンスであるし、拡大・波及の起点となりうるものであると考える。その場合、冊子を作成して配るだけではなく、多様な方法・機会でその内容（特にエッセンスの）周知・普及を進める工夫も同時に必要であるとする。またその前に、27編の事例のメタ分析を実施することにより、県立広島大学として、アクティブ・ラーニングを進めていくうえでの、重要ポイントなどを整理・明らかにし、ある種のエグゼクティブサマリーなどを作成するなど、配布以前の工夫の余地があるように思う。
<p>C 委員</p>	<p>4</p>	<p>2019.3.8 に実施されたフォーラムの際、先立って行われたポスターセッション「アクティブ・ラーニング実践報告」において AL の実践事例を拝見し、3キャンパスそれぞれに工夫を重ね、授業の AL 化について取組みを積み上げておられる実態がよくわかった。</p> <p>平成30年度は、行動型学修を取り入れる授業への経費助成の方法、実践事例集作成を通しての啓発、AL 実施状況の把握など、前年度と比べてよりきめ細かな計画管理が成されており、授業改善による教育の質保証・向上の PDCA が構築されつつある点を高く評価したい。</p>	<p>現在のところ、3キャンパスの授業を全体として AL 化していくことにマネジメントが傾注しており、その点については上述のようにしっかりと進捗管理がなされてきたと感じる。一方、大学授業の AL 化を推進する真の目的は、学生の主体的学修の推進であり、その結果、大学で身につけた専門的知識・技能を地域社会の課題解決に活かそうとする地域リーダーの育成であり、そのことに対する成果をどう捉えるかについて（今後への改善継続を考えると）取組を進めていくべきではないかと思料する。たとえば、本取組では「L字型」と称する仕組みで「教養科目」と「専門科目」との関係を構想しているが、それらの相互関係、カリキュラムツリーの構造化などへとつながることが望ましい。</p>
<p>D 委員</p>	<p>4</p>	<p>全学を挙げて、AL および CLAL の割合が増え、全国的にも AL 導入については誇るべき成果が出始めていると感じました。</p>	<p>これまでの取り組みの持続に留めず、完成形を目指してほしい。例えば、岐阜大学のように、貴学の AL を定義し、全学の指針として掲げ AL 導入を原則とする。そしてシラバスに「学生のアクティブラーニングを促す取り組み」という自由記述の欄を設け、必須項目とする（学生の学習意欲を高めることをしていない教員はいない）。すると、結果的に AL 導入は 100% となる。そして、ここに書かれた各教員の取り組みを共有する仕組みを創り上げれば、さらに貴学の AL は進化・浸透し、今後の入試広報にも PR できる事例が抽出できると考えます。</p>
<p>E 委員</p>	<p>5</p>	<p>平成29年度に引き続き、行動型学修および参加型学修からなる「県立広島大学型アクティブ・ラーニング」推進の具体的な成果検証を行うとともに、評価委員会等の助言を受けて、行動型学修の報告書でエビデンスの添付を義務付けるなど、具体的な改善策を継続的に行っている。</p>	
<p>F 委員</p>	<p>4</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・事務局サイドの取り組み姿勢が積極的で、且つエビデンスに基づく色々な取り組みをリードされており、数値には現れていない領域で、導入価値の認識と達成意欲などの意識は高まってきている。⇒数値に現れていない領域が多いので、表現には工夫要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・効果の確認をインサイド側で行なっているが、アウトサイド側(言い換えれば、学生の就職先 etc)の意見・認識をヒアリングする等の結果管理を行うのも一つかもしれない。 ・更に言えば、アウトサイド側に現場を紹介するのも良いのかも知れない。

(2) ファカルティ・ディベロッパー (FDer) の養成について

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	5	FDer というと、様々な役割を担う人物像と認識され、結果として何をすればいいのかわからなくなる、という課題に対し、組織的教育改善, AL 実践と普及, というように 4 類型に分け、役割を明確にしている点。	FDer が教育改革のチェンジ・エージェントとして成長してきていることは把握できるが、FDer が他の教員や学部、専攻においてどのような波及効果を及ぼしているのか、についての把握ができていない。
B 委員	4	<ul style="list-style-type: none"> ・FDer の量的充実が着実に進んでいる。 ・FDer の質的充実(役割分担、研修や「支えあい・学びあい」を通じたレベルアップ)が図られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・FDer の量的拡充や質的向上のための試みが、学生の学修成果とどのようにつながっているのかについては、必ずしも自明ではない。こうした点については、来年度に実施が予定されているアクティブラーナー・ポートフォリオの利用などと関連させて検証していくが必要になる。
C 委員	4	授業改善の必要性を感じ、自らの授業や所属するキャンパスの授業を改善しようとする教員集団が各キャンパスに着実に育成されつつある状況(新規 FDer の育成やピアレビューの実施など)は高く評価できる。また教員側の授業改善の取組を、職員や学生との協働に広げていこうとする方向性についても高く評価できる。	事業初期のスパート期を終え、充実・安定期に入ったためか、やや勢いを欠く印象もある。本来、FD がめざしているのは(組織的な教育力向上の取組を経た結果としての)個々の教員の教育力向上であり、そのためには大学教員が自らの「教育者ミッション」を自覚・省察し、加えてその実現に必要な授業改善を行うため、自らの努力に加え、教員集団や職員・学生と協働しようとする「体質」を身につけることが求められる。その前提条件となる授業ピアレビュー(授業公開及び授業者と学生と参観者との意見交換等)であるが、事業推進の思いは認められるものの、その広がりや反応については今一つの印象を受ける(ピアレビューのアンケート回収状況などから)。どの授業についても、特段の合理的な理由がない限り「常時公開」の原則を、全学的に確立してもよいのではないかと考える。まずはオープンにすることが、個々の教員の「教育者ミッション」の自覚につながるのではないか。
D 委員	4	FDer の養成・活動についても進展・進化していると感じました。	こちらについても、これまでの取り組みの持続に留めず(昔の FD 活動に戻ってしまう)、FDer が活動し、かつ学内でも評価される仕組み作りを完成形として目指してほしい。例えば、各学部において FDer が全国の研修に参加することを義務付け、その交通費を予算化し、教授会でその成果を発表しつつ、学内においても共有することを目指すなど(教員研究費が減る昨今、希望する教員は、幾ばくかいるはず)。また、教員評価についても AL への取り組みを必須項目とするなど、現在の勢いを最終形に向けて加速してほしい。
E 委員	5	F D e r による組織的な教育改善を推進するために、新規の F D e r を 2 2 名加えるだけでなく、教員、職員、学生(主として S A)が議論を交わす「『教・職・学』協働による教育改革ミーティング」を開催され、教育改善・改革を進める仕組みを構築されている。	
F 委員	4	<ul style="list-style-type: none"> ・「教・職・学」協働による教育改革ミーティングは 3 者共に、確実に刺激となっていると感じる。地道な継続は結果として必ず現れると思う。⇒継続して少しでも参加経験者を増やしていった欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業評価のアンケートの回収率が低いのは、アンケート自体の有効性にも影響するので、アップしていく必要がある。その為には、アンケートの質問を一層分かり易くすることも必要。例えば、「アクティブラーナーとしての・・・を感じる」を「積極的に・・・(具体的な行動指標)等で・・・する気になりましたか？」等とするのも一つだと思う。参観シートでの表現を参考にし、より具体的な内容とするのも良いと思う。 ・フリーコメントの一層の分析があれば良いと思う。

(3) 学修支援アドバイザー (SA) の養成について

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	4	SA が授業改善に協力する、 という仕組みの中で「学生の授業参加態度を評価する」という点を強調している点。	授業改善への協力活動を通じて SA が得た知見を、授業外の学修支援活動に反映する仕組みがあるといいのではないかな。
B 委員	4	<ul style="list-style-type: none"> SA に対する要望を調査している点やそれを SA に担当職員が連絡をしたり、調整するなどの丁寧な運用は評価できる。 SA の数が、今年度は昨年度と比較して一時的に減少しているものの、高い水準で一定数を確保できている点は評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 昨年 3 月時点 (129 名) と比較して、31 年 3 月時点の SA の数が減っている。このことは、各学年の SA の養成についてばらつきがあり、また長期的観点からの着実な育成という観点に一部問題があることを意味している。
C 委員	3	2019.3.8 実施のフォーラムの際の「実践報告 2」において、3 キャンパスからの 3 人の学修支援アドバイザー (SA) の発表を聞き、またその後の討議において意見交換することができた。これを通じて、学修に向かう本当の意欲・主体性を持ち、自らの専門性を高めることを通じて目標を持って社会に飛び立とうとする学生が育っていることを感じる事ができた。人と向き合う際の姿勢と自らの言葉が育っていることは、本事業の取組みを通しての貴学の大きな成果である。	上述のように AP 事業の成果という観点から見て模範的な学生多く育ってきているであろうと想像できるが、この活動に関する学生の側からの主体的接近という点に課題を感じる。入学時より学生の側から、こうした学修者モデル (ひいてはロールモデル) を自らのモデルにしていけるような「仕組み」を構想していく必要があるのではないかな。もちろん事業初期としては、「先生から言われたので」とか「周囲から勧められて」といった受け身の動機が出発点となることはやむをえないことであるが、なんらかのインセンティブや就職活動上のメリットなどをアピールしたり、入学式で SA 資格をもつ先輩学生を表彰したりといった取組を通じて、入学当初から主体的学修者モデルを提示していく必要もあるように感じる。
D 委員	4	学修支援アドバイザーについても、進展・進化していると感じました。	こちらについても、アルバイト料の予算組や、人数ありきのルーチンワークにならないように、まさに学生が主体的・対話的に、貴学での学びを活発に活用する「アクティブ・ラーナー」として学びを進化させる雰囲気づくりに取り組んで欲しい。例えば、宇都宮大学や岐阜大学のラーニングコモンズのように、学習支援アドバイザー自身が、履修方法やレポートの書き方、ビブリオバトル、TOEIC などの点数 UP 講座、メールの書き方、プログラミング講座など、学びの支援するプログラムやイベントを立案し、実施することを促進する仕組み (人員) を用意することが重要ではないかと考えます。
E 委員	4	授業ピアレビューや『「教・職・学」協働による教育改革ミーティング」への参加により、SA 自身が自らの学修姿勢を振り返る自己省察の場面となり、意義があると考ええる。	これまでも SA 活動の成果分析も行われているが、各キャンパスの好事例等も共有する機会があれば、SA 自身の活動に対する意欲向上にもつながるのではないのでしょうか。
F 委員	4	<ul style="list-style-type: none"> 「教・職・学」協働による教育改革ミーティングへ、アドバイザーが参画する取組を実施され更なるレベルアップに繋がっているようだ。⇒「教・職・学」協働による教育改革ミーティングをより有効的に活用して頂きたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 「教・職・学」協働による教育改革ミーティングでの養成を、教職希望の学生のプログラムとして、継続的に活用されることを考えられてはと思う。

(4) 学修成果の可視化について

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	4	学修成果の可視化はとても難しい課題であるが、学生が自分自身の学びの状況の評価できる自己評価ルーブリック、および授業のためのルーブリックの作成に取り組み、試行している点。	試行段階なので、これから、結果を踏まえながら改善に取り組んでもらいたいが、ルーブリックの導入については、愛媛大学社会共創学部や広島大学の HiPROSPECTs 等、先行事例があり、ルーブリック導入における課題等がすでに指摘されている。そういったものを参考に、仕組みづくりに取り組むと良いと考える。
B 委員	4	・学修成果の可視化に向けた ALer 自己評価ルーブリックの改定が進められて、来年度期初より利用される状況となったことは評価できる。	・仮に自己評価ルーブリックが用いられるようになったとしても、実際にこれらを用いたうえで、学生の学修成果が向上していることの検証や、CLAL、FDer、SA などと学修成果との関係が検証されなければならない、こうした点は今後改善・取り組みが求められる。
C 委員	3	「ALer 自己評価ルーブリック」が作成されるとともに、科目ルーブリックに落とし込んでの活用や、チューター面接を通しての自己評価の客観化など、ルーブリック導入に伴って実施されるべき課題が認識され、かつ一定程度取り組まれていることは高く評価できる。	一方、教養及び専門の授業全体の中で、ルーブリック評価を取り入れている授業はどれくらいあるのか...といった、貴学の授業改善全体の中で、ALer ルーブリックを位置づける必要がある。このことは学生の自己評価能力（省察力）を高めることにもつながり、自身の学修についての成果と課題を多層的に自己評価できる能力を育成することが重要である。
D 委員	3	IR を軸にした PDCA サイクルの回転には、まだ至っていないと感じました。	前述したが、全学において AL 導入を掲げ、DP として定義し、それらが各授業・授業外活動で向上しているかどうかをチェックし（ルーブリック及び IR）、その結果を踏まえて必要な FD を実施する仕組みを最終年度にて創り上げてほしい。PDCA サイクルで言えば、PD で止まってしまうように。 例えば、北九大の1年生向けキャリア教育では、コルブの経験学習を簡略化したもの、すなわち「すぐ試す→振り返る→体験を言語化する→仮説を立てる→すぐ試す・・・」プロセス自体を身に付けるように指導をしている（まだ試行錯誤中ですが）。急速に IT やグローバルの視点で変化する社会において、DP で掲げる力の獲得に留まらず、学び続ける姿勢自体を身に付けることが肝要と考えます（アクティブ・ラーナー）。その必要性を全学生および全教員に浸透させて欲しい。学生であれば、入試広報はもちろん、入学ガイダンス、キャリア教育、そして成績評価においても組み込み、その取り組みを「自分事」にする。教員であれば、教授会において共通認識を図りつつ、授業や授業外学習への AL の導入についても、教員全員が「自分事」として取り組むことを、目指して頂きたいと思います。
E 委員	4	自己評価ルーブリックの運用制度が次年度前期から全学生による自己評価としてスタートし、半期ごとの面談等により、担当チューターを含む他者評価も受けながら、成長できる仕組みの構築によって継続的な教育改善に大いに期待する。	運用開始後の課題を把握し、ルーブリック等の改善が引き続き行われるようお願いしたい。
F 委員	3	・何とか仕組みとして活用の目途が立ったようだ。	・実際に実施してみて、どのような結果になるか確認要だが、ある程度の予測を構築しておいて予測との差異分析で振り返りをすると、次のステップに移り易くなると思う。

(5) 高大接続改革の推進について

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	5	高校との連携も取られており、また共同のプロジェクトも立ち上げており、十分だと考える	
B 委員	4	・授業見学、合同発表会・事業 PR・共同研究など様々なチャンネルを通じて高大接続の強化に努めている点は評価できる	・ただし、何のための「高大接続」なのか、本事業との関連でこうした内容を整理する（もしくはそれが伝わりやすい表記を改める）必要がある。本事業の推進があくまでアクティブ・ラーニングの推進にあるのであれば、そうしたアクティブ・ラーニングを切り口として高大連携であることを、より説得的・積極的に伝える・表現する必要がある（「教育課程の不断の見直しによるアクティブラーナー育成」「アクティブ・ラーニングに関連する内容の、高校教員と連携した共同研究が進展」などの表記では、評価者にはその価値ある取り組みの趣旨や内容が十分に伝わってこない）。
C 委員	3	30年度においては、高校の授業見学、授業実践に関する高校との合同発表会、高校生や高校教員への事業 PR、高校と連携した共同研究の推進という広範にわたる4つの事業に取り組まれている。地元を中心とした高校との共同の取り組みに貴学の名前が頻出するようになることがまずは重要であり、そのような意味での量的成果は着実に積み上がっているように思われる。	高大接続の取組みは、言うまでのなく次項(6)の広報活動ではないので、高校へのアピールが目的ではない。地元高校生がどれだけ「大学での学修」への意欲を高めたか？目的をもった大学進学のために高校での主体的学修が促進されたか？が、その成果であろう（もちろんその進学先が貴学であることが望ましいが）。その際に、県立広島大学での授業（教育活動）の魅力が伝わって、その結果、それに触発されて学びたい高校生が現れた、増えた...ということが大切。そのための柱となる方策は、大学開放やアウトソーシング（出前授業）を通じて大学授業の活力・魅力を高校生に向けて発信する取組みである。その観点からはあまりALに拘らなくてもよい面もあると考える。
D 委員	3	ALと繋がる高大連携の取組みについて進展はしているが、今一つではないか	ご存知の通り、学習指導要領の改訂によって、これまで「総合的な学習の時間」として実施されてきた科目が「総合的な探究の時間」に変更され、2019年度入学の高校1年生から「探究」という科目に取り組むことになっています。どの高校でも、「答えの無い課題（特にSDGsに繋がる課題）」をどうやって見出すかについて試行錯誤していますので、貴学のターゲット校にアポイントを取り、貴学のゼミなどで取り組んでいるSDGsの課題について、ゼミ生と連携して取り組むことを提案します。本学の地域創生学群ではそれを積極的に行っています。
E 委員	5	高等学校までの学びの内容や実践を踏まえて、継続的に取組を進めている。	
F 委員	3	・共同研究や高校への事業 PR等の取り組みで、高校側の認知度はかなり上がってきていると思われる。	・大学の出口ともなる就職先の一つともなる高校の教職を志望する学生が、積極的に参加できる仕組みがあっても良いのではないかと。

(6) 広報活動（テーマⅠ 選定校連携事業を含む）について

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	5	十分に組み込まれている。	
B 委員	4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県立広島大学のアクティブ・ラーニングに関する取り組みが、着実に公開され、情報紹介が進んでいる点は評価できるし、一方的なものではなく、社会的に（他機関から）そうした情報提供の依頼があるということが、グッドプラクティスであることの顕著な証明となっていると考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 上述したポイントについては報告書上のより明確な区分があつてよいように思う。 ・ ただし、こうした公開・情報紹介の量的水準にはまだまだ改善の余地があり、紹介に足るコンテンツ（例えばアクティブ・ラーニング実践事例集）なども含めて、今後より戦略的に公開、発信していく必要がある。
C 委員	4	<p>大学案内における AP 事業の掲載、高校に向けた発信（<i>imagine</i> 誌上での教育改革のアピール）、新たにアクティブ・ラーナーの紹介動画を用いた広報活動など、積極的な発信を行っていると認められる。発信に値する事業成果の蓄積が充実してきたことの証でもあろう。</p>	<p>特にないが、可能であれば、貴学のこうした発信に接した高校生や市民の反応（あるいは改善に向けたフィードバック）が取ればよいと思うし、たとえば「県立広島大学広報活動モニター」などを募集する（あるいは学生の保護者の中から候補を募る）などが考えられるのではないか。</p>
D 委員	3	<p>積極的に AL の成果を学外に発信していると感じましたが、高大接続を軸に、もっと派手にやっていたいとも感じました。</p>	<p>前述したターゲット校との高大連携を軸に、積極的に「AL の県立広島大」を高校生および進路指導教員に認知させ、ひいては立教大学経営学部のように、貴学に行けばアクティブ・ラーナーになれるといったメッセージを、入試広報に溢れんばかりに PR することを望みます。</p>
E 委員	4		
F 委員	3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各種活動への参加・発表などを通じて活動されているのは認知できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 誰に広報するのかターゲットを再度明確にして、どのようにアピールしていくのかを考えてみられればと思う。

(7) 平成 30 年度事業全体について

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	4	組織として、継続して、精力的に教育改革に取り組まれており、自己評価もきちんとできている	<p>改善すべき点ではないが、最終年度ということで、ここまでの取り組みが、教職員、学生あるいは関係する地域や高校などにどのように捉えられているのかを把握することも重要であろう。例えば、CLALがある程度普及した今だからこそ、改めて、自分たちが目指す「アクティブ・ラーナー」とはどういう人材像で、どういった教育プログラム、授業によってそれが担保できるのか、ということが議論できるのではないかと考える。(以前は、アクティブ・ラーニングとは何か、というところで議論が終わってしまうので、この状況になって初めてより深い議論が可能かと考える)これから10年、20年の県立広島大学の教育のあり方を議論するような場を設けてみてはどうだろうか。</p> <p>また、ここまではAPで得られたデータを中心に取り組みの評価を行ってきたが、学内には多様なデータがあると考え。例えば授業評価アンケートや教員評価、卒業生調査など。そういったデータも含めて、県立広島大学の教育がどう変容してきたのか(あるいははしてきていないのか)を把握する分析に取り組むといいと考える。</p> <p>3点目に、現在の様々な取り組みが大学の日常活動として落としこまれるためには、組織体制の見直しや組織的活動の見直しなどが重要になると考える。</p> <p>最後に、これは今後の課題かもしれないが、学生に対する働きかけをどうするか、という点について考えることも重要であろう。これまでの取り組みは教員に働きかける内容が中心となっているが、そもそも、義務教育ではない、という点において、学生には学ぶ場に参加をする責務があると考え。自分の選択に責任を持ち、その場で求められている責務を果たす、ということが自律した大人と考えるのであれば、自分の学びを促進するために、自分は何をし、大学には何をしてもらいたいと考えるのか、ということ自ら問うことができるようになってもらうことが重要である。そのために、大学として学生にどのようなメッセージを発信し、自覚してもらおうような取り組みをするのか、について考えていくべきなのではないか。</p>
B 委員	4	<ul style="list-style-type: none"> すでに上述したように、総じて優れた取り組みがなされており、そしてそれらの蓄積が事業期間内において多くの改革を生み出していると評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> これらの蓄積が学修成果(ALerポートフォリオ)とどういった関係があるのか、その検証と限られた期間では困難を伴うことを認識しつつではあるが、そのフィードバックが大事になる。また、評価者の経験に基づけば、こうした学修成果が「数値」で(もしくは量的に)シンプルに期待通りに確認されることは、むしろまれであり、そうした時(本来生じているであろう効果が調査の設計やサンプル数の問題等によりきちんと把握できないような場合において)に質的な検証(事例分析)も同時に求められるであろうことも予期しておくことが肝要であろう。
C 委員	4	高評価であった中間評価の際に付された留意事項にも対応し、平成30年度のフォローアップにおいても、基本的には順調な進捗が確認されている。事業期間の延長によって加えられた後半3年の新たな課題に対しても対応すべく、もともと核としていたALによる大学教育改善を、その成果の見える化や高大接続にまでウイングを広げて実績を上げてきた。またそうした成果を積極的に発信し、教育を軸とする大学として県立広島大学のプレゼンスを高めていることも評価できる。	<p>* (1)でも述べたが、大学授業のAL化を推進する真の目的は、主体的学修者の育成であり、大学で身につけた専門的知識・技能を地域社会の課題解決に活かそうとする地域リーダーの育成である。最終年度に向けて、さらに貴学の教育の継続的改善を考えると、取組み成果の中長期的評価として、たとえば次のような視点をもつことも有効ではないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 取組期間中にGPAはどう変化したか(教養、専門基礎、専門などの別に) 従来より幅広い授業科目を積極的に選択する学生が増えたか(あるいはそのような仕組みに誘導するカリキュラム改善を行ったか) 留学やインターンシップなど行動型ALに取り組む学生は増えたか(あるいはそのような機会を増やしたか) 大学時代に自ら培った志向性を活かそうとする新しいキ

			<p>キャリア選択行動が増えたか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・より高い専門性を目指して意欲的に大学院に進学する学生が増えたか <p>*教員の教育力向上に関して、フォローアップ評価の指摘にあるように「教員の個人評価に反映させる」という考え方もあろうし、また多くの国立大学ではそのことが求められ対応してきた。一方、そのようないわば「鞭による教育改善」には必ずから限界があるし、本質的でもない。(2)でも述べたが、本来、FD がめざす(組織的教育改善に伴う)個々の教員の教育力向上の最終的な姿は(もちろん共通化された授業スキルを習得した上でのことだが)、各教員が魅力ある授業者となり、その学部・学科でしか体験できないような個性的で魅力的な授業の数々が並ぶ大学となることである。そのための第1歩としてピアレビューを置くことは一般的ではあるが、どちらかという他者との協働が不慣れで不得意な教員の多い大学という環境においては、Web 等を活用して、各人が自分の授業の課題(弱点や改善点)を自己診断できるようなシステムを構築するなどの方法も有効ではないかと思われる。最終年度に向けて、独自の特色ある、そして全国の範となるような有効な取組みを示されるよう期待する。</p>
D 委員	4	おおむね順調に実行できていると感じました。	これまで誇るべき成果は十分出ていると思います。是非、持続することだけに留まらず、最終形を目指して、「ALの県立広島大」になってください。
E 委員	5	年度ごとに成果と課題を明確にし、事業の各取組が有機的につながるように、評価委員会等での意見を踏まえて、前年度の課題に対する具体的な改善策を実行され、評価できる。	
F 委員	3	<ul style="list-style-type: none"> ・堅実に、且つ確実にやるべきことが、ほぼ計画通りに実施されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アクティブラーナーを養成するのが第1義ではなく、県立大の出身者はどうあって欲しいかを基に、どんな実力をつけて欲しいか再度議論されてはと思う。次のステップに移行するには「ビジョンとミッション」をベースに再構築することも必要と思う。 ・県立大のブランドをどうしたいのか十分に議論し、その為にどんな事をしておくべきか、考えてみることも重要であると思う。

8-3 日本学術振興会大学教育再生加速プログラム委員会によるフォローアップ

各年に一度実施される当該フォローアップについて、依頼に基づき作成・提出した平成 30 年度実施状況報告書に基づき、本学の取組について評価を受けた。評価や指摘事項の内容は、pp.154～155「フォローアップ報告書」のとおり。

※平成 30 年度事業のフォローアップは令和元年度に実施。

大学教育再生加速プログラム(AP) 平成30年度フォローアップ報告書

大学教育再生加速プログラム委員会

大学等名	県立広島大学	整理番号	2
テーマ	テーマ I (アクティブ・ラーニング)		
取組学部等名	人間文化学部、経営情報学部、生命環境学部、保健福祉学部、総合教育センター		

1. 進捗状況の概要
<p>■順調に進捗している点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・AP事業推進部会、ファカルティ・デベロッパー(FDer)連絡調整ワーキンググループにより事業が推進されており、特にFDer自己評価ルーブリックの作成は、到達目標だけでなくFDerの役割分担を明確化した。 ・主な取組と成果は、FDer養成及びFDer相互の授業ピアレビュー、学修支援アドバイザー(SA)養成、行動型学修、参加型学修への継続的な支援とともに、学修による学生の成長を測定するためのアクティブ・ラーナー(ALer)自己評価ルーブリック作成である。 ・補助期間終了後の継続発展に向けた取組では、比較的大きな経費を要する行動型学修推進経費の助成基準や運用方法の見直しに着手している。 <p>■課題(今後対応状況の確認を必要とする点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な取組がなされているが、事業の実施状況からは、事業概要にある教育改革との対応が捉えにくい。全学共通教育との対応はつくので、専門教育における体系的に組み立てられた教育プログラムとの関わりにも重点をおいた説明が求められる。
2. 中間評価時に付された留意事項への対応
<p>■順調に進捗している点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業の改善に向けた取組については、FDerグループが中心となって相互に情報共有を進めながら事業を推進するなど、個の取組から組織的取組への質的転換が図られている。 ・アクティブ・ラーニングへの取組はFDer養成講座などを通じて一般教員へと波及し、アクティブ・ラーニングを実施する専任教員数も増加している。 ・FDerのあり方については、養成講座を通じて明確化され、授業ピアレビューが行われている。 ・平成29年度は93名のSAを養成し、教員と連携したSA活動及びFDerグループによる継続的なフォローを行えるようにしている。 <p>■課題(今後対応状況の確認を必要とする点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員のアクティブ・ラーニング等教育改善への取組を業績として評価する仕組みについては、準備中であるので早期の実現が望まれる。 ・学部間の取組の違いについては、学部間での相互参照システムの構築に向けた検討が行われ、各授業者の採用している行動型・参加型手法の内容把握と傾向分析が行われている段階であるが、補助期間も後半であることから対応が急がれる。
3. 達成目標と事業内容
<p>■順調に進捗している点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必須指標では、アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合及びアクティブ・ラーニングを行う専任教員数は目標を達成している。 ・任意指標のうち、授業公開実施科目数、ファカルティ・デベロッパーの人数、学修支援アドバイザーの人数、ラーニング commons の利用者数などが目標を達成しており、AP事業の全学的波及を示唆している。

<p>。</p> <p>■課題(今後対応状況の確認を必要とする点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標を達成していない必須指標のうち、学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間は目標値の半分に留まっているものの、算定方法によれば時間数は増えることも示されており、適正な基準に基づく効果判定が望まれる。 ・学部間で任意指標の達成度が異なるが、学部の事情を考慮した指標を用いているので、各学部とも引き続き目標達成を目指すことが求められる。
<p>4. 事業経費その他特筆すべき事項</p>
<p>■順調に進捗している点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育改革フォーラム開催、広島県高等学校教育研究・実践合同発表会などに加え学外での成果発表も順調に行われている。 ・大学経費も充ちつつ参加型アクティブ・ラーニングの実施環境の充実に努めている。 <p>■課題(今後対応状況の確認を必要とする点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成29年度の活動については大学WEBに掲載されているが、徳島大学がテーマ幹事校として整備しているActive Learning Onlineサイトには、県立広島大学の情報が1年以上更新されておらず、さらなる情報発信が望まれる。

平成30年度
県立広島大学大学教育再生加速プログラム(A P)
事業報告書

公立大学法人県立広島大学
A P 事業推進部会(本部経営企画室内)

〒734-8558

広島県広島市南区宇品東一丁目1-71

TEL : 082-252-9727(ダイヤルイン)

FAX : 082-251-9405

平成31(2019)年3月発行